

淨瑠璃通解

第二編

竹本攝津大塚
竹本彌太夫
山本九馬亭
竹本章太史
淨瑠璃通解

著 贊助

第二編

東京博文館藏版

多年御苦心の淨瑠璃通解彌々此度出版に相成り、定めて御満足之事と存じます、今の世間、之を語る口、之を聞く耳のみ徒らに多くて、之を見る目の甚だ拂底な折から、斯様な御著述のあるのは、只に文壇のみに止まらず、世間一般の満足も、また此上無い事と信じます。是が御賀びの辭。但しこれには御満足が出来ますか如何か？

癸卯九月

小

波

九馬亭主人

御書と同時に。此贈附被下候御新著。淨瑠璃通解第一篇。正に拜見仕り候。かねてかゝる御企候由は。承り及び候ひしが。思ひしにもまして。速なる御刊行。印刷其他の體裁もよろしく。取分け御註釋の雅俗にわたりて。簡明に取舍よろしきを得たるは。尤も悦ばしく存じ候。維新前を隔つる事。僅に數十年の今日ながら。制度、文物、世態、風俗の激變の爲めに。今日の學者社會にとりては。元祿の或俚諺は。詩經萬葉の句ほどにも耳遠く。文化文政の通語さへも。平安朝のみやびことばと。同じつらに見なされゆくけふ此頃。時勢の需要より申す時は。とくにもかゝる著の世に出づべかりし筈なるを。前人の下ごしらへ絶えて無ければ。勞と難とは存外に夥しく。彼の古き物語などを釋するの比

にあらねばか。大かたはたゆたひ憚り。廣くわたりて爰に手を
下す向の。いまだ全く闕如たりしに。前後十二卷と名のりいで
ゝの此度の御先登。先づ以て人意を強うするに足り。いと愉快
に存じ候。望むらくは此の好著をして。單に溫古の料たるにと
ゞまらしめずして。長く新文藝を鼓吹するの。誘縁たらしめ候
はんことを。勿々不宣。

九月九日

坪内雄藏

山本信吉様

几下

貴書貴著博文館より轉致いたし拜見仕候。開卷先づ微笑を催し申し候は。阿古屋の條に東京の或る學者とあるは拙老に候。六七年前六波羅密寺の住職玉井豐如師より。寺内に有之阿古屋塚は如何なるものにやとの問合に付。平相國の薨ずる六波羅に荼毘し經島に葬ると盛衰記にあるに因り。阿古は下火にて清盛の火化場ならんと申答候き。何ぞはからん其説の貴著の上にあらはれんとは。さてく思ひきやにて候也。

琴責の末段。撥利生ある糸さばきとある句註に。妙味ふべしとのみあるは。語つて精しからざる様に思はれ申候。バチリシヤウの本語は。罰利生にて。利生とは利益衆生の約言に候。神佛の

冥利冥罰。これぞ人間の信賞必罰。即ち重忠の裁決を稱揚したる文に有之候。其罰を同音假借に取り。三絃の撥に轉用したる所こそ。妙味と申すべけれと存候。拙老が前年先代萩通釋をものせし時。かゝる手落ち多く候間。御注意までに一言いたし申候。

伊賀越は通覽いたし候へども。熟覽の暇なし。將又既刊の書にては。六日のあやめとも存じ候間。わざと差扣申候。

さて次篇は菅原のよし。此淨曲に就ては柳亭種彦の説とて。曾て聞及申候一説あり。これも或は十日の菊なりや知らざれども。のらんの香に申述申候。

手習鑑は延享丙寅八月竹本座の操狂言にて。並木千柳三好松
洛竹田小出雲の三人合作なり。これよりさき竹本座は不入打
續き。持堪さへ無覺束。必死の場合に立至り申候に付。三人にて
首を鳩め。天神様へ祈誓をかけ。此曲を合作いたし申候よし。其
上親子の別れといふを三ヶ處入れる相談ありて。一人くゝに
引受け。最初菅丞相と菰屋姫との生別は。千柳の筆とか。次に櫻
丸腹切にて白太夫と死別は。松洛の手に成り。終りに出雲が工
夫に出でたる。松王夫婦が小太郎との首の別れ。いづれも親子
の別れなれど。一々其狀を殊にし。見物をして其重複を覺えざ
らしめし技倆は。古今の名作にて。又古今の大當り。竹本座も蘇

生と相成申候と。梅彦老人が師説なりとて。毎々語る所にて候き。

貴著に對しかゝる事申さんは。遼豕を免れずとは存じ候へども。いさゝか龍髯を走らせしは。貴書に酬ゆるまでに候。かしこ。

癸卯九月十四日

大槻如電

山本信吉様

自序

此書は題號の如く。通解を専らとする書にして。趣向文章の批評などは。なるべく省きたり。注釋すら可なり面倒なるに。かゝる事を亂雜に書つらねたらんには。讀む人も煩はしく。且一二の方より。注意もありたればなり。まして菅原傳授寺子屋の如き名段に至つては。首尾應照文章字句等を。思ふがまゝあげつらはんには。優に一小冊子をなすべし。されば此等の事は。書を別にして出すより外。いたし方なからんか。

注釋の古書に。穗積先生の難波土産。賽笠翁の瑠璃天狗等あれども。小冊子にて極めて一局部にとゞまり。且あらまかしければ。價值ある参考書とも思はれず。近頃新しく出でたる書もあるやうなれども。恐らくはいづれも。一局部の小冊子にして。多

くは批評の書のみならん。注釋のたよりとすべき程の好著は。聞きも及ばず。さればこれ等の書には目もふれず。皮切の事業として。淺學寡聞をかへりみず。書籍乏しき辟地に。うづくまり居て。自ら取調べ問合せつゝ。机上にあみ出すわざなれば。及ばざるふし多からん。讀者御心づきの點は。御注意又御教示を賜りたく。これ著者の最も悦ぶ所なり。

大槻翁の御注意を賜はりし。菅原傳授著作の由來は。著者も幸に聞及び居たれば。編首に略論し置きたれど。かゝる事に暗きは。自ら信じ居るゆる。翁をはじめ大方の教を俟つ。又翁が注釋の手落ちについての御注意は。深く感謝いたし候。

九月廿八日

第壹編訂正

服部か國分か(伊賀越岡崎の段) 國分は解の如く薩摩なるべし。服部は友人猪頭君(攝津三島郡高槻の人)の話に、高槻の北一里ばかりに、服部とて煙草の名産地あり。これなるべし。數年前までは盛に培養し、最上の銘葉は極めてきつくして、普通の喫烟家は之を味ふに堪へずと。余註するに當り、二三の老爺烟草吸ふに問合せたるが、之を知らざるもいふかし。

南蠻流の隣りの今宮流全伏見の段 此は小西來山が句、今宮は虫處なり、蠻なりより書き、南蠻に難波をよせて、南蠻流の隣りの今宮流といへるなり。今宮は難波の南に隣る。第壹編の見本通讀の節、ふと思ひつけるを、後に彌太夫氏より此話ありたり。其折、現今専ら語る伏見の段は、改作せしものなりとて、書本を示さる。半二の原作を本とせるは、論なき事ながら、趣向異なる所あり。文章は感服せず。なほいたき箇所あれど、さのみはとて省く。

淨瑠璃通解第貳編

目次

菅原傳授手習鑑……傳授の段……	一〇
菅原傳授手習鑑……八聲の雞の段……	三八
菅原傳授手習鑑……道明寺の段……	四四
菅原傳授手習鑑……車曳の段……	六〇
菅原傳授手習鑑……佐太村の段……	六九
菅原傳授手習鑑……飛梅の段……	一〇五
菅原傳授手習鑑……寺子屋の段……	一二三
菅原傳授手習鑑(追加)松王屋敷の段……	一四八

近頃河原の達引……………堀川の段……………	一六〇
傾城戀飛脚……………新口村の段……………	一八二

目

次
終

淨瑠璃通解第貳編

菅原傳授手習鑑

總解

京都北野に跡垂れて。我國二十二社の一に數へられ。世々皇室の尊信淺からず。神人はこれを現人神とたゞへ。佛者はこれを權化の身とやまひ。經史に和歌に詩文に筆道に。和漢の學者口を極めて賞嘆し。直に其名をいふを憚つて。或は天神と稱し。或は北野と呼ぶ。六十餘州到る處に分祀して。靈驗唯一の神とたふとび。足の踏む所衣の觸るゝ所。悉く名所舊蹟となりて。後人の訪ひとむら

山本九馬亭著

竹本攝津大椽
竹本彌太夫贊助

ふ。天滿大自在天神菅原道眞公は。そも如何なる人ぞ。功一世を蓋ひ徳萬世を霑す。救世の大々偉人にあらざるよりは。此尊崇をうくるに價值せざるなり。公は果して其價值あるか。

公が人間の史は甚だ少く。神異の傳は頗る多し。公は此神異傳中に十襲せられて。世の尊崇をうけ。永く其本體を拜する事能はざりき。近年公の一千年祭に當り。文明の新智識を具へたる大家先生。争つて其襲を解き。各自獨特の慧眼を以て。評價を下されたり。所謂岡眼おかめ八目はちめなる所あらんも。亦其眞價を知るにちかゝらんか。余不幸にして未だ其著を閲ず。

思ふに。公は英雄にあらず。英雄は當時に用なきなり。才子にもあらず。才子ならば讒を容れしめず。策士にもあらず。策士ならば經營する所あり。只溫厚の人なり。誠實の士なり。博覽の學者なり。溫厚なるがゆゑに人之に服し。誠實なるがゆゑに人之を戴き。博覽

なるがゆゑに人之を推す。乃ち服戴推の三者を以て。一世の衆望
を取め。上天皇(醍醐)上皇(宇多)の御信任厚かりしなり。されば破格
を以て鼎台の高官に登るも。一人の之を誹議するものなく。只驕
慢血氣の最高門閥家數輩が。己が權勢を奪はれんことを恐れて。
忌憚せるのみ。不幸にして此輩の讒に罹り。一榮の春に咲き匂ひ
し身が。忽ち一落の秋にはふれて。西海に沈落(延喜元年)せられし
かば。公を信ずる者。誰か同情の涙を灑がざらんや。まして配所に
薨ぜらるゝ(同三年)に至つては。知るも知らぬもこれをあはれみ
これをかなしむ。神佛妖異の妄信深き當時。怨靈の説は已に此時
に兆せるなり。間もなく讒に與せし定國(同六年)死し。公の恩をう
けて。之を助けし菅根(同八年)死し。次で主敵たる時平(同九年)死し
光(同十三年)死す。加ふるに京師火ありしかば。怨靈の説はますます
高まり。天皇も其冤を覺りて。之を恐れ給ふ折から。皇太子保明親王

の暴薨(延長元年)に。驚愕一方ならず。遂に官位追復の事あるに至る(同年)其後清涼殿の落雷。天皇の崩御(同延長八年)をはじめ。年を経るに隨ひ。一災異一凶變ある毎に。怨靈神異の説は續々發生して。北野の奉祀となり。天滿天神の號を賜ひて。二十二社の一に列せらるゝ事となれり(天曆年間)天德以後。皇宮京師に屢火災ありしは。上下悉く恐怖せし所にして。一條天皇其靈を慰めん爲め。極位極官を贈り(正曆四年)北野に行幸して。奉幣し給へり(寛弘元年)これより諸國神異の説に驅られて。爭ふて分祀し。遂に往古よりありて。天つ神(かみ)の天神(てんじん)をまつれる社までも。公の靈祠と變ずるに至れり(川柳に。天神は菅相丞にしてやられ)要するに。公がかくまで神異を説かれ。後世の尊崇を承くるは。一は文學の力と。一は配所に薨じて。同情を惹きしとによらずんばあらず。嗚呼。かく論じ來れば。余も賞嘆者尊崇者の一人にして。亦神異の説にかふれた。

るか。

菅公の怨靈雷となりて。時平菅根等爲めに震死すといへるは。屢雷火の末。清涼殿の落雷ありしゆゑ。附會せる説ながら。いと古くよりの事なるべし。彼等の死は清涼殿の落雷より廿餘年前なり。大鏡に

北野のかみにならせ給ひて。いとおそろしく神の鳴りひらめき。清涼殿に落ちかゝりぬと見えけるに。本院の大臣(時平)太刀ぬきかけて。いきても我がつぎにこそ。ものし給ひしが。今日神になり給ふとも。この世には我れに。ところおき給ふべし。いかでさらにやはあるべきと。にらみやり給ひけるに。一度はしづまらせ給へりとぞ云々。

と見ゆ。當時公の事を記するに。最高神佛に對する敬辭を用ひたるを。思へば。如何に畏れいかに敬ひしかを知るに足らん。遂には

一天萬乗の君すら。これが爲めに地獄に落給へるなどいへる説まで。生ずるに至れり。

菅原氏は天穗日命より出で。野見宿禰の後なり。古人、清公、是善等。相續で一世の鴻儒たり。道眞は是善の第三子。幼にして穎悟。十一歳にしてよく詩を賦せりといふ。長じて文學を以て一世に冠たり。宇多上皇の寵遇を蒙り。不次に登庸せられて。寛平九年權大納言兼右近衛大將に進む。道眞知遇に感じ。忠誠を盡して。献替補弼する所多く。加ふるに治體に老練し。庶務に精通せしかば。裁決流るゝが如く。綱紀大に振ふ。上皇々太子を定め。又位を譲り給ふ時も。獨り其議に與る。醍醐天皇立ち給ひて。内覽の宣旨を蒙り。昌泰二年右大臣に任じ。左大臣時平と並びて朝政を執る。帝密かに上皇と議し。天下の政を以て。道眞一人に委ねんとし給ふ。道眞之を固辭せしかど。事漏れて時平に聞ゆ。時平は關白基經の子にして。藤

氏の正冑たり。常に道眞の寵眷を妬む。こゝに至つて靜かなる能はず。時に源光。藤原定國等。資望ありといへども位階道眞の下にありて。平居之を惡む。藤原菅根亦道眞に憾あり。時平此徒と交結し。力を協せて排陷し。誣毀日に至る。道眞の女皇弟齊世親王に適く時平之を奇貨とし。道眞陛下を廢し。齊世親王を立て。國權を專にせんとすと密奏す。天皇春秋に富み給ふを以て。遂に之に迷ひ延喜元年正月太宰權師に貶して。筑紫に流し給ふ。上皇之を救はんとし給へども能はず。事に坐して官を奪るゝ者多し。道眞の子男女二十三人。小男小女の外は。皆流に處せらる。延喜三年二月二十五日配所に薨ず。年五十九。なほ神異の事は。各段の總解を見よ。北野鎮座の事に付。同社由來記に諸書を引きて。

朱雀天皇天慶五年七月十二日。我菅原大神。西の京七條に住める。多治比の文子といふ童女に神託ありて。右近馬場に住せ給ふべ

き由を告させ給ふ。其女極めて貧しかりければ。彼處に御柱を營
 むことかたくして。家邊に端籬ばかりを結びて。五箇年の間崇め
 奉りけるに。村上天皇の天曆元年三月十二日。近江國比良の神官
 神の良種（みよ）といふ者の子。太郎丸といへる七才の童子に。神託あり
 ての給ひけるは。吾むかし右大臣に任せざりし時。夢に我が身に
 松生ひて。折りしと見えたりしかば。吾是を以て後に三公にのぼ
 り。又謫居すべき事ぞかねて知りぬ。此故に吾やどる所には。必松
 を植うべしとぞ。の給ひける。やがて一夜の中に松數千本。北野に
 出生けると世にはいひ傳へける。茲に神の良種は。北野朝日寺の
 僧最珍と。先に神託ありし西京なる文子と力を合せて。同年六月
 九日北野に神殿を造立せり。同帝天徳三年二月二十五日。右大臣
 正二位藤原師輔公。神殿屋舎を造増して。神寶數品を献上したま
 ふ云々。

此淨瑠璃は延享三年八月廿一日。竹本座の興行に上せしものにて。淨曲傑作中の傑作なり。作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲等。もと三好松洛の腹稿によりて。道明寺の段は松洛自身。佐太村の段は並木千柳。寺子屋の段は竹田出雲。と場割を定めて作れるなりと。寺子屋の段殊に傑出せるものから。他の段も淨瑠璃中上乘の出来なり。一部を通讀するに。千柳松洛等にては。なか／＼及ばざる所あるやう覺ゆれば。出雲が立作者として。全部添削せしものなるべし。人々の傳は。餘りながくなりしゆゑ後篇に譲る。

菅原傳授手習鑑 傳授の段

總 解

菅公を筆道の神とし。昔寺子屋にては。其肖像を掲げて之を祭り。以て上達を祈りしなり。公は總て文事に秀でられしゆゑ。筆道にも優れたらんが。取わけていはゞ詩文の神とすべきこそ。至當ならめ。當時文壇の至寶は。白氏文集にして。之を讀ざる者は。文人の列に齒するを得ず。特に公は之を嗜み。之を慕はれしかば。其吟詠悉く其風調を帶びたり。興福寺の僧寛建が許をうけ。入唐の時携へて。彼國に傳へしも。公の詩集(道風の行草書)にして。已に詩文に於ては。我國のみならず。本家の唐土にまで誇るに足るものと認められしを知る。されば元慶七年渤海國の使節斐頌が。公の贈答の詩を見て。白氏に酷似せりといへるは。公の最も得意とせる處な

るべし。斯の如く詩文にての名譽は耳にすれど。筆道にての高名は聞及ばざるが。十五六年前閱たる縁起やうの書に。公がをさなくて。字を妙に書かれし由載せたり。古くより此傳説ありて。遂に筆道の神となれるにはあらざるか。又唐までも譽むる菅原の一流などいへるは。道風と混じて。作り出でたる説にてもあるべし。そはとまれ「字」を書く事は「藝の司」と古來極めて尊めど。これを傳授の爲め。七日の精進潔齋とはいかなる秘事あるか知らねど。頗る神聖のものと見えたり。あなかしこ。

傳授の場

「上根と稽古と云々」 「上根と器用と好きの三つの中好きこそもの上手なりけれ」といへる歌の、器用な稽古とかへたるなり上根は根のよきこと、佛典より出でたり稽古は學び習ふこと、書經より出でたり、
 「金言」 は鑑となるべき名言、佛書に佛の言を金言といふこれより出でしなるべし、
 「堂上」 は公卿方「堂下」は地下の者
 「左中辨」 は太政官の官名
 「希世」 はつまらぬ役をつげられたり、氣の毒
 「朝の宵から」 は夜明け方からの意、
 「しゝらしん」 は靜まり

傳授の段

立歸る。上根と。稽古と。好と。三つの中。好きこそ物の上手とは。藝能修行教への金言。公務の暇明暮に。好ませ給へる道眞公。堂上堂下はいふに及ばず。武家町人に至る迄。風儀をしたふ御門人。數も限りもなき中に。左中辨平の希世。手習稽古ふる兄弟子。今度筆法御傳授は。指詰我等に極まりしと。勝手覺えの御殿の眞中。朝の宵から机を直し。烟草よ茶よと呼立る聲も届かぬ奥勤。女中頭が聞咎め。「コレお次に誰も居やらぬか。希世様の御用が有ると。呼次ぐ局に不足顔。「コレ手の皮がひり付程たゝいても。しゝらしん。ムウ合點。顔出しせぬは毎日來るを面倒がり。言合せて鼻明すのか。けふで七日。此手習。おれが爲計じやない。御子息の菅秀才は年弱七つ。傳授所に行ぬ

て返事せぬをいふ、

「鼻明かす」は事をかゝ
さしむるをいふ、

「菅秀才」の名は、史に

菅家の跡を嗣ぎし淳茂卿、

夙に秀才に擧げらるゝ由、

見ゆ、だるより取れるか、又

縁起に菅原氏なる、五條、

高辻、東坊城などの息、十七

八歳になれば、北野の神前

に文章一篇を奉り、これより

秀才と稱す、とあるより

名づけたるかと思ひしに、

後に希世のいへるを見れば

只才智の秀でたる意にて、

つけたるなるべし、此事は

早くより取調べ置きしが、

餘り深入りなりし、

「年弱」は年の末に生れ

しをいふ、

「けこる所」は結句はの

意、

「筆道傳授は神道の秘密事」

によつて。此希世が傳授して。菅秀才の成人以後。身共から又

傳授。さすれば。主の奉公も同じ事。「ハツボと云て廻る筈。總

じてこなたがなまぬるこい。コレ勝野。よふ心得や。和女衆の

不調法。こける所は局が迷惑。何おつしやろと。あい／＼とナ

申し希世様。成程さうぢや。よい了簡。毎日／＼氣を詰るも。

菅原の家の爲。今日も又此清書。お目にかけて。と指出す。「イ

ヤけふは御赦され。赦せとはなぜ／＼。ハアテ幾度お目につ

ましても。相取様の氣に入らぬは。お手の業ではござるまい。

取次の仕様の悪さ。手がはりにけふは勝野。イヤ是れ左様はな

らぬ。筆法傳授も神道の秘密事。學問所の注連が目に見えぬか。

油濃い女子はやられぬ。昨日迄は氣に入らずと。此清書は格別

筆先に肉を持せ。天晴骨髓を書得たれば。傳授はする／＼。伸

切て往てたもれと。頼むに是非なく立て行く。「コン勝野。局の

如何なる秘密のあるかは知られど、兎も角手を書く事は藝の司などいひて、最も尊びしものなり、徳川時代にも止筆などされし人あり「學問所の注連」頗る神聖と見ゆたり、
 「筆先に肉を持たせ」獨白慢の語面白し、
 「福徳の三年目」は運の廻り来るをいふ、但言集覽に「福徳は神の名、男女生年圖に見ゆ、三年目といふはくり合せをいふなり」と見ゆ、
 「屏風のかけて云々」注連が目にかけらぬと見ゆたり、
 「悪い所へようお出」味ひあり、千本櫻にお里「又兄様かようお出」
 「へちま口」はへこまずしやべるをいふ、

云はれた。あい／＼を合點か。アイ心得ております。エ、忝い。幸い傍りに人もなし。福徳の三年め。屏風のかげでついちよこ／＼と。取手を振切。エ、いやらしい。無駄な事なさるゝと聲立てるが合點か。ナ、合點ぢや。聲立てるが怖い。迪。しかけた戀人叶へおれと。ほうど抱へて連て行く。アレ／＼申し。「申しとは誰に申し。ア、御臺様や。若君様。申し／＼といふ聲の。もれ聞えてや。菅相丞の御臺所。若君の御手を引。立出給へば希世は仰天。是は／＼悪い所へ。よふ御出と。手持不沙汰も減らず口。勝野に癩の療治を頼まれ。取にかゝつて斯の仕合せ。御臺にも御存のごとく。萬能に達せし某。世に希な器用者迪。希世と付たは親共が自慢の名。其例は此若君。年よりは御發明。菅秀才と呼給ふも。秀はひいづる。才は才智の才を取て。菅家の公達菅秀才。あら／＼謂れ斯くのごとし。我等も餘り器用過

「萬能に達せし米」 萬能

通じて一能達せぬやからなるべし器用者に此類多し、

「世に希な器用者」 名の

解剖頗るうまし、己をおし

て人に及ぼし、管秀才を譽

あぐる所、更に妙、

「公達」 は貴族の子息の

稱、

「按摩のしだら」 過ぎた

るは及ばざるが如ししだら

はていたらく、もと音楽の

しだら拍子より出づと、

「刈屋姫」 の事は道明寺

の段の總解を見よ、

「齋世親王」 は宇多天皇

の皇子、菅公の女婿なり、

加茂社参の日、櫻丸夫婦が

計ひて、刈屋姫と車の中に

て逢はせまゐらせたるを、

三善清行に見咎められ、道

明寺に落せしやう作れるな

り、なほ道明寺の段の總解

ぎ。取損なふて按摩のしだら。御臺所の思し召が。「ア、其言譯に

及びませぬ。日頃の行儀知て居る。そんな疑ひ何のいなと。物

に障らぬ御挨拶。「ア、夫れ聞て落付た。今のしだらの次手なが

ら。お尋申す事が有る。御息女の苅屋姫。齋世の君と。にやほ

やした世間の取沙汰。けふで七日相詰る。御所には何の沙汰も

ない。虚説かと存ずれば。苅屋姫の御殿は明家。御詮議もなされ

ぬは。親御達も合點の上。缺落でがなござるか。問はるゝ辛さ

は御臺所。暫し返事もなかりしが。隠しても隠されぬ。さがな

き人の口の端に。かゝるも是非なき苅屋姫。齋世の君は猶もつ

て大切なお身の上。互に忍ぶ戀路の車。廻り逢瀬もそこゝに。

事顯はれしを耻かしく思し召れ。「御所へお歸りなされぬもの。

と有て常の御方ならねば。宮様附々の人々が。夫れなりけりに

はして置まい。又此方の娘の事は。希世様も知ての通り。本の

を見よ、
 「にやはや」 はなまめひ
 しきの意、
 「さかなき」 はつゝしみなきの意、
 「互に忍ぶ戀路の車、廻り達ふ瀬も」 よく書きたり車にて達せまゐらせたるなり、
 「一落」 は一事件といふに同じ、
 「奏者番」 は殿へ申次の役をいふ
 「武部源藏」 は建部傳内に思ひよりて、作れる名なりといふ、傳内は元祿の頃江戸の書家にして、御家流より出で、一家をなし、幕府の書吏を勤む、門人三千人に餘れりと、世に傳内流と稱せり

母様は河内國。土師村の覺壽様。連合の爲には伯母御様。菅秀才を設けぬ先。乞請て養子娘。此御所へは戻られず。伯母様方へと心付。自が内證で。尋に人を遣はした。此一落は今日が日迄。態と父御へ知しませぬ。夫れも何故。勅詔にて。筆法傳授七日の中。參内止て取籠り。世の取沙汰は何にも知らず。傳授も過て聞給はゞ。嚙や恠り仕給はんと。彼方此方を思ひやる心を推量してたべと。案じ給ふぞ理りなる。内立關の奏者番。一間此方に畏り。先年お館に相勤し武部源藏定胤。尋ね參れとの仰に因り。此間所々方々吟味致して。漸只今夫婦一所に參りたり。是へ通し申さんや。と伺へば。御臺所。「ナ、待兼し源藏夫婦。早く此處へ參れといへ。コレ菅秀才。源藏に逢ふ間。爰に居ては氣が付ふ。勝野を奥へ連て往て。機嫌能ふ遊ばつしやれ。希世様にも暫しが間。此處に居て邪魔にならば。所替え

三世の恩」は主の恩夫
婦は二世主従は三世

「さむい暮しを素浪

とかけたり、

「尾羽打枯れし」

は浪人

者のやつれたるを鋭いふ、
もと鷹より出でたる語なり

と、

「心の優曇華爾く云々」

とかけたり、よくいひたり

優曇華は天竺にある木の名

三千年に一度花開くといふ

極めて希らしくうれしき事

に譬ふ、

「いかな事」

は決しての

意、

仕らんと。續いて奥にぞ入にける。人知れずと。思ひ初しが主

親の。不興を請る種と成り。夫婦が二世の契りより。三世の御

恩辨へぬ。不義より御所を追出され。さむい暮しを素浪人。尾

羽打枯れし武部夫婦。今日のお召は心の優曇華。開く襖の内外

迄。勝手は今に忘れねど。身の誤りに氣おくれし。膝もわなわ

な伺ひ足。御臺の御座を見るよりも。ハット畏れて飛退去り。

蹲りたる計也。ヤア珍らしい源藏夫婦。「連合の氣に背き。此御

所を出やつたを。かぞへれば最う四年。日頃人を捨給はず。慈

悲深い程きつさもきつい。思ひ切てはいかな事。見返らぬ夫の

お心。叶はぬ事と思ひの外。源藏に参れと有る御用の様子。何

かは知らぬが氣遣ひな事では有るまい。定めて吉左右。ヤア自

がいふ事計り。無待兼てござるで有る。源藏夫婦が参りしと。

誰ぞ奥へおしらせ申しや。「サア二人共に顔を上げ。近ふ寄りや。

「煙の代」 は生計の料、

「鼈甲と杵の引櫛」 よく

かはりはてたり、いすはゆすの轉、

「身の耻顯はす錯刀」 よ

くいひたり、

「冥加」 は仕合せの意、

「放埒」 は行ひの恣なるをいふ、塙裏杵に「人不従順法度、如生馬放埒」

ハアテ遠慮に及ばぬ近ふ。年月の浪人住居。渡世が苦に成たか。昔の面影どこへやら。源藏が着て居やるは。荒々敷下ゝの着物。戸浪は夫れに引かえて。小袖の縫箔。追に女子の嗜か。二人の中に子も出来たかと。問れて戸浪は有がた涙。冥加至極もないお詞。主人のお目をくらませし。罰が當つて苦勞の世渡り。夫婦が着替も一つ賣り。二つも三つも朝夕の。煙の代に成果し。漸殘せし此小袖は。御臺様の下されし。御恩を忘れぬ賣残り。髪飾の鼈甲も。いつかは杵の引櫛と。かはり果たる共稼ぎ。連合は布子の上。糊立たぬ麻上下も。けふ一日の損料借。ア、おはもじ。お上に御存ない事迄。身の耻顯はす錯刀。今日迄人手に渡さぬ武士の冥加。アイ女房が申上ます通。此態に成り下れば。一入昔の不義放埒。思ひ廻せば主人の罰。悔むに詮方なき仕合せと。夫婦諸共おろく涙。折から局は奥

「引はへ」は引渡すことばゆと訛りて、榮の字を當てたるなり、
「白木の机、欣然として云々」柔和の相、想ふべし、
「五体の汗は布子を通し」よく畏れ入つて見ゆ、
「さだかならず」は判然せず、

「前髪立の時分」は少年の頃をいふ、男子十五六にして元服し、前髪を剃り落すなり、

より立出。「お學問所へ召ますは。源藏殿只一人。御用濟でお手

の鳴る迄。御臺様にもお出はならぬ。との仰せられてござります。

成程く心得た。源藏は局と同道。戸浪はこちへと入給ふ。只

今御前へ召出さるゝ。源藏が身の嬉しき怯さ。局は斯と申し上げ

立たる障子明渡せば。恭しく注連引榮え。常にかはりし白木の

机。欣然として座し給ふ。凡人ならざる御有様。畏れ敬ふ源藏

が。五體の汗は布子を通し。肩衣絞る計也。やゝ有つて。仰には。

去がたき子細有て。汝が行衛を尋しに。住所さだかならず。漸

きのふ住家を求め。今の對面満足せり。其方義は幼少より。我

膝元に奉公し。天性好いたる筆の道。好に上り習ふに覺え。古

き弟子共追抜き。適手書になるべしと。思ひの外に主従の縁

迄切て其風體。筆取る事も忘れつらんと。仰に猶も恐れ入。「御

返答申すは憚りながら。前髪立の時分より。お傍近ふ召仕はれ。

「手書く事は藝の司」 書

は六藝の一にして、昔より貴びしゆゑ、かゝる語もありしなるべし、

「鳴瀧村」 は嵯峨仁和寺

の西にあり、名産の砥石を出す、山家集に「しげしこそ人目つゝみにせがれければはては涙や鳴瀧の川」

「夫婦の命毛筆先に助けられ」 筆によつて露命をつなぐをいふ、頗る妙味あり、命毛は筆の鋒毛をいふ

小町踊に「命毛や長き試筆の手六十」

「眞名」 は漢字のこと假名に對していふ、名は字の意假名ばかりの字、眞名に對していふ、

「先へは出す跡退さり」 頗る面白し、畏れ入る状態をいふ、

「志根惡」 は根性の惡き

て手を書事は藝の司、書けよ習へと御意なされ。御奉公の間々、

書き覺えたと申すも慮外。蚯蚓の蛭々た様に書手でも、藝は身を

助けるとやら。浪人の家業。鳴瀧村で子供を集め。手習指南仕

り。今日迄夫婦が命毛。筆先に助られ。清書の直し字。毎日書

け共上らぬ手跡。御尋に預かる程。身の不器用と御勘當。悔む

に詮方なき仕合せと。歎くを傳聞し召し。子供に指南致すとは。

賤しからざる世の營み。筆の冥加藝の徳。申す所に偽りなくば。

手跡もかはらじ。改むるに及ばね共。爰にて書かせ道眞が。所

存は後にて云聞さん。認め置たる眞名と假名。詩歌を手本に寫

し見よと。白木の机御手づから。差寄せ給へばハアはつと。先

へは出す跡退去り。志根惡の左中辨物蔭よりずつと出。「コリヤ

源藏。様子残らずあれから偷聽く。師匠の指圖は兎も角も。辭退

申して出る筈が。兩手をついて目をましくし。藝の所作がらす

「ないふ、
「兩手をついて云々」 巧

みに罵れり、

「目をましくし」

は眼を
ばちくすることなるべ

し、

「の太い」 はし太いとい

ふに同じ、のは強くいふ爲

の添辭、

「くさ墨」 は惡き墨をい

ふ、

「大鷹檀紙」 は備中松山

の名産、最も上品の紙にし

て、古はみちのく紙といひ

檀にて製せしゆゑ、檀紙とい

ふ、今は楮にて作る、色

白く質厚くして、面に皺の

文あり、其皺の細粗と、紙

形の大小とによつて、大鷹

檀紙小鷹檀紙の別あり、

「聞けふ」 は聞かさう、

「生死の道には云々」 老

少不定の意、

るは。書ても見様と思ふ氣か。夫れは篋太い叶はぬ事。「ハアお馴

染と有て忝い。希世様のお詞に。一つも違はぬ役に立たず。併

し身の分際を顧ぬ。源藏めでもござりませぬ。只今是にて書け

と有るお手本。書て可いやら悪いやら。跡前の様子も存ぜず。

四年以來在所住居。くさ墨に三文筆。書出しや反古の裏に。書

ならば場打もせまい。其結構な机に墨筆。大鷹檀紙の位に負

一字一點いかなく。ホ、好いた簡。いかぬと知て何如立たぬ。

サア其處でござります。御勤當の私。御意にあまへた身の願ひ

お執成し頼上ます。ムウ夫れで聞えた。詫言はしてやろが。

今はならぬ。といふ其仔細。引つまんで咄して聞ふ。此度帝の

仰には。存命不定の世の中。生死の道には老若差別はなけれ共

マア年寄から死ぬるが順道。菅相丞は當年五十二。天命を知と

いふ齡も過。寄年を惜ませ給ひ。唐迄譽むる菅原の一流。是迄

「天命を知る」論語に五十にして天命を知る、

「唐まで響むる云々」こ

は興福寺の僧、公の詩集及道風の草行書を携へ、入唐して彼國に傳へたるを、混じて作り出でたるにはあらざるか、なほ總解を見よ、

「大慶、偏執」對して味ひあり、偏執はしふれくひがみたるをいふ、

「擽る墨の色も云々」よ

く書きたり、味ふべし、

「手目」はしわざの意、

「耻と天窓はかき次第」よ

「貧乏寺の講中云々」珍

無類の惡口、頗る妙

「無緣法界」は方圖もな

傳授の弟子もなし。一代限で絶やすは殘念。手を撰で傳授せいと。勅詔で七日の潔齋。殊の外お取込。事濟んでから願ふてやろ。ハア様子段々承はれば。御大慶な勅詔。サア其勅詔も大慶も知れた事。云はず共早く歸れ。とせり立つる。イヤ立つな源藏。吩咐た手本。只今書けと。仰は武部が身の大慶。希世は偏執むしやくしや腹。立寄る源藏睨付け。わりや兄弟子に遠慮もせず。書ふと思ふて出しやばるか。ホ、お笑ひ有ても耻しからず。御免なれと机にかゝり。手本を取て押戴き。心憶せず擽墨の色も匂ひも薰はしき。筆の冥加ぞ有がたき。希世傍へすり寄て。わが様な横着者は。手本の上を透寫し。其手目は身がさせぬ。耻と天窓はかき次第。身のさまの耻類。わりや何共思はぬか。溫袍の上に汚袴。机に直つて居るさまは。貧乏寺の講中。奉加塲の帳付に其儘。無緣法界を書なよ。と惡口たらしく言ちらし。

きないふ、玉勝間に「八雲御抄などに、無邊法界の歌詠といふ事あり、今の俗言に、めつさうかいなどいふは、此語の訛れるなり、めつさうかいを伊勢などにてはめつぼうかいといへり、「怪我のふりにて云々」小供のいたづらめきたる所行頗る面白し、希世が惡者のちやりたる事を忘るべからず、

「鑽沙草云々」「きのふこそ云々」 朗詠集に、かく二つ並べたれば、これより取れるなり、詩句は菅公の詠にて、草は漸く、三分ばかり沙を穿ちて萌の出で、篋は纔に半段ばかり、樹の枝に跨つてかゝるといふ意初春の景なり、歌は讀んで字の如し、朗詠には人丸としたれど、拾遺集及古今六

怪我のふりにて机を動かす。肘に障つて邪魔するも構はず咎めず手本の詩歌。心よく書終せ。机も共に御前に直し。退去て頭をさげ居たる。相承清書を取上給ひ。「鑽沙草只三分計。跨樹霞纔半段餘。是は我作れる詩。きのふこそ年は暮しが春霞。春日の山に早立にけり。是は又人丸の詠歌。いづれも早春の心を詠適へり。假名といひ。眞名といひ。是に勝れし筆や有ん。出かしたりく。惣じて筆の傳授といつば。永字八法。筆格の十六點。名をそれぐにいふに及ばず。人々のしる所。菅原の一流は心を傳ふる神道口傳。七日も満る今日只今。神慮にも叶ひし源藏と。御悦びは限りなし。「ハア有がたや。忝や。筆法御傳授有るからは。御勤當も赦され。前にかはらぬ御主人様。ヤア主人とは誰を主人。傳授は傳授。勤當は勤當。格別の沙汰なれば不届き成る汝なれ共。能書なれば捨置れず。私の意趣は意趣。

帖には赤人とあり、句調より察するに、兩人の詠にはあらず、平安朝以後の作なるべし。

「永字八法」は王羲之の

節する所、側、勒、努、趯、策、掠、啄、磔、筆格の十六點とは何をいへるにや、書法正傳には、永字八法、變化三十二勢、結構八十四法など見たり。

「心を傳ふる」即ち以心傳心、七日間精進潔齋して傳ふる筆の秘法、神聖なるかな、面倒なるかな、

「私の意趣は云々」我が

仇を推舉せし故事に似たり

「依怙」は俚言集覽に「理に従はず私するをいふ」庭訓往來に「政以不レ可レ存ニ自由依怙」

「規模」ははまれといふ

ほどの意、宗五大双紙に「公

筆は筆の道を立る。道眞が心の潔白。叡聞に達しても依怙とは思し召れまい。希世にも疑はれな。勘當は前のごとく。主でなし。家來でなし。此以後對面叶はじと。尖き御聲源藏が。肝に焼鐵さゝるゝ心地。道理を分ての御意なれ共。傳授は外へ遊ばされ。勘當御免と泣わぶる。「こりや源藏が歎くが道理。勘當を赦されねば。傳授しても規模がない。彼が願も希世が望も。立やうの了簡は。傳授と勘當。かえぐにして遣はされたら。よさそふな物のやうに存じますると。いふ折から。當番の諸太夫罷出。俄の御用これ有る間。只今參内遊ばされよと。瀧口の官人參られしと。申上れば御不審顔。「七日の齋過ざる中。御用とは何事。隨身仕丁の用意せよと。装束の間に入給ふ。參内と聞し召。立出給ふ御臺所。襠の下に戸浪を押隠し。人目包も餘所ながら。お顔をせめて拜まさんと。心づかひは希世の手前。「傳

方様御服給ひ候を、久しく着候を、規模と申し候。

「諸大夫」は攝家などの家司家の雜務を司るものに補せらるゝ輩にて、四位五位を極官とす、轉じて五位の侍の通州となる、

「瀧口」は藏人所に屬して、天子の御所を護る武士の稱、

「隨身」は近衛府の舍人の兵仗を帶して、供奉するものないふ、朝廷より給ふ所にして、攝政關白は十人大臣及大將は八人、納言參議は六人の定めなり、

「仕丁」は雜役に使はるゝ卑き者、

「神道秘文の傳授の一卷」如何なる神秘のものか、傳らば見たし、

「御流義末世に云々」昔

寺子屋には、菅公を筆道の

授の様子承はれば。お前には遣り多からう。仕合せは源藏。去

ながら。御勘當は赦りぬげな。館の出入も今日限り。かなたこ

なたを思ひやり。御參内を見送りがてら。夫れでくと襦の。

下をしらする御目づかひ。夫婦は重々お情の。身にしみ渡る忝

涙。東帶氣高き菅相丞。一間の内より立出たまひ。神道秘文の

傳授の一卷。源藏に給はりける。當座の面目。御流義を。末世に

傳へて寺子屋の敬ひ申奉る。因縁斯とぞ知られける。サア傳授濟

むからは。對面是迄罷歸れ。立よくと切りの御錠。コリヤ源

藏。吼煩かいても最う叶はぬ。腰が抜て得立ずば。引ずり出さ

んと立寄る希世。喃あらけなく仕給ふな。三世の縁の切目ぢや

もの。立ぬも理り歎くも道理。涙とぐめて御暇乞。見奉れば襦

の。裙より覗かす戸浪が顔。夫れぞと推し給へ共。しらず顔に

て立出給ふ。何としてかは召れたる。御冠の自ら落るを。御手

神として其肖像をかゝげ、之をやまぬ、上達を祈りしなり、なほ總解を見よ、「三世の縁」は主従の縁「御冠の自ら云々」菅相巫だけに高尚なり、並の者なら草履の緒か下駄の齒、「イヤ／＼さにてば云々」菅相巫の前識をあらはす、

「五體」はもと、胴と兩手兩足の稱なれど、からだの意となる、

「あんじりと」はまんじりとに同じ、しつかりと又ろくなどの意、

「まんがち」はかち氣にさし出でたるなふ俗語、「女子は罪か深い」十惡五逆五障三從の女人惡人、

「なぜ深い」は罪なふ

に請とめ給ひ。物にも障らず脱たるは。ハアはつと計に御氣がゝり。イヤ夫れは。源藏が願ひ叶はず落涙致す。落は落つると讀むなれば。其驗でがな。イヤ／＼左にてはよも有らじ。參内の後知れる事。源藏早く歸されよと。冠正して參内有り。希世はこは／＼御見送り。御勘當の身の悲しさは。行に行れず伸上り。見やり見送る御後かげ。御簾にさへられ衝立の。邪魔になるのも天罰と。五體を投伏し男泣き。戸浪が悔みは夫の百倍こなたは御前のお詞かゝり。直にお顔を見さしやつた。わしは漸御臺様の。後ろに隠れてあんじりと。お顔も拜まぬ女房の心思ひやつても下されぬ。まんがちな一人泣。同じ科でもこなたは仕合せ。女子は罪が深いといふ。如何した謂でなぜ深い。鈍な女子に生れしと。御臺のお傍も憚りなく。果し涙ぞ慘らしと。希世のさ／＼立戻り。「ヤア源藏を歸されぬは。御臺所御油斷々

「了簡」は容赦といふほどの意。
「二泡吹かす」は馬より出でたる語なるべし、困むるをいふ。
「直垂の羽繕ひ晝鷲」の句頗る面白し、味ふべし、うまくすかしした羽繕ひも、うまく引かけ損れたり晝鷲は白晝物をさらへる賊骨頂は親玉などいふに同じ。
「寺子屋が折檻の机」昔寺子屋の爵には机を背負はせ、水をさづけしめ、線香を持たしめなどせしなり、「背中に机大げなし」とかけたり、大の男が直垂姿に此さま、おほげなかるべしおほげなしは似合ぬをいふ。
「雁字がらみ」は無闇とくしつづけるをいふ、雪國にて履くかんじきの如く、

々。一刻も早くばいまくれと。重ねて仰付られた。そこを少し身が了簡。其かはりには傳授の巻物。讀で見る望みはない。筆の冥加にあやかる爲。ちよと戴かしてくれんかと。望むに是非なく懷より。取出すを引たくり。逸足出して逃行を。どつこいやらぬと源藏が。ぼつ蒐けぼつ詰襟髪攪み。引ずり戻してかつき投げ。大の男に一泡吹かせ。傳授の一卷取返し。「是を己が引かけふで直垂の羽繕ひ。晝鷲の元頂め。びく共せば打殺すと。刀四五寸抜かくる。「ユリヤ源藏聊爾すな。戸浪過ちさするなと。お詞かゝれば。「エ、エ、儕エ、エ儕をな。只助るも残念な。寺子屋が折檻の。机はこいつが責道具。女房此處へと取るより早く。背中に机大げなし。兩手を引ばる机の脚。装束の紐引しごき。雁字絡みに括り付。盗ひろいだ師匠の躰。竹篋のかはり扇の親骨。頬に見せしめひりつかせんと。打立く突飛せば。痛

からみつくるよりかんじき
からみといへるが、かく詛
れるにはあらざるか、
「耻を背負ふて」 とは面
白し、希世は世に希な
る悪者のちやり師、滑稽に
始り滑稽に終れり、
「命が物種」 死んで花は
咲かぬ、
「戸浪が涙長汐に」 浪を
うけて面白く書き下せり、
涙流すを長汐かけて、袖の
海とつけ、海の縁より見
るめに海松を含ませたり、
味ふべし、袖の海は袖の涙
にしたるをいふ

さも無念も命のかはり。耻を背負て歸りける。源藏夫婦手をつ
かへ。禁裏の様子承はり。歸りたく存ずれ共。長居は恐れ御臺様。
此上ながら夫婦が事。お捨なされて下さりますな。「チ、夫は心
得たが、今行といふを聞捨に。せめて一夜といはれませぬ。命
が物種。縁も盡ずば又逢はふ。モウ行きやるか。「アイアイ参りま
せねば。成ませぬでござりますと。戸浪が涙長汐に。かわく間
もなき袖の海。見るめいちらし夫婦が姿。泣々御門を出て行く。

菅原傳授手習鑑

八聲の鶏及道明寺の段

總解

道明尼寺。道明寺天神。河内國南河内郡（もと志紀郡）道明寺村大字道明寺にあり。大坂の東南僅に四里許。鐵道の便あるを以て。毎月廿五日遠近賽するもの多く。殊に二月廿五日は。正當の忌日なるを以て。其群集一方ならずといふ。社寺は思ひし程壯大ならず。足利氏の末寺産を失ひ。堂宇壞頽に及びたる折柄。元龜三年高屋城の兵亂に。灰燼に歸せしが。豐太閤の歸依により。舊觀に復するを得たり。然るに明治六年。神佛分離の令に接し。殿宇坊舎の大部を取毀ちて。尼寺も神社の傍にありしを。西方の域外に移すに至る。今國寶の十一面觀世音は。尼寺に安置し。荒木の天神を神社に納む。神社に就きて由來を尋ねたるに。世にありふれたる事の外。一

も得る所なし。尼寺に詣りて。道明寺縁起といへる。一冊の寫本を
借うけ閱たるに。寺の創立より書き起して菅公覺壽尼等の神異
不可思議の傳を載せたり。要するに。後に引ける名所圖會を。潤色
せる如きものにて。別に稀らしきふしも見出さず。

「鳴けばこそ」の歌は。曉鷄の音に。別れを惜みての詠として載せた
り。されどこは菅公の詠にあらず。何人かの戀歌なるべし。流罪の
節道明寺に立寄り給へる事も。荒木の天神の事も。寺傳の外別に
正しき書に見えねば。信不信は讀者に任ず。意は讀んで字の如き
歌なるを。餘り巧みに作り込まんとして。却つて譯分らぬものと
なせり。いつもながら此種の作者が。歌に於て馬脚をあらはすは
惜むべし。縁起圖會の如く。第二句「別れもうけれ」第四句「無からん
里の」としたる方まされり。改めたるはいふに足らず。此詠より道
明寺の里は。鷄を忌みて畜はざりしといふ。今はさにもあらず。

惣門の側なる蓮池は。時平の家來が別れを急がせん爲め。竹のなかごに熱湯を入れて。鶏を鳴かせたる所なりといひ傳ふ。これ歌より孕み出せる俗説ならんが。作者はこれを取れるものか。

土師兵衛、宿禰太郎などの名は。道明寺及佐太の圖會に見えたる。土師宿禰、衛門太郎より取れるものか。立田の名は。池水をからくれなるに染むるより。つけたる事明けし。又木櫛樹の事は。尼寺より木櫛樹由來といへる。あやしきすりものを出せり。

刈屋姫 菅公須磨記に。刈屋姫は公のうま子にして。をさなければ。手かく事など妙に。此世の人とも。思はれぬ程さがしく。流罪の節須磨まで伴ひ給へるが。船路に心地そこなひたれば。乳人を添へて。陸路より返されし由見えたり。此記はあらぬ偽書なりといへば。其名もあやしけれど。兎も角これより種々の傳説を生ぜしなり。

菅公は子寶多き人にて。男女二十三人あり。齊世親王は公の女婿なれば。時平等之を奇貨とし。帝を廢して。親王を立つるの企ありと讒して。遂に流罪に處せらるゝに至る。作者これを本として。公の養女刈屋姫(伯父覺壽尼の女)を。加茂社參の日。櫻丸夫婦が取持ちて。齊世親王に逢せまゐらせたるを。三善清行に咎められ。ひそかに落せしより。遂に時平に。廢立の讒をなされたるやう仕組めるなり。されば刈屋姫は。覺壽の許にありても。公に顔合されぬなり。又此伯母へ暇乞ひの對面も。法皇の御なさけにて。輝國が取はからへるなり。次に河内名所圖會を引く。

道明尼寺　土師の里にあり。土俗道明寺村といふ。眞言律宗。女僧住職す。

天滿宮　御自作現存の神影を祭る。一夜に御製作。世に荒木の天神と稱す。後に覺壽尼公補作す。

傳云。菅丞相筑紫へ左遷したまふ時。道明寺に在す伯母御前の御許へ。立寄せ給ふに。曙になりぬれば。

鳴けばこそ別もうけれ。鶏の音の無からん里の曉もがな。今に至つて。邑人雞を畜ふことを忌む。

十一面觀世音 本堂に安置す。菅神御自作。長三尺許。寺記に云。元慶四年當時に於て。菅丞相一夏安居し給ひ。一刀三禮して。彫刻し給ふ尊體なり。

試觀音 長貳尺許。丞相右の大悲の像。彫刻し給ふ以前。御試に作り給ふ尊體なり。故に名に呼ぶ。

覺壽尼像 本堂に安ず。菅原是善卿御妹。菅神の御伯母君なり。幼少より出塵の志願あり。當寺舊名は土師寺と號して。氏の御寺なれば。當寺に於て出家まし。戒行堅固なり。其例によつて。今に至つて雲客の息女。坊中に止住します。

天穗日命社 本堂の西にあり。菅家の祖神なり云々。

三神神社 本社より壹丁餘。坤にあり。天照太神、八幡宮、春日明神を祭る。寺記に云。元慶八年菅公御齡四十の御時。當寺に於て一夏九旬の間に。五部大乘經を書寫し給ふに。忽然として天童二人來つて。淨水を汲んで硯に注ぐ。丞相これをあやしみ尋ね給ふに。我れは白山稻荷の兩神なり。御經書寫の功德を守護せんとして。こゝに來現す。菅公書寫速に終つて。經卷を納むべき所を思惟し給ふに。又忽焉として三老僧。香染の袈裟に水晶の念珠を持して現じ。我れは伊勢石清水春日の三神なり。講堂の西の方を訓へて。こゝに納むべき由を命ず。其所を穿ち給へば。石の函あり。即ちこれに藏めて埋伏し給ふ。其塚より木櫓樹生出で。今に盛なり云々。

木櫓靈樹 三社神の後にあり。中頃伽藍回祿の禍に罹りて。枝葉こ
とくく焚亡びしが。根株遺りて。再び枝葉繁茂して盛なり。諸人

其實を得て念珠を繋ぐ。今坊中よりこれを出す。

二本杉 三社の前にあり。かの經卷を納め給ふ塚より生立で。今にあり。老杉殊勝の靈木。世に三神影向杉と呼ぶ。

硯水 中門の脇にあり。經書を寫し給ふ時。兩神これを汲取られし井水なり。

土師八嶋社 石彫の祠なり。本社の東南にあり。初めは天滿宮相殿なりしが。靈告によつてこゝに移す。

土師竈跡 中門の西客殿の前裁にあり。昔姦偶人を製りし古跡なり。傍に碑銘あり。

白太夫祠 境内にあり。

土師八嶋塚 西貳町餘にあり。石碑を建つ。元文五年六月。五條前黃門の命によつて。浪速忠國建碑。

當社天滿宮の祖は。天穗日命にて。其苗裔垂仁天皇紀七年に。野見宿

禰とて勇力の人あり。當麻蹶速と力競して勝利を得て。蹶速は腰折田の名を遺す。これを相撲の始とす。同天皇紀三十二年には。殉死を禁ぜられ。其代として埴土を以て瓷偶人を製し。後世の法則とす。天皇野見宿禰が才智の功を賞して。野見を改めて土師臣の姓を賜ふ。其後推古帝の御願として。上宮太子佛閣を建營し給ふ時。後裔土師八嶋連が家を捨てゝ精舎となし。これを道明寺とは名附たり。此八嶋は。我朝にて今様を諷ひ初めし人なりけり云々。此時に菅相承の御姨君。覺壽比丘尼在し給ひしかば。相承も時々こゝに來駕し給ふ。昌泰四年(延喜元年)の春ゆくりなき詔ありて。さすらへの御身と成給ひ。御伯母御前に留別の御對顔ありて。筑紫へ御遷り有つて。三年の後薨御ましゝける。五十五年の後。村上帝云々。其頃道明寺に。方三町の杜の中に社壇を建て。左右に梅を植ゑて。天滿宮と崇め給ふ。古へは伽藍巍々として嚴重たり。土師村の外に稻葉菱江の二村も。

寺産なりしが。元龜の頃古市高屋城兵亂の時、沒収せられ、寇火に罹りて一時に煙となる。天正年中官より命ありて再興に及び。神徳は新にして、陰晴をきはらず詣人間斷なし。

毎歲二月廿五日會式とて、遠近詣して群集す。菅公須磨記には、さすらへの御時河内國へ立寄せ給ふ事は書のせ給はざるにや。

八聲の鶏の段

「土師の兵衛」の名は、

里の名より取れるなるべし
總解を見よ、

「前栽」は前庭の意、

「切戸」は庭などに設け

たる、一枚扉の門、

「挾箱」は挾竹の遺製に

して、幕府の頃士より以上

の者、他行する時、着替の

上下等を入れて、俣に持せ

しもの、大名の行列にも用

ふ、別記を見よ、

「中間」は昔武家につか

はれし者、侍の下小者の上

なれば、中間と稱せし由、

秋草に見えたり、

「徒士」は徒行にて供す

る卑き侍の稱、

「若黨」も武家につかば

れし者、もと若き侍共とい

ふ意、

八聲の鶏の段

土師の兵衛は一間より。そつと拔出前栽の。勝手覚えし切戸口。

錠捻切て押ひらけば。外から相圖の挾箱。持出す中間。徒士。

若黨。「コリヤやい。吩咐た人數の装束。相丞を迎ひのはり輿。

スハといふ時間に合せと。家來共先へ歸し。挾箱引だかへ。月

かげ漏るゝ木の間く。うそく窺ふ同腹中。親人お首尾は。

件の物は参りしか。忤氣遣い仕るな。「コリヤ此中に計略の彼一

物。大事の談合爰へくと。大庭の池の邊りで呷く親子。宵か

ら素振に氣を付て。宿禰太郎に目放しせず。立田の前が物かげ

より。聞く共しらず宿禰太郎。先程お聞なさるゝ通り。判官代

輝國。迎ひに参るは八つの上刻。時平公よりお頼みの。菅相丞

殺す工面。質物仕立迎ひと偽り。請取て途中でぐつ。とはいふ

「張輿」は貞丈雄記に「張輿といふは、疊の表を張りて包み、おしぶちを打ちたるなり」と見ゆ、これは罪人など乗する輿にて、文治元年宗盛薨はれて、鎌倉へ護送されし時も、元弘の亂に俊基の乗られしも、此輿なり、

「合せ」は合せよ、
「判官代」は道明寺の段を見よ、

「八つの上刻」は今の午前三時頃、八つは丑の刻にて、午前二時より四時に至る、これを三分して、上刻中刻下刻と稱し、上刻は二時四十分迄、中刻は三時二十分迄、下刻は四時迄の割なり、いつにてもかく心得べし、

「ぐつ」は刺し殺すないうふ、

物の。一番鶏のうたはねば。姑の片意地。名残惜んで渡されま

い。八つ鶏の啼ぬ先に。宵啼する鶏。是に有るかと。挾箱より

取出し。「ホ、皮膚のよい白相國。兎斯うする内もふ夜半。一調

子はり上げ。存分にうたふてくれ。一聲聞ねば落付ぬ。親人な

ぜ鳴ませぬの。「イヤ其分では鳴ぬ筈。宵鳴は天然自然。極めて

は鳴ぬもの。夫れを鳴すが秘密事。大竹の中へ熱湯を入。其上

にとまらすれば。陽氣の廻るを時節と心得時をつくる。留り竹

も挾箱に入て來た。臺子の湯もたぎつてある。釜ぐちそつと取

てこい。「ホ、取てくるは安い事。湯を仕かけても鳴ぬ時は。「ハ

テくどく。鳴ぬ時は又分別と。親子が奸計。南無三寶一大事。

先へ廻つて母様へ。おしらせ申して。「イヤい

はいでは又こちらが。いふてはあちらが。こちらがと。心迷ひ

し胸撫おろし。「宿禰様。太郎様は何處にと。尋る聲に。はつと

「一番鶏」

は曉の第一聲

「白相國」

は白き鶏の名

なるべし、

「極めてば」

はきまつて

は、

「大竹の中へ熱湯を 入れ云々」

かくして鶏を鳴すること、何の書に見えたるか

知らず、いづれ鶏は曉の陽氣に催されて、鳴くといへ

るより出たる事にて、物識りぶる人の手に行はれしものなるべし、

「養子」

は茶の湯の式に用ふる棚、

「釜ぐち」

は釜ぐるめ、

「南無三寶」

は失敗又驚愕などの時發する語、三寶の加護を求むる意より出なるべし、

三寶は佛法僧、

「宿禰も」

「土師の宿禰」などより取れる名なるべし

總解を見よ、

二人が狼忙けでん。鶏隠す挾箱。あたふたしめて左あらぬ風情。

「イヤ事くしう呼立るは。何ぞ急な用でも有か。さもない事なら不遠慮千萬。親人も此宿禰も。肝にこたへて悔りしたと。い

ふ顔つれく打眺め。お前方の悔りより。わしに悔りさゝしやんした。聞えぬ連合舅君。質迎ひを捨て。菅相承様殺さうと

は。あなたに何ぞ恨みが有か。但しは時平に頼れしか。欲には馴染の女房も捨。母様の義理も思はずか。お前は捨る心でも。

わしや得捨ぬ太郎様。「コレ申し親父様。思ひとまつて下さりませと。舅を拜み夫を拜み。聲も得立ぬ貞女の思ひ。涙操を顯は

せり。兵衛は宿禰に胸せし。「イヤはや眞身の意見に逢ふて。親も悴も面目ない。向後心改る。嫁女此事聞流しに。「ア、勿躰な

い。聞流さいでよいものか。御得心と有からは。此世ばかりか未來迄。かはらぬ夫婦舅君。まだ如月の餘寒も烈し。炬燵に膚

「狼忙けでん」は驚きう
 ゐたへること、けでんはけ
 てんの訛にて、化轉など音
 くとぞあやしみ驚くこと、
 「あたふたしめて」とか
 けたり、紋切形あたふたは
 あわつるさま、
 「事々しう」は仰山らし
 く、
 「つれく」はつくく
 「涙操を顯はせり」大功
 記に「涙に誠あらはせり」
 思ふても及ばぬ女の操は、
 いつも涙なるべし、
 「向後」は以後、
 「如月」は陰曆二月の異
 名、
 「先に立田」とかけたり
 「後袈裟」は後よりの袈
 裟切り、
 「無念」は過失の義より
 轉して残念の意、
 「おと骨立てな」はしや

温め。酒一つ上たい。「サアお出と。先に立田がそれそこを。心
 得太郎が後袈裟。肩先四五寸切られながら。振返つて掴み付。
 「エ、是人でなし卑怯者。一人の手にも足らぬ者。欺し殺しが本
 望か。女の義理を立過し。悔しや無念と罵る聲。おとぼね立な
 と宿禰が下着。褌先口へ押込捻ふせ。肝先ぐつと一抉り。兵衛
 は前後に心を配り。悴息は絶たか。氣遣ひめすな只今とぞめ。
 扱此死骸は。問に及ばぬ此大池。體を浮さぬ手ごろの石。袂や
 帶にくゝり添。深みへやれと二人して。投込死骸は紅の。血汐
 に染る池迄も。立田が名をや流すらん。「コレ親人。是は是でも
 濟ぬは鶏。臺子の湯を取て参らう。太郎夫には及ばぬ。鳴かす
 仕やうは身共に任せと。武士の嗜む懷中松明。手はしかく燃し
 立。池の中へ明りを見せ。挾箱の蓋仰向。鶏を上に乗せ。浮め
 る池の水の面。刀の鐙指延す。腕一ばいに押やれば。動かぬ水

べるな、おと骨はおとがひ
骨の略にて、願のこと、

「後先口へ」これ露顯の
もと、

「血汐に染むる云々」立

田川に紅葉の流るゝが如し
よく書きたり、立田の名は

これよりつけしなり、

「鳴す仕様は云々」兵衛

思ひつきたり、龜の甲より

年の功、

「半段」一段は三百間な

れば百五十間の事なれど、

軍記物などには、十間許に

用ふる如し、されば五六間

の意に見るべし、

「聞けふ」は聞かせやう

「鶏を船に乗せ云々」俗

説に聞く所にして、屢行は
るゝ事なれど、出典は知ら
ず、これも其死骸のある所
に到れば、陽氣を感じて鳴
くと、いへるよりの事なる

も夜嵐に。立つや小波の激々につれ。半段計流れ行く。「親人何

をなさるゝ事。挾箱の蓋を船にして。子供のする業おとなげな

い。あれが何の役に立。「ハ、ハ、ハ。譯を知らずば云ふて聞けふ。

惣別。淵川へ沈んでしれぬ死骸は。鶏を船に乗て尋れば。其死

骸の有る所で時を作る。鶏の一徳思ひ出し。池へ沈めた立田が

死骸。今一役に立て見る。うまい手番。拍子まんが直つて來た。

あれく太郎。羽たゝきするは死骸の上か。そりやこそ鳴いた

は東天紅。「ソリヤ又うたふはとんでんかう。八つにもならぬ宵

鳴の。聲さえかへる春の夜や。庭木の埒に羽たゝきして。一鶏

鳴けば萬鶏うたふ。函谷關の關の戸も。開く心地に親子が悦び。

是れから急ぐは菅相丞。迎ひの拵へ氣がせくと。兵衛は出て行

く切戸口。宿禰太郎は工みの仕殘し。だめを聞かして入りにけ

り。

べし。

「今一役に立てゝ見る」

嫁とも妻とも思はぬ、親子が剛愎非道、寫し得て妙、

「拍子まん」

は拍子のよきなをいふまんに運仕合せなどの意、

「東天紅」

は鶏の鳴聲にあてたる字なり、東が白むと鳴くといふより、

「一鶏鳴けば萬鶏云々」

一鶏の宵鳴に催されて、萬鶏時をつくる、これさながら函谷關の故事、書きつゞけたる處頗る妙「關の戸も開く心地に」よくいひたり悦ぶさま見るが如し、函谷關の事は昔齊の孟嘗君といふ人、秦を遁れ去りし時、函谷關といふ關所に至りしに、此所の規則として、鶏鳴かれば關の戸を開かず、孟嘗君追手の及ばん事を懼れしに、供の中に鶏の真似の上手なる者ありて、空鳴をうたひしかば、關所の鶏これに催されて、悉く鳴きたり、よりて戸を開きしゆゑ、遁るゝ事を得たりといふ、

「駄目をさかして」

は餘計の念を入るゝないふ、甚より出でたる語なるべし、

道明寺の段

道明寺の段

「熨斗」 はのしあはびの略、正しくは伸蛇と書くべし、蛇の肉なかんべうの如く薄く長くへぎて、引延ばして乾したるもの「延長」の義に寄せて、祝事の肴に用ふ、なほ別記を見よ。
 「昆布」 は略してこぶといふ、古名「ひろめ」なるより「廣めの義に寄せて、祝事の肴に用ふ、今は俗に「よるこんぶ」などいへり。
 「島臺」 は松竹梅鶴龜及高砂の尉姥などを飾りつけ祝事に用ふる臺にして蓬萊島にかたどり、古への洲濱の遺形なりといふ、なほ別記を見よ。
 「歸洛を松の島臺」 とひけたり、歸洛に都へ歸へること、昔洛陽は支那の帝都

早刻限ぞと御膳の拵へ。銚子。土器。熨斗。昆布。姦共に。島臺持せ。伯母御座敷へ出給ひ。百日千夜留めたり共。別るゝ時はかはらぬ辛さ。此上頼むは御免の勅訖。歸洛を松の此島臺行末祝ふ熨斗昆布。菅相丞も此の間。心づかひの御一禮。互に盡ぬ御名殘。宿禰太郎罷出。「御立の刻限迎。早門前迄迎ひの官人。判官代輝國は路次の用心。辻固め。只今旅宿を立申され。興昇の官人に譜代の家來を相添られ。只今は參上と。怪しの張興昇入れて。時刻移るとせり立る。菅相丞は悠々と。大廣間より出させ給ひ。興に召す迄見送る老母。人前作つてにくくと。泣ぬ別れぞ哀れなる。宿禰太郎も御見立。門送りして立歸り。「ヤレ嬉しや仕廻が付た。覺壽様もお氣休め。寐間へござつ

たりしよりいふ、

「判官代」は院の廳（上

皇御所）の官名にて、諸大

夫これに任するよし、職原

抄の法に見ゆたり、朝廷の

判官と分つため、代の字を

添ふ、

「路次」は道中の意、

「譜代」は代々仕ふる臣

下の稱、家來の事は前に解

せり、

「まだいの」はさうでな

いと否む詞、

「いきやろ」は行きませ

う、

「花壇」は庭園を一段高

くして、草花など植ゑたる

ところ、

「鼻も動かさず」

は其氣

もせぬをいふ、嘘には鼻が

動くといへるよりの語なる

べし、

て。「イヤ寐たうても寐られぬわいの。ねられぬとは御氣色でも

「アレまだいの。客を立て嬉しいと。一ト道な聲殿の悦び。一つ

屋敷に居ながらも。暇乞も得せいで。刈屋姫が悲しかる。人

の逢のもけなりかろと。かけ構はぬ立田さへ。それで態と呼出

さなんだが。機嫌よふ立しやつたを。悦びにはなぜこぬぞ。誰

ぞいて見てこいと。云にきよろ付宿禰太郎。秘どもは立戻り。

「奥にござるは。刈屋姫只御一人。立田様はござりませぬ。何じ

やいな。内を放れてどこへいきやろ。今一度見てこい。座敷の

隅々かくれぐ。尋々と吟味の厳しさ。挑燈手で若黨中間。

幾人有ても行届かぬ。花壇築山。手分して。尋る奥の池のはた

芝に溜つた生血を見付け。「コリヤく此の血の流れ込む。池を

捜せと聲々に。水心得た奴共。飛込く水底より。かづき上た

る立田が死骸。驚き騒ぐ家内の騒動。太郎は鼻も動かさず。「殺

「……時に……かゝる例も」
と
かけたり、

「……出あからふ」
は出よの
賤語、
「ナイく」
はハイく
奴などの詞、但言集覽に

したやつは内にあろ。詮議濟む迄門打て。家來共動かすなど。
わめきちらせば母覺壽。姫もかしこへ轉び出で。「コハ誰人の所
爲ぞや。先からお顔を見なんだは。伯母様のお傍にと。思ひ設
ぬ此死骸。父上には生別れ。お前には死別れ。時もかはらず日
もかはらず。悲しさつらさ一時に。かゝる例も有事かと。老母
に取付き悔泣。「オ、道理く。和女はおれが傍にと思ひ。おれ
は和女が傍に居ると。思ひ違ひが娘が不運。母が因果でおちや
るはと。かつばと伏て正體なし。太郎傍へ立寄て。「涙が死人の
爲にはならぬ。女房共への追善には。殺したやつをひつぱり切
是にて詮議仕らんと。椽端に大胡座。男女に限らず家來のやつ
ばら。片端から詮議する。「マアとつ付にをる宅内め。身が前へ
出あがらう。「ナイくく」と。御前にかつつくばい。「人はしら
ず拙者めに。お疑ひはござない筈。お死骸を取上た。御褒美を下

「上野高崎にては、應聲に
ナイといふ、西國にても然
りと聞けり、諾字云々」と
見ゆ、
「かつくばい」 ばかい
つくばひの音便、
「まぢくし」 ば思々し
禍の字を書く、

「池が血へ流れ込んだ」
といへるを「血迷ふて 何ほ
ざく」とば、太郎きばどい
所で洒落たり、血迷ふは上
氣するをいふ。ほざくはぬ
かす、
「引たて」 ば引たてよ、
命詞を省く事、此種の本に
多し、
「詞のてんぐ」 は詞の

されうで。一番にお呼出し。忝い義ではごはりまするでごはりま
す。「ヤアまがくしい。褒美とは横着者め。立田が死骸池に有
るを。儕は如何して知りおつた。」サ、夫れ吐かせ。「イヤあの尻
も天窓も。見やう筈はごはりませぬ。池の深みへ。芝から傳ふ
た血を證據に。「ヤアぬかすな。挑燈の灯明りで、それがそれと
知れる物か。うぬが殺して沈めた池、外の者がどうしてしらふ
血の分では云譯立ぬ。是はお旦那無理おつしやる。云譯立たふ
が立まいが。池が血へ流れ込んだ。其外は存ませぬ。「ヤア池が血
へ流れたとは。血迷ふて何ほざく。きやつ詮議場で水くらはせ
白狀さする。それ引立と。宿禰も續いて立所を。老母押とめ。
「イヤ責めるに及ばぬ詞のてんでん。嬉しや娘の敵がしれた。「ハ
アせめなとは天晴お目高。科極つた罪人。女共へ手向る成敗大
袈裟に打放す。腕を左右に引ばれと。刀引さげ立寄る宿禰。イ

はしぐといふに同じ、展轉にて、詞のかはることなどいへるは、取るに足らず
 「成敗」 は仕置の意、
 「大袈裟」 は袈裟切りの事、
 「向ふ目當は云々」 ほんに油斷太郎、油斷の語は佛典より出づ、後にいふべし
 「弓手」 は左の手、弓を持つゆゑの稱、或る書に、左は陽なるゆゑ男にたとへ雄手といふなどあるば、笑ふべし、
 「急所」 は犯せば命にかゝる、身體の局部の稱、
 「下着の袈先云々」 先に聲を立てさせじ、と口に押入れた袈先の切れに目をつけて、敵と星をうたしめたる趣向、よく出来たり、
 「郡領」 は郡司ともいひ昔國司の下にありて、其郡

ヤ是成敗は常の科人。袈裟に切ては只一思ひ。苦痛させねば腹が癒ぬ。娘の敵初太刀は此母。跡は聶殿刀を借ると。甲斐ぐ敷も裾引上。向ふ目當は奴にあらず。油斷太郎が弓手の肋骨突込む刀に宅内は。命拾ふて逃て行く。宿禰太郎は急所をさゝれ。もがき苦しむ息の下。身共に何の科有つて。老耄めがと。いはせも果す。「覺えないとはいはさぬ」。我科を人に塗り。成敗をして見せだて。裾はせ折た下着の袈先切れて有る。其切れは。「コリヤ立田が口に聲立させぬ無理殺し。齒をかみしめ放さぬ袈先。切た事を打忘れ。儕が科を儕が顯はす極重惡人。死骸の前で敵を取る。母が娘へ手向の刀。肝先へこたえたかと。大の男を仕とめる老母。道に河内郡領の。武藝の筐残されし。後室とこそしられけれ。稍時移れば判官輝國。只今はへ御出と。家來が申すに老母は驚き。「相承は先程お立。誰を迎ひに。心得

を治めし長官、大領少領あり、世襲の職にして、土着の門地ある者、これに任ず徳川時代の大庄屋の如き「後室」は貴族のやまめの稱、郡領などにいふは過ぎたり、

「船がゝり」は碇泊すること、

「用捨」はゆるしの意、容赦と書くが正しきとぞ、
「鼻の先な」は淺はかな

ぬ事ながら。此方へ通しませい。刈屋姫は奥へ行きや。こいつはまちつと苦痛をさすと。刀を其儘體押退け。出向へば、輝國も早入來り。「お迎ひの刻限。御用意よくば早お立と。申す詞の先折て。」イヤコレ輝國殿。何おつじやる。相丞の迎ひに足下の家來が先程見え。請取て歸られたは。もふ一時も先の事。「ヤアこれく伯母御。身が家來に渡したと。旁以て心得ず。鶏の聲に刻限量り。只今鳴た旅宿の鶏。八つに參る迎ひの約束。家來といはふが。直に身共が參つた迎。刻限も來らず。鶏も鳴ぬ先。渡したといふては濟まい。船がゝりの其間。伯母御に逢すは。此の輝國が情の用捨。今日の今になつて名殘も一倍。鳴へはやらぬ。渡したといへば夫で濟むと。鼻の先な女子の了簡。昔相丞の怨にこそなれ。爲にはならぬ。偽りな申されぞ。イヤ偽りは申さぬ。庭で鳴た鶏の聲。そこへござつた迎の衆。渡したに

「最期」は臨終の事より轉じて死をいふ、

「一時違へば三里の後れ」

一時三里の犬走りといへるより書く、昔の一時は今の二時間、

「ぬけく」は知らぬ状態をいふ、東京にて「しらをきる」といふに同じ、

違ひはないが。請取ぬとおつしやるので。娘が最期。聲めがあるさま。思ひ合せばさつきに來たは質迎ひ、「コレ伯母御。内の騒動死人の有る上。質迎嘘では有まい。譏者共の所爲で有ふ。一時違へば三里の後れ。ぼつ付て取返さんと。せきにせいてかけ出す輝國。「ヤアく判官先待れよ。菅相承は是に有りと。一間より出給ふ。覺壽は悔り。さつきに別れた菅相承。そこにはどうしてくと。不審の立も道理也。判官輝國打笑ひ。ぬけぬけとした伯母御の偽り。暫時の仰天。相承是にましませば。輝國が安堵く。「見え渡つた此御難義。譯も聞たし。力に成て進ぜたけれど。私ならぬ警固の役目。早刻限も移りぬれば。いざ御立と勸むる所に。先程見えた警固の役人。たつた今門前迄。何ちや警固が。「ハテよい所へ戻られた。嘘つかぬ覺壽が證據。是へ通し。輝國殿へ見せませう。「イヤ身が名を銜た質役人。直

「け。侮。す。り。の。」 けは強く
いふ爲の添辭、あなづりは
あなどりの訛、
「とでもない物」 ほとん
でもないもの、
「ぬ。つ。け。り。さ。ゝ。れ。た。の。」
は知らぬふりがして居られ
るの、
「ぬ。つ。べ。り。」 も知らぬふ
りないふ、ぬけく、ぬつ
けり、ぬつべり、皆抜けに
て同語原なるべし、
「し。や。ち。こ。ぼ。る。」 はしや
ちほこぼるの略にて、しや
ちばるともいふ、魑はこの
如くつゝ張つて、屈伸のな
らぬをいふ、

に逢ては悪かるべし。忍んで様子を窺はんと。相丞諸共一間の
障子。引立内に隠れ居る。輿に先立つ警固が大聲。「コレ老母。
輝國の名代とけ侮づり。とでもない物身共に渡し。能くぬつけ
りさゝれたの。是は迷惑。菅相丞を請取ながら。とでもないとは
何おつしやる。「アレまだぬつべり。相丞は相丞でも。木で作
つたはこつちにいらぬ。肉付の菅相丞。替える氣で持て來た木
像。「コリヤ此輿に。といふに覺壽も心付。「エ、忝い。扱は魂を
籠られし。木像で有たかい。猶も證據を見届けんと。心の悦び
押隠し。「此方の言分合點がいかぬ。其木像見せさつしやれ。「チ
、しやちこぼつた荒木作り。「サア今見せうと明る戸の。輿に召
たは。木像ならぬ優美の姿。菅相丞莞爾と笑ふて立出給へば。
警固はぎよつと呆れ顔。覺壽も違ひし心當。障子の内と今見る
姿。心どきまき疑ひながら。「ア、よう戻して下さつた。慥に伯

「どこへく」 はどつこ
いゝ、さうはさせぬとい
ふ時發する語、

「のぶとい」 はしづとい
といふに同じ。野太い、寛
太いなど書けど、皆當字な
るべし、
「わいら」 はわしらの音
便、汝等の意、一人稱を二
人稱に用ふるは、作者の常
「警固の中から」 如何な
る剛惡の兵衛、我子の半
死と聞いては、飛出さざる
を得ず、

あいやけ」 翌嫁の親同
士の稱、

母が請取ました。「ヤアどこへく」。そりやならぬ。とはいふ物
の。連て歸つて見たのは木像。すりかへられたと氣が付いて。
かへに戻つた。爰ではほんの昔相丞。おれが目の悪いのか。見
どころに寄てかはるか。い。「イヤ替らうがかはるまいが。戻された昔
相丞。いさ此方へと立寄る覺壽。「ヤア寛太いと突飛し。相丞を
又輿に乗せ。戸を引立て家來に向ひ。「コリヤ儕輩も様子を見る
通り。いかにしても怪しい事共。此分では歸られず。念の爲家
搜しすると。蹈込先に宿禰太郎。半死半生のた打苦し。南無
三寶太郎様が切れてござる。旦那くと呼ぶ聲に。警固の中か
ら親兵衛。前後もさらに辨へず。走寄て引起し。「コリヤ悴。此
深手はどいつが所爲。相人を知らせと。氣をせいたり。「のふ兵
衛殿。相手は姑。「ア、わしが手につけた。「ヤア翌を手にかけ。
落着き自慢。何科有て身が悴を。「ヤアとぼけさしやんな姫殿

「棟梁」

は頭の意、

「た・く・み・の・破・れ・か・ぶ・れ」
面白し、

「利腕」 は右の腕、

「擬勢」 はつくり勢ひ、

そいつが立田を殺した時。こなたも手傳ひ仕やろがの。娘の敵切たが何と。質迎ひの棟梁殿。何も角も顯はれ時。さつばりといふた。く。「エ、残念く。悴めが出世を思ひ。時平公に一味して。菅相丞を殺さん爲。鶏に宵鳴させ。十が九つ仕課せた兵衛が方便。腐り婆めに嘆ぎ出され。殺された悴が敵。覺悟ひろげと飛かゝるを。「ヤア左はさせじと判官輝國。小蔭より顯はれ出。覺壽をかこふて突つ立たり。「ヤアどなたが出てもびく共せぬ。兵衛が奸計の破れかぶれ。死物狂ひの働き見よと。切てかゝればかいくぐり。持たる刀踏落し。利腕つかんで引りかへし。足下に踏付大音上げ。「ヤア輝國が家來共。質者めらを片端から。くゝれくゝといふ聲に。始めのぎせいぬけくゝに。一人も残らず逸失たり。覺壽はとつかは輿の戸の。明る間嚙やお氣詰りと。内を見れば這は如何に。筐の木像又恟り。是はいかに

「目利なされて」の語悪くはあられど、餘り滑稽めきて、かゝる歎きの場合にそはす、

「怪我」は傷又過失などの意、もと穢れの略にて當字なる由、和訓栞に見ゆ、

「有爲轉變」は世の事のばいなく、變りやすきないふ、佛典の語、

と立歸り。こなたの障子押明れば。伯母御騷がせ給ふなど。菅相承の御詞。爰でも恟りかしこでも。恟りびくり心に心の迷ひ。どちらがどふちや輝國殿。目利なされて下されと。問はるゝ人も問ふ人も。呆れ果たる計也。相承重て。輝國の迎ひ遅參故。睡む共なく暫時の間。物騷しく聞えし故。窺ひ見れば兵衛が奸計。太郎が所爲。立田の前ははかなき最期。是非もなし。伯母御の心底さこそく。某是へ來らずば。かゝる歎きも有るまじと。今更悔みの御涙。「イヤ娘が命百人にも。かえがたき大事のお身。怪我過のなかつたを。悦びこそすれ何の泣こ。何のくといふ目に涙。のふ輝國殿。悪事の元は其兵衛。世の暇を早ふく。太郎も共にと立寄て。髻引上げ。相承の堅固の有様。己れ親子に見せたが本望。娘が恨も晴つらんと。刀を拔ば息絶たり。「へエ憎いながらも不便な死さま。有爲轉變も世のならい。

「貯へ過した耻白髪」と

かけたり、

「孫は得見いで憂目を見る」

句も調もよし、

「逆縁ながら」は逆さま

事ながら、逆縁は親が子を

吊ふごとき、逆さまの因縁

をいふ、

「種々因縁而求佛道」は

様々の因縁にて、佛道を求

め入るといふこと、

「水もたまらず」はすつ

ぱりとの意、

「めで」は馬手と書く、

右の手の事にて、手綱を取

り馬を馭するよりの稱、或

る書に、右の方は陰なるゆ

ゑ、女にたとへ雌手又妻手

など稱すといへるは、笑ふ

べし、

「いやとよ」はさあとい

娘が最後も此刀。聲が最後も此刀。母が罪業消滅の。白髪も同

じく此刀と。取直す手に髻拂ひ。「初孫を見る迄でと。貯へ過し

た耻白髪。孫は得見いで憂目を見る。娘が菩提逆縁ながら。吊

ふ此尼。種々因縁而求佛道。南無阿彌陀佛と唱ふれば。菅相丞

も唱名の。聲も涙に回向有る。判官輝國大きに感じ。伯母御前

に先とられ。跡にさがつた儕が成敗。強欲非道の皺頭と。水も

たまらず打落す。覺壽は木像抱抱え。菅相丞の右手の方。御座

を並べて直し置き。「兵衛親子が奸計も顯はれ。何も角も納りし。

此木像の不思議な働き。かゝる例も有る事かや。「いやとよ最前

もいふ如く。匹夫くが工みも顯はれ。我急難を遁れしも。暫

時の睡眠前後はしらず。木に彫み筆に書く。例は本朝名高き繪

師。巨勢の金岡が書たる馬は。夜なく出て。萩の戸の萩を喰。

唐土にも名畫の譽れ。吳道子が墨繪の雲龍。雨を降せし例も有

ふほどの意に見るべし、
「匹夫」は賤しき者の稱

罵る語となる、賤しき者は
召仕ふ者なく、只夫婦匹偶
するゆゑの稱とぞ、

「巨勢の金岡」は中納言

野足の子、清和天皇より醍
醐天皇まで五朝に仕へ、繪
の妙手にして、巨勢家の開

祖なり、紫宸殿聖賢の障子
を畫き、を以て名高し、彼

れが畫きし内裏の馬は、毎
夜出で、萩の月の萩を喰ひ

仁和寺の馬は、近傍の田野
を荒せし由、本朝畫史、古

今著聞集等に見たり、
「萩の月」は天子の常に

居給ふ、清凉殿にあり、
「英道子」は唐の玄宗頃

の人にして、仙術を得、極
めて術の上手にして、畫き

し墨繪の龍、雲を起し雨
を降せし由、名畫錄に見

り。又神の尊像木佛などの。人の命にかはらせ給ふ。例はかぞ

へ盡されず。「菅相丞が三度迄。造り直せし物なれば。木にも魂備

はつて。我を助けし物ならん。讒者の爲に罪せられ。身は荒

磯の島守と。朽果る後の世迄。筐と思し召されよと仰は外に荒

木の天神。河内の土師村道明寺に。残る威徳ぞ有がたき。輝國

四方を打眺め。「思はざる義に隙を取。夜も明はなれ候へば。御立

ぞふと申すにぞ。又改まる暇乞。伯母が寸志の餞別せん。用意

の物こなたへと。刈屋姫の上着の小袖。かけたる伏籠諸共に。

御傍近く取直させ。浪風あらしき楫枕。餘寒を凌がせ申さん爲。

伯母が心を薰しめた。小袖を島迄召るゝ様に。輝國のお世話な

がら。頼ますると有ければ。「是は宜しき進ぜ物。苦の香防ぐと

め木の小袖。家來に持せ參らんと。立寄伏籠に手をかくる。相

承しはしととゞめ給ひ。「御恩を厚く籠め給ふ。伏籠にかけし此

たり、

「島守」

は島を守る者、

遠國へ流罪の身になぞらへ

ていふ、増鏡に、後鳥羽院

隠岐へ流され給ひての御歌

「我れこそは新島守よなき

の海の荒き浪風心して吹

け」

「仰は外に荒木の天神」

とかけたり、荒木の天神の

事は、總解を見よ、

「土師村」 は今の道明寺

總解を見よ、

「代籠」 は火籠とも、薰

籠ともいひ、竹籠に紙を張

り穴をあいて、火鉢の上に

ふせて衣に香を焼きしむる

者(なほ別記を見よ)此事を

知らざれば、下の謎解けず、

よく心得置くべし、これよ

りは、覺壽尼が伏籠の中に

刈屋姫を伏せ、其上に小袖

をかけて、これを島まで召

小袖。中なる香はきかね共。名は大方伏屋か刈屋。伯母御前よ

り道眞が。申し請し女子の小袖。我身にはあはぬ筈。身幅も狭

き罪人が。たゞ其儘にお預け申す。我子袖と思し召。立田の前

が追善の。佛事も共にと伯母御前の。心を悟る御詞。骨身にこ

たへ忍び兼。思はずわつと聲立て。歎くに扱はと輝國も。心を

感じ萎れ入る。覺壽が心は伏籠の内。泣たは結句あの子が爲。

別れにちよつと只一目。伯母が願ひを叶へてと。立寄る袖を引

とどめ。「お年故のそら耳か。今鳴たは慥に鶏。あの聲は子鳥の

音。子鳥が鳴は親鳥も。鳴は生有るならひぞと。心の歎きを隠

し歌。「鳴はこそ別れを急げ鶏の音の。聞えぬ里のあかつきもが

な」と詠じ捨。名残はつきずお暇と。立出給ふ御詠歌より。今

此里に鶏なく。羽たゞきもせぬ世の中や、伏籠の内をもれ出る

姫の思ひは羽ぬけ鳥。前後左右をかこまれて。父は元より籠の

連れ給へと請ふを、菅公が
辭するといふ互の謎がけな
り、頗る面白く極めて巧み
に書きたれば、其心して讀
むべし、

「棹枕」 げ船やどりをい
ふ、散木和歌集に「伊勢の
海士の皆屋の床の棹枕洗ふ
さ涙に目をさましつゝ」

「心を薫きしめた小袖」

心を込めた子といふ謎、小
袖に子を含めたり、

「皆の香防ぐ留木の小袖」

「御恩を厚く籠め給ふ」

「中なる香は云々」

香の名、よりて刈屋とつづけたるなるべし、妙々

「申し請けし女子の小袖」

刈屋姫は覺壽尼の娘にして道眞の養女なり「我身には合はぬ筈」刈屋姫の齋世親王に通ぜしより、讒訴せられ
て此不幸に至る、故に姫は道眞に面するを得ざるなり、總解を見よ、「身幅も狭き罪人か」流罪の身世に憚り多し、句皆小袖の縁より來れる
謎、誰かよくいひ得るものぞ、感嘆の外なし、妙味さとするべし、解すべからず、

「我子袖思と召し」 我子と思召しの謎、

「そら耳」 ばさうちがひをいふ、

「あの聲は子鳥の音」

ころ、更に妙、

鳥。雲井のむかし忍ばるゝ。左遷の身の御歎き。夜は明ぬれど
心の闇路。照すは法の御誓ひ。道明らげき寺の名も。道明寺連
今も猶榮えまします御神の。生るが如き御姿。爰に残れる物
語り。盡ぬ思ひにせきかぬる。涙の玉の木樨樹。珠數の數く
くりかへし。歎きの聲に只一目。見返り給ふ御容顏。是ぞ此世
の別れとは。知らで別るゝ別れなり。」

とはよくいひたり、味ふべし、留木は衣に香をたきしむるをいふ、これも小袖に子を含めり、

「御恩を伏籠に籠むるといふも面白し、

中は見れども、大方刈屋姫なるべしといふ意。聞かれどもはかゞれども、香をかぐを聞くといふ、伏屋か刈屋は

香の名、よりて刈屋とつづけたるなるべし、妙々

刈屋姫は覺壽尼の娘にして道眞の養女なり「我身には合はぬ筈」刈屋姫の齋世親王に通ぜしより、讒訴せられ
て此不幸に至る、故に姫は道眞に面するを得ざるなり、總解を見よ、「身幅も狭き罪人か」流罪の身世に憚り多し、句皆小袖の縁より來れる
謎、誰かよくいひ得るものぞ、感嘆の外なし、妙味さとするべし、解すべからず、

「我子袖思と召し」 我子と思召しの謎、

「そら耳」 ばさうちがひをいふ、

「あの聲は子鳥の音」

これ伏籠の中に泣く刈屋をいふ、最も妙、これをうけて、「子鳥が鳴けば親鳥も」 とつづけ、親子の情をいへると

ころ、更に妙、

「鳴けげこそ云々」

これ道明寺縁起に載せたる歌を取り來つて、巧に作れる積ならん、されどどうやら前後にそごはぬ心地すれば、其解に苦む、もと讀んで字の如き詠なれば、讀者の意に任すべし（強て庇護して解する必要もなかるべし）伏籠の小袖より、鷄にうつりての謎は、何ともいへぬ手際なれど、こゝに至てはいかゞ評せん、總じて淨曲作者は、歌にて馬脚を顯せり。此歌は道明尼寺にて借覽したる縁起にも、菅公の詠とせるが、何人かの戀歌なるべし、しかして同書にも名所圖會にも、第二の句「別れもうけれ」第四の句「なからん里の」としたり、作者の改めたるものなるべし、原歌の方大に勝れり、淨瑠璃社會に「聞き得ぬ里の」と語る人あれど、こは論外なり、

「今此里に鷄無く」

此詠により、道明寺の里には鷄をかばざりしといへど、今はさにもあらず、

「伏籠の中を漏れ出づる」

鷄としてたり

「姫の思ひは羽わけ鳥」

身の自由ならぬをいふ、よく書きたり、羽わけ鳥は羽の抜けかはる頃の鳥、

「父は元より籠の鳥」

擒はれの身をいふ、前の「羽わけ鳥の」句に應じ、更に「雲井の昔忍ばるゝ」とつづけたる處、妙味いふべからず、雲井

は朝廷の意、

「さすらへの身」

は流罪の身をいふ、

「夜は明けぬれど心の闇照らす云々」

皆縁の語、よく書きたり、

「生けるが如き御姿」

即ち荒木の天神、

「涙の玉の木櫓樹云々」

よくいへり、木櫓樹は、菅公手つがら寫されし經卷を、埋められし塚より生ぜしものとて、其實を貫ぬきて、珠

數となし、坊中より出せしといふ、これによりて書けるなり、委しくは總解を見よ、

菅原傳授手習鑑 車曳の段

總 解

此段は別により所といふほどのものありて。作れるにはあらざるべし。藤原氏の祖神たる。奈良春日明神を勸請せる吉田神社へ。其嫡流なる時平が參籠の途次。車を止めて。牛飼舍人の三つ子を爭はしめたる。趣向の妙はいふもさらなり。文章も例によつて上乘の出來前に本院の左大臣といひ。後に太政大臣といひ。前後合はぬやうなれど。かゝる事は作者の常にていふに足らず。

車曳の段

「鳥の雛の巢を離れ魚陸に上る」 浪人の比喩には頗る面白き句なり、漢籍の語より取りて作れるなるべし似たる例は甚だ多し、
 「舍人」 は牛車の牛飼の稱（もと朝廷の舍人より出で、牛車の牛飼、乗馬の口取などの稱となる）
 「御臺」 は貴族の妻の稱前に解せり、
 「笠ふか／＼と深緑 土手の並木にさしかゝる皆縁の語」「深編笠」 は浪人などの面體をかくす爲にかむりし編笠の深きもの、
 「内寶」 は人の妻の稱、内方と書くが正しいるべし、
 「成程道にて云々」 櫻丸落しまゐらせし宮姫君に追付き、飢實となりて、荷物

車曳の段

鳥の雛の巢に放れ。魚陸に上るとは。浪人の身の喩種。菅相丞の舍人梅王丸。主君流罪なされてより。都の事共取賄ひ。御臺のお行衛尋んと。笠ふか／＼と深緑。土手の並木に指かゝれば。向ふからも深編笠。我に違はぬ其扮装。互に夫ぞと近く寄。「梅王丸か。「コレハ／＼櫻丸。ヤレそちに逢たかつた。「マア咄す事聞く事有りと。兄弟木蔭に笠傾け。「扱先問はふ。其方は日外加茂堤より。宮姫君の御跡慕ひ。尋行しと内寶八重の物語り。何とお二方に尋ね逢ふたか。成程道にて追付奉り。菅相丞御流罪と聞より。對面なさしめ奉らんと。安居の岸迄御供せしに。御對面叶はず。輝國殿の計ひにて。御歸洛願ひの妨と。御二方の御縁も切られ。姫君は土師の里。伯母君の方へ御出。齋世の宮

の中に二方を忍ばせて伴せしなり、

「安居の岸」は安居天神

のある處、天王寺の數町西にある高臺なり、菅公左遷の時、しばしやすらばれしゆゑ、安居と名づけ其靈を祭るといへども、頗るあやし、別記を見よ、

「法皇」は宇多法皇にあてたるなり、法皇は光孝天皇の皇子にして、醍醐天皇の御父なり、承平元年崩す御年六十五、道眞は此法皇の御信任にて、立身せしなり、菅原傳授の總解を見よ「捨てふか」は捨てやうか、

「佐太」のことは佐太村の段を見よ、
「七十の賀」は古稀の祝ひ杜甫の詩に「酒債尋常有二行處、人世古來七十稀」こ

様は。法皇の御所へ供奉し奉り。事治りしと云ひながら。納らぬは我身の上。冥加に叶ひお車を引く。其有がたい事打忘れ。賤しい身にて戀の取持。終には御身の怨と成。宮御謀叛と讒言の種拵へ。御恩請たる菅相承様。流罪にならせ給ひしも。皆此櫻丸がなす業と。思へば胸も張裂ごとく。今日や切腹。あすや命を捨ふかと。思ひ詰は詰たれど。佐太におはする一人の親人。今年七十の賀を祝ひ。兄弟三人嫁三人。並べて見ると當春より悦びいさみおはするに。我一人缺るならば。不忠の上に不孝の罪。せめて御祝儀祝ふたと。詮なき命けふ迄も。ながらへる面目なさ。推量有れ梅王と。拳を握り齒を喰しめ。先非を悔たる其有様。梅王も理りと。暫し詞もなかりしが。「チ、道理く。我連も主君流罪に逢ひ給ふ上は。都にとゞまる筈なけれど。御館没落以後。御臺様のお行衛しれず。先此方を尋ねふか。筑紫

れより出づ、

「没落」はほろぶること

「配所」は流されたる地

「思ひの須彌大海」はか

ぎりなき思をいふ須彌は佛

説にある高山の名、前に解

せり、親は泣寄りに、互に

憂きを語り合ふ、兄弟中の

睦じさ、うらやましきまで

なり、

「雜式」は雑色と書くべ

し、雑役に使はるゝもの、

武家の中間の如し、安齋隨

筆に「雑色も白丁も、衣服

の色を以ていふにあらず、

雑色も白丁も無位無官に

て、衣仕する賤しきものな

り、雑色の色の字は品の字

の意にて、雑品といふが如

し、雑役を勤むる人品をい

ふなり云々」と見ゆ、

「いかつ聲」はいかつき

聲、

の配所へ行ふかと。右つ左つ心ははやれど。其方がいふごとく

年寄た親人の。七十の賀の祝ひも此月。是も心にかゝる故。思

はず延引。互に思ひは須彌大海。是非もなき世の有様と。兄弟

顔を見合せて。涙催す折からに。鐵棒引て先拂ひ。先退て片寄

れと。雜式がいかつ聲。梅王立寄り。どなたぞと尋れば。本院

の左大臣時平公。吉田への御參籠。出しやばつて鐵棒くらふな

と。云捨て急ぎ行く。「何と聞たか櫻丸。齋世の宮。菅相丞を憂

目に逢せし時平の大臣。存分いはふちや有まいか。成程く。

よひ所で出つくはしたと。兄弟道の左右に別れ。尻引褰げ身構

へし。今や來ると待居たる。程なく轟く車の音。商人旅人も道

をよぎる。時平の大臣が路次の行粧。さながら天子の御幸の

ごとく。隨身青侍前後に列し。大路せばしと輾らせたり。兩人

木蔭を飛で出。車やらぬと立ふさがる。「ヤア何者なれば狼藉す

「時平」を本院の大臣と稱す、

「吉田神社」は七京區吉

田町の北、吉田山神樂岡の麓にあり、郡名所圖會に「祭

神は南都春日明神と同じ、

神傳は大和名所圖會に見

たり、鎮座は清和帝貞觀年

中に、中納言山陰卿初めて

勸請し給ふ、又一説にはト

部家の龜祖兼延の勸請とも

いふ、南都は平安城より行

程遠ければ、此所に移し、

皇妃夫人の社參をたやすか

らしめんとなり」と見ゆ、

明治四年官幣中社に列す、

「參籠」はおこもりの意

なれど參詣と見てよし、

「よざる」は避くか、

「行粧」は行列のよそは

ひかざり、

「隨身」とは近衛府の舍

人が、弓箭をつけ劔を帶し

ると。顔を見れば松王が兄弟。梅王丸櫻丸。ム、聞えた。主に

放れ扶持に離れ。氣が違ふての狼籍か。但しは又此車。時平公

と知つてとめたか。知らいでとめたか。返答次第兄弟連。用捨は

せぬと。白張の袖まくり上。搦ひしがん其勢ひ。梅王丸冷笑ひ。

「ヤアいふなく。氣も違はねば此車。見違へもせぬ時平の大臣。

齋世親王菅相承。讒言によつて御沈落。其無念骨髓に徹し。出

逢ふ所が百年めと。思ひ設けし今日只今。櫻丸と此梅王。牛に

手馴し牛追竹。位自慢で喰ひ肥た。時平殿の臍。二つ三つ五六

百。くらはさねば堪忍ならぬ。いわれぬ主の肩持顔。出しやば

つて怪我ひろぐな。ヤア法に過た案外者。アレぶちのめせ引く

れと。共の侍聲々に。前後左右に追取卷。兄弟は事共せず。

取ては投退攔んでは。ぶち付く投付れば。傍に近付者もなし。

松王焦つて。「ヤア命しらずのあばれ者。何れもは御搆ひ有るな。

て供奉するをいふ、大臣大將などは八人の定なり、朝廷より給ふ、

「青侍」は公家衆の若侍をいふ（もと「あなざむらひ」を音讀せしなるべし）

「主に放れ扶持に離れ云々」惡口頗るよし、よく利きたり、

「返答次第云々」以下を

「返答せいと呼つたり、梅王ふつと吹出しム、ハ、ム、ハ、ハ、ハ、ハ」と直して

語る者あり、嗚呼其道の人に文學の暇なき、あはれむに堪へたり、此場合冷笑ひならざるべからず、吹出しにては滑稽じみていふに足らず、

「白張」は白き布にて作れる狩衣の稱、舍人などの着するもの（しらばりを音讀せしなり）

御主人の目通。御奉公は此時節。兄弟と一つでない忠義の働き。お目にかけん。ユリヤやい。松王が引かけた此車。とめらるゝなら留て見よと。鼻づら取て引出す車。「ホ、ウ櫻丸梅王丸。爰になくばいざしらず。一寸なりとやつて見よと。兩人轅に手をかけて。エイ／＼と押戻せば。牛も四足を立兼て。跡へ／＼とすさり行。松王車の後へ廻り。兩手をかけて力足。やらん。やらじの諍ひは。世にも希なる三つ子の舍人。互に劣ぬ主思ひ。命限り根限り。やツつ戻しつ。引合ふ車。大地は薬研と掘穿ち。土にへ込む車の轍。ヤア面倒な畜生めと。轍を放せば逸散に。牛は離れてかけり行。車の内ゆるぐと見えしが。御簾も飾も。踏折り／＼踏破り。顯はれ出たる時平の大臣。金巾子の冠を着し。天子にかはらぬ其粧。赫々たる面色にて。「ヤア牛扶持くらふ青蠅めら。轅にとまつて邪魔ひろがば。轍にかけて敷殺せ。」ヤ

「いせ笑ひ」 はあざ笑ひの意、

「沈落」 はおちふればつること、

「百年目」 は逃がれぬ場合にいふ語、

「牛に手馴れし竹追竹云々」とは、舍人として商賈の牛の如くあつかはんと惡口

「位自慢で喰ひ肥へた」何たる妙句ぞ、

「いはれぬ主」 はつまらぬ主（口に出してもいはれぬ意）

「案外者」 は思ひの外のやつ、慮外者に同じ、

「御奉公は此時節」 と乗出して「松王が引かけた此車」との廣言甚だ壯大、

「轅」 は車の前に差出てたる二本の木、

「やつ」 はやりつの音、

「やつ」 はやりつの音、

ア左いふ大臣を敷殺さんと。二人が力に車を宙だめ。引くりかへすを返されじと。捻合ふ松王。右へ押せば左へ押し。上つおろしつ二三度四五度。爰を先途と揉合しは。祭りの神輿に異ならず。時平は上より金剛力。どうと踏だる其響き。車も心木もこな微塵。碎けし轅を銘々提げ。大臣を打んと振り上る。「ヤア時平に向ひ推參也と。嚇と睨し眼の光り。千世界の千日月。一度に照すが如くにて。道の梅王櫻丸。思はず跡へたぢくく。五體すくんで働かず。無念く計りなり。何と。我君の御威勢見たか。此上に手向ひすると。御目通りで一討と。刀の柄に手をかくれば。ヤア松王待てく」と。車より飛でおり。「金巾子の冠を着すれば。天子同然。太政大臣となつて。天下の政を執行ふ時平が。眼前血をあへすは社參の穢れ。助け憎ひやつなれ共。下郎に似合ぬ松王が働き。忠義に免じて助けてくれる。ハ

「わだち」 は車の輪の跡

「くびき」 はながねの端

にある横木にて、牛の頭をつくるところ、

「ゆるぐ」 はいれ動く、

「金巾子の冠」 は天子の

御冠にて、金の巾子紙に巾子(つき立ちたるもの)を入れ、纒(垂れたるもの)をば

さみ給ふなり、

「牛扶持喰ふ青蠅めら」

とは「牛に手馴し」といへる

悪口のしつべい返し、舍人

を罵るには無上の名句、且

強くなくしく、權柄の程あ

らばれたり、時平も中々毒舌にたけたる男、

「宙ため」 は宙に上ぐるこ、

「祭の神輿に異ならず」 とはさてもたいした力、

「金剛力」 は仁王の如き強き力(仁王のことを、金剛力士といふ)

「推参」 は無禮の意、

「千世界の千日月」 とは佛説に、一の須彌山一の日月、一の四天下を一世界と稱す、故に千世界には、千の日月あるなり、時平の睨みし

おそろしき眼の光を、よくもいひたり、

「五體」 はからだの意(もと兩手兩足と胴をいふ)

レ命冥加な蛆虫めらと。邊りを睨んですゝみ行く。ふり返つて

松王丸。よい兄弟を持て。兩人共に仕合者。命を拾ふた有難い。

忝いと三拜せよと。いはれて兩人くわつとせき上。「エ、儕にも

言分有れ共。親人の七十の賀。祝儀濟む迄。ノフ梅王。ヲ、其

上では松の枝々切折て。敵の根を斷葉を枯さん。ヲ、夫は此松

王も。親父の賀を祝ふた跡で。梅も櫻も落花微塵。足元の明い

中。早く去れ。ヤア推参な。歸るを儕にならはふかと。詰

寄りく兄弟三人。互に残す意趣意恨。睨んで左右へ。「別れ行く

「太政大臣」

者常不任之、

は極官なり、唐名を相國といふ、職原抄に「師範一人儀形四海。無其人則闕云々、故云則闕之官。有德之撰、故非其人」

「血をあへず」

は血を流す、

「命冥加な蛆虫めら」

とは時平が人を人ともおもはぬ横柄の惡口、よく利きたり、

「松の枝々切折つて云々」

といへるにむかへて「梅も櫻も落花微塵」とはつよく面白く、且味ひふかし、

「足元の明い中」

川柳に「足元の明い中に子房逃げ」又足元の暗い中にと賊は逃げ」

菅原傳授手習鑑

佐太村の段

總解

白太夫 菅公須磨記に。白太夫は伊勢の人にして。年々都に上りて。公の許に宿れるが。流罪の折りしも來りしゆゑ。憚りて醒が井の常樂院に宿らせ。須磨まで伴ひ給へる由見えたり。此記は菅公流罪の時。自ら書き給へる都より須磨までの日記なりとて。はやく世にひろまれるが。あらぬ偽書なりとぞ。されど伊勢の人にして。御師めきたる大夫名なれば。これより伊勢の御師なりといひ出で。菅公時代に。御師といふものなし。遂に菅公の父子なきをうれひ。白太夫をして神に祈らしめ。公を得たれば。乃ち神の申し子にして。白太夫夫婦は其乳人なりといふ説も出で來。菅家端應錄には。名を松本春彦といひて。公に隨ひて配所に下り。薨去の後其遺

命を齎らして。公の長男高視卿の流罪地。土佐國の幡多郡に赴く途次。同國長岡郡大津の里の一寺院に没し。延喜五年十二月九日。年七十九。公の年忌に。其亡靈墓所へ參詣せる由を載せたり。北野にも。佐太にも。道明寺にも。末社に白太夫社といふあれば。太宰府にもあるなるべし。松本春彦などいへるは。名からいぶかし。そは兎もあれ。此白太夫を菅公の御領といへる佐太を預り。御愛樹の梅松櫻を。守り培ふ百姓となして。三つ子を産しめ。菅公これが烏帽子親となり。愛樹によそへて名をつけ。遂に敵味方三所に別れて。牛飼舍人を勤め。其極白太夫が筑紫の配所へ赴くやう。面白く仕組めるなり。飛梅の段の總解。及本文を參照せよ。

梅王松王櫻丸の事。松王の名は。北野の一夜松に取り。梅王櫻丸の名は。御愛樹の梅櫻に取れる事しるし。一夜松は。夢想によつて一夜に生じ。菅原傳授總解を見よ。梅櫻は。紅梅殿に並びありしが。梅

は東風吹かばの詠ありしゆる筑紫に飛び。櫻はこれなかりしかば。耻ぢて枯れたりといふ。されば松王を都に置き。梅王を筑紫に飛ばし。櫻丸を切腹せしめたるなり。飛梅の段の總解。及本文を見よ。しかして。松王は松の如く。剛氣にして動かず。梅王は梅の如く。潔白にして氣早く。櫻丸は櫻の如く。うつくしくしてやさし。所詮一作りとはおもはれぬ。異なる氣性を持ちて。別々に宮仕へをなし。梅と櫻に似もやらで。松のつれなく見えながら。いづれ劣らぬ忠義者。これに似合はしき名の。春千代、八重、といへる女房を配合して。極めて巧みに書きたり。いづれも氣質をよく書分けたる中に。取分け松王は上乘の出來。親兄弟にまで。悪者と思はるゝほど。舉動あくまでづうづしき中に。動かすべからざる度量見えたり。かゝる忠義を行ふには。此性根なかる可からず。又兄弟の中惡しきに拘らず。相嫁の睦じさ。うらやましきまでに寫せり。左に佐太

天滿宮につき。各所圖會を引く。

佐太天滿宮 佐太村にあり。此所京街道にして。茶店貨食屋あり。鳥居より中門まで。馬場前壹丁半許。

祭神菅大臣 御神體木像長貳尺許。社傳云御自作。此地の生土神とす。例祭六月十五日、秋祭九月廿日。本社の額。佐多天滿大自在天神。二品親王良尙御筆。

好文天神 本社の右傍にあり。

白太夫祠 好文祠の傍にあり。

末社 稻荷愛宕を奉る。手水鉢井筒。淀屋衛門。太郎寄附。中門の外にあり。一の鳥居の額。曼珠院良恕親王御筆。

勅梅 社前にあり。後水尾院より二枝の梅を賜ふ。當社神木に接木す。又御製の和歌を給はる。

後水尾御製 家の風世々に傳へて神垣やたえたるを繼ぐ

梅もにほはむ

竹内御門主良尙親王御副書曰

河内佐太宮は菅神の廟なり。しかれども近代社あれはてゝ。祭奠の儀式も難かりしを。永井信州大守尙政朝臣。再興せしにより。壯麗目を奪ひ。見る者は尊み聽ものはのぞむ。その頃太上天皇。百和香に梅の折枝を添へて。尙政朝臣に給はりしを。神の庭につきて瑞籬のうる物とす。これに依て右の御製を。尙政朝臣に下し給ふ。即ち之を納めて。内陣の寶物となしぬ。何の榮かこれに加へん。されば神の徳いよく。たかく。かれがまこといよく。あらはるゝものか。彼御製の由來を書つくべきよし。所望によりて止むことを得ず。しるしつくるものならし。

慶安元年大呂念五

北野寺務二品親王良尙書之

抑當社の勸請は。年曆久遠にして。其濫觴さだかならず。漸く永徳

年中の社記を存す。其後荒蕪して社頭も神さび。瑞籬もなだらかなりしを。慶安元年當境守屏。城州淀城主永井信濃守尙政侯。菅神を尊崇して。再び社壇を新に營みける。其より神威いちじるくして。社頭玲瓏たり。其頃太上天皇(後水尾帝)名香に二枝の梅を副へて御寄附あり。其頃は卯月の末つがたなりしに。社前の梅に二本の枝を接しが。勅のおもむきにや。神徳の尊きにや。不思議なるかな。二枝俱に婉然と榮えて。時ならぬ花咲き。實を結びけり。大君の御恵に御製の御威徳ぞと。神も梅も心ありしやと。四方の人々これを拜して。感涙膽に銘じ。拜瞻の人群をなせり。社頭の前には。淀の流れの川瀬舟。夜となく晝となく往かふ。汀なれば船の中より鳥居の整々たるを見るより。遙拜して行過ぐるも多かりき。

渡唐天神 後西院の帝。御手づから繡にて遊ばされける。御厨子の兩扉に。松梅の蒔繪あり。竹門良尙親王の御添翰。

當社神傳に云(始略)御左遷の折から。む月廿日といへるに。御領地なれば。しばらく此所にまし。都の噂とやか。御沙汰ありしにより。沙汰といふ名はとゞまりぬ。其折しも。諸人御徳を慕ひ奉りしにより。自ら御彫刻有て。残し置せ給ふ御神像なり。今も其古實残りて。例年正月廿日。氏子打寄り神前に於て。大神酒とてもてはやし侍る(末略)

菅公須磨記云 既にむ月廿日ばかりになん。門出をせよとて。かどの長のつたなぎらせめきて。出立事よ。刈屋姫白太夫ぬしを。須磨といふ所までと、つれなひてなん。あとにはそこくのもにつたふ

君が住む宿の木末のゆくゝもかくるゝまでに。かへり見しぞ。や(は)や(を)を正しとす
それより淀川尻などいふ云々(蹉跎山天満宮の條に出づれば

略す)

右須磨記の記は。御廟御神作といひ傳ふ。御寫の誤り。校合もあらかじめなれば。尙更書敬にたへざれども。河州佐太の庄聖廟へ納めんと。拜寫畢。少納言菅原家長謹書。

右須磨記の一卷は。沙汰の社由緒ある事をたゞされ。古地に違ひなきとて。菅家のもとたる。高辻家より書寫して納め給ひぬ。御自筆水鏡御影。御縁起六卷(筆六波羅西坊小納言阿闍梨。畫工奈良芝法眼觀深古縁起六卷以下略す)。

蹉跎山天滿宮。中振村蹉跎山にあり。中振出口二村の生土神とす。祭神菅大臣。神像長四尺許。社傳云御自作。

菅公須磨記云。それより淀川尻などいふ河瀬道にも。たどりぬれども。思はぬ道に思ひたつ事をなん。うろくずの網をもれぬ心ばへなど。口になへぬ。蹉跎の莊といふ所にて。晝餉して

なん。漸く都の山も見えずなりぬる事を歎く事しばらくなり。
立かへりいつし都の春霞よしこのたびはへだてぬるとも

(下略)

抑當社の神傳云。御神像は昌泰四年。菅公筑紫へ謫遷し給ふ時。京師に残し給ふ御息姫(菅公須磨記にかりや姫とあり)御父の別れを愁ひ給ひて。御跡を慕ひこがれ出で。此所に至り西の方を見給ひ。戀慕ひて蹉跎し給ふ事止まず。人々此御悲みを感じて。音に訓みてこゝを蹉跎といふ云々。丞相既に配所にて薨じ給ふ後。上天神通自在なるまゝ。忽然として此山に影向ありて。庭上の梅の木を以て。自ら尊像を一夜に彫刻し給ひ。此地にとゞめ。御息女の御心を慰め。形見とし給ふ。それより諸人奇特の思ひをなし。尊敬淺からず。遂に近郷二十四五村。生土神と崇め。毎年祭式怠らず。或年神前の座席を争ひ。村々別れくになつて。小祠を營みて例祭を

務むる事になりぬ。此本社に従ふ者は。漸く申振出口の兩村に限り。神像は當山を動き給はず。奇瑞あればこゝに残し奉る。慶長の兵火にも。社壇は焼失しぬれども。神像恙なし。これによつて諸人蹉跎天満宮古社とぞ。仰ぎ尊みける。

佐太村の段

「在々の鋤鋤までも云々」

軒にかけたる鋤鋤にて、初春の開散にして氣樂なる農家の狀をあらはす、いひ得て妙、

「二ものづくり」 は農を第一として、重ぜしよりいふ語、古來農は國の本なりといひてたつとびしなり

一農の一をうけて「一番村で」とつゞけたり、佐太な一番村といふ事、名所圖繪にも見ゆ、なほ別記を見よ、

「律儀一通」 は正直一方の意、律儀の語佛典より出でたるにあらざるか、諺草に「圓覺經云不令衆生入不律儀」

「佐太」 は河内國北河内郡にあり、佐太天満宮のあり

佐太村の段

春さきは在々の。鋤鋤迄も樂々と。遊びがちな一農。一番村

で年古き。人に知れし四郎九郎。律義一遍取得にて。菅相丞の

御領分。佐太に手輕き下屋敷。お庭の掃除承はり。松。梅。櫻。

御愛樹に。埴へ水の養ひも。根が農の鋤仕業。我身の老木厭ひ

なく。幹を肥しの百姓業。畑の世話より氣樂也。堤端の十作が

鋤打かたげ。門口から。四郎九殿内にかと。這入を見付け。こ

りや十作。畑へか。「イヤ今仕廻ふて戻つたりや。鼻がいふには。

何やら目出たい祝ひぢやて。大きな重箱に。眼へ入る様な餅

七つ。朝茶の鹽にも喰足ねど。貰はぬよりも忝い。禮も云たし

祝ひとは。マア何でござる。サイノ菅相丞様のふつて涌た御難

義。お下に住む儕輩が。身祝ひ所ぢやなけれど。爲にやならぬ

る所、委しくは總解を見よ
「松梅樓」の事は總解を見よ、根、老木、幹等皆縁の語に書けり味ふべし、

「堤端」佐太は淀川堤にそへり、

「大き重箱に云々」面白

「眼に入るやうな」は小さき、目出たに應ず、

「朝茶の鹽」極めて少きをいふ、京阪地方の農家などにて、朝起きて直に食するを朝茶といふ（多くは粥なり）これに少し鹽をさす

これなるべし、

「禮もいひたし」とて、

來ていふ禮の無禮さ加減心やすたでに憚らず、かざらぬ田舎の氣風見えて面白し、

「おらゝ」はおれらの轉

訛、

「ならぬさかいで」はな

さかいで爲るは爲るが。世間へも遠慮が有て。彼岸團子程な餅

七つ宛配つたは。此四郎九郎丁度七十。此春年頭のお禮に登つ

た時。おらが年をお尋七十と申たりや。古來稀な長命。其上

珍らしい三つ子の爺親。禁裏から御扶持下され。悴共は御所の

舍人。目出たいく。産れ月。産れ日。産れ出た刻限違へず。

七十の賀を祝へ。其日から名を改へとて。ノウ聞しやれ。伊勢

の御師か何ぞの様に。白太夫とお付なされた。則今日が誕生日。

白黒まんだらかい掃溜へ投て退け。今日から白太夫と云ふ程

に。さう心得て下され。夫はめでたい。次手ながら問ひましよ。

三つ子産むと扶持下さる。其謂れも聞しやつたか。サイノ死だ

女房が産だ時よ。邊隣の外聞。ひよんな事ぢや。と思ふたがも

つけの僥倖。三つ子の爺親。一代は作り取の田地三反。日本計

ぢやないげな。唐迄もさうぢやてゝ。男の子なりや御所の牛飼。

らぬによつて、

「彼岸園子」 は彼岸に佛

へ供へる小き園子、彼岸の

事は後にいふべし、

「古來稀な長命」 は七十

を古稀と稱し、杜子美が「酒

債尋常有行處、人生古來七

十稀」といへる詩よりい

へるなり、學才ある菅相座

が詞を、白太夫が口うつし

に話すところ、頗る妙、

「禁裏から御扶持を下され」

三つ子の爲めに、朝廷より

扶持を賜はりし事國史に見

ゆ、又乳母を付せらるゝ事

もあり禁裏は朝廷のこと、

禁闕の裏の意、

「舍人」 は牛車の牛飼の

稱、

「御師」 は伊勢の卑き神

官の稱にして、いづれも何

太夫など稱す、參拜する諸

國の講中の世話をなし、太

女郎なれば東童とやら。是も御所でつかはるゝ。法式は忝いも

の。旦那殿は流罪なれど。おらは所も追立られず。下された田

地は其儘。そちの鼻も若い程に。産すならおらにあやかりと。

咄しの中道たどりくるは。櫻丸が女房八重。今日は舅の祝ひ日

迎。風呂敷包片手に提。嬉しや爰ちやと笠取れば。「ホ、櫻丸が

女房八重か。早かつた。外の嫁御も揃てくるか。マアく

上つて抱も解きや。アイくまだ皆様はお出ないか。遅かると

氣がせいて。淀堤から三十石の飛乗。船の足の早いので。草臥

もせず。早ふ來たが仕合せでござんする。「ヤコレ四郎九殿。お

客さうな。最う往にましよ。エ、是四郎九とは。物覺がない十

作。白太夫早忘りやつたかいの。イヤ忘ればせぬわいの。餅の

祝ひとは格別。名酒呑まねば何時迄も四郎九郎。ハレヤレ盛た

酒を飲ぬとは。但しはまだ呑足らぬか。エ、ぬけくと嘘いふ

「じやてふ」 はじやといふて、

「御所の牛飼」 三つ子を

牛飼に用ひらる事聞及ばされど、三つ子は天子のまもりなどいへば、ありしやもしらず、

「東童」 は東堅又東福な

ど書く、公事根元女叙位の條に「中にも東童といふは内侍所の被官にあるものにて、行幸の時姫松とて、なかしき馬に乗りて供奉する、

これが事なり、これは三子を用ひらるゝにや、三子は天子のまもりにてあるよし、由緒もはべる故とかや云々」と見ゆ、

「櫻丸の女房に八重、松王の女房に千代、梅王の女房に春」 いづれもつくり合せたる名なり、面白し、

んに八重様早かつた。ござんする道なれば。春が所へ誘ふても下さんしよかと。待た程が遅なはつて。心せきな道すがら。干代様に行合て。連立てくる道轉業。今日の祝ひの浸にと。薺蒿蒲公英二人の仕事。「夫れはよふ氣が注た。春様誘ふ約束も。日脚の長たに氣ぜきして。寄る事も忘れたに。お千代様とはよいお出合。サイナお春様に逢たはわしが仕合せ。賑やかな道連、夫れはそれちやが親父様。料理の拵へ出来て有かえ。イヤ出来てない。和御女達に爲す合點。こてくともむつかしい事は入らぬ。今朝搗た餅で雑煮仕や。上置はしれた昆布。隙の入らぬ様に茹て置た。大根も芋もそこに有。勝手は知まい。ヤアゑいくと立上れば。イヤ申し今日の祝ひはお前が目當。料理方の出来る迄。何にも構はず一寢入なされませ。勝手しらねど三人寄て。何も角も取出す。「左様ちやて、立た次手。棚な物下してやろ。

「抱へ」は端折り、女の前

にはさみこむばをいふか、

「三十石」は伏見の京橋

より、大阪八軒屋の間を往復せし河船、もと船の稱なりといふ、

「名酒」は改名披露の祝

ひ酒、俚言集覽に「名を更めたる時、其當座に舊名を呼ぶものあり、名酒を飲せざる故ぞと戯むるゝなり」と見ゆ

「酒しほ」は物を煮るに

味をつけろ爲め、少し酒をさすをいふ、これより出でたる語なるべし、

「二度の祝ひ」は七十の

賀と名酒、

「さめごまか」は物事に

こまなくしきをいふ、

「手目」はしかたなどの

意、
「聞きも及ばぬ茶筌酒」

コレくは見や。祖父の代から傳はつた根來碗ぢや。折敷も拾

枚。おらが息災なもこの碗折敷。堅地な迎かんまへて。手荒ふ當

るな嫁女達。これマア悴共はなぜ遅い。来る迄に一軒と。體を横

に差枕。堅地作りの親仁也。「コレ皆様。何ぼう彼の様におつし

やつても。雜煮計では置れぬ。飯も焚さなるまいし。何はせい

でも鯉鱈。道草の薺蕎お汁によから。八重様千代様頼ます。此

春は飯仕かけふと。手々に組板摺粉盆。米炊桶にはかり込み。

水いらずの相嫁同士。菜刀取て切刻み。ちよきくくと手品

能く。味噌摺る音も賑はし。白太夫目を覺し。「こりや悴共は

まだ來ぬか。正月から知れて有るおらが祝ひ日。油斷せう筈は

ないが。ア、此中誰やら。チ、それく。今いんだ十作が咄し

には。時平殿の車先で。三人の子供が大喧嘩。聞てかと知らし

てくれた。喧嘩の様子鼻達はしつて居よ。車先での事と有れば。

著者も聞及ばず、
「枸杞」は灌木にして、
漢種を移せしものなりといふ、高さ六七尺、葉大くして五瓣の花を開き、圓き實を結ぶ、其味甘し、垣根などにある木にして、芽を摘みしたしとなす、
「てんかう」は戯れ、いたづらなどの意、癩癩より出でたりといふ説などいふ、
「我御女」の我は親しみ御は敬ひていふ語、
「棚なもの」は棚のもののをなといふは、西國人に多し、
「根來枕」は紀伊國那賀郡の西北、葛城山脈中の山村なる、根來より出す朱塗の枕、なほ別記を見よ、
「折敷」は膳のこと、
田舎などには、先祖代々の

時平殿に奉公する松王が女房。爰へ来て様子を言やと。名ざしに合たは千代が迷惑。お祝ひ事のすむ迄は。お前の耳へ入れぬがよいと。三人ながら其心。いらぬこと曉舌られて。隠されねば申ます。梅王様櫻丸様。二人の相手にこちの人。日頃の短氣言ひ上つて。兄弟喧嘩。したてが氣づかひなされますな。三人ながら怪我もなく。其場は夫で濟だれ共。もちやくちや云ふて居られます。春様八重様。お前方もさうである。氣の毒な男の不機嫌。成程。千代様のいはんす通り。今日の祝ひを言ひ立て。兄弟御の中直し。親御のお詞かゝらいではと。男思ひの壁訴訟。「エ、和御寮達に問ふたらば。知れふと思ふた喧嘩の筋。知て居ても言はぬか。同じ胤腹。一時に生れた忤でも。心は別々。よふ似た顔を仔といへど。夫もそれにも極まらぬ。女夫子も有り。又顔の似ぬ子も有る。マア大概顔が似れば心もよふ似

古風なる器具を傳ふるもの多し、
 「かんまへて」は構へての音便なるべし、必ずの意「體を横にさし枕」とかけ「堅地作り」とつゞけたり、根來枕の如き頑丈老爺、「焚ざなるまい」は焚にやなるまい、臺詞の語、「水入らず」は中のよきをいふ、俚言集覽に「これは親しき者の中に、疏きものゝ間雜するを、油に水の交りたる如しといふ、それにうち反して、親しき者ばかりの集會をかくいふ」と見ゆ、
 「柴刀」は庖丁刀のこと「時平公の車先で」車曳の段を見よ、
 「壁訴訟」は獨言になげき訴ふること、毛吹草に「きりくす秋を告ぐるや壁訴

て。兄弟の中も能い物ぢや。ガおらが忤共。誰が見ても一作とは思はぬ、生ぬるい櫻丸が顔付。理屈めいた梅王が人相。見るから如何やら。根性の悪さうな松王が面がまへ。ヤ千代が傍で麗相いふた。氣にかけてたもんな。ヤア怪我がなふて嬉しうおりやる。怪我の次手に。孫めは健な。連て來て顔見せいで。ヤア兎斯ういふ中、もう七つぢや。おれが生れたは申の刻限。料理も大かた出來たである。「嫁達膳を出ぬかい。アイくくく刻限の過るまで。連合衆はなぜ見えぬ。千代様。八重様。道迄往て見て來まいか。爰で待より三人ながら。ござんせ。往かう。ヤア嗅達何云ぞい。子供共は來て居るわい。アノ來てぢやとはどこに。エ、鈍な嫁共。其處に居るを得しらぬかい。コレ三本のあの木が子供等。梅王松王櫻丸。顔は残らず揃ふて有る。勿體ない管相承様。くゝめるようにいはしやれました。生れ日

訟

「女夫子」

は二子三つ子

に、男女まじりて生るゝな

いふ、

「一作り」

の語面白し

さすがは百姓、

「親の身としてほめられぬ
我子の批評」 實に子な

見ること親に如かずと謂つ

べし、櫻丸の優しく美しき

心立、梅王が、一の汚もゆ

るさめ潔白の氣性、松王が

づゝしりとして動かぬ性根

各名詮自稱の性質によりて

活動し、それにふさはしき

名の女房を配偶したる、作

者の趣向頗る妙、なほ後の

陰膳の女房が詞を見合すべ

し、

「七つ」

は申の刻、今の

午後四時、

「陰の膳」

は陰膳とて、

旅行又は不在の者に供ふる

の刻限が違や悪い。祝儀には蔭の膳も据るならひ。サア／＼早

ふと白太夫が。いふに猶豫も成がたく。俄に盛やら箸打やら。

椀の向ふの小皿に鱈。先一番に親父様。是でお居りなされませ

と。給仔は元よりならはねど。見馴聞馴舉動ひ。八重が配膳御

所めけり。「イヤおれも彼處へいこ。イヤ土間では冷が上ります。

やつぱり爰でと押供へ。是から面々夫の給仕。膳を捧げて庭に

下り。此梅の木が梅王殿。枝ぶりすんと日頃の氣質。八重が連

添男振、木ぶりも吉野の櫻丸。是は千代迄添遂る。女夫が中の

若縁。色も艶も勢ひよい。松王殿で子達も揃ふ。サア親父様。

目出たふお箸なされませ。「ホゝ。なされう共く。親甲斐に座

が高い。子供共へドレ挨拶。ハテもうそれには及びませぬ。お

加減のさめぬ内。「イヤ／＼お春そでおぢやらぬ。親でも子でも

極まつた辭宜作法と。庭に下りるも健やかに。樹の前に畏り。

膳部、かくすれば其人飢ゑ
すといふ、

「こまめ」 は蟬を風乾に

したるもの、御健全の義に
寄せて、賀儀の食物に用ふ、

煮又は炙りて食す、肥料に
もなすゆゑ、田作ともい
ふ、

「配膳」 は給仕のこと、

八重は御所に勤めし女なり
「木ぶりも吉野」とかけ

たり、此女房が配膳の詞、
いづれも夫の性質を顯し得

て、頗る味ひあり「女夫が
中の若緑」松王のみ子あり

「辭宜」 は禮儀挨拶など
の意、

「折角」 はわざ／＼、委
しくは前に解す、

「白太夫」 が樹に對ひて
の挨拶、頗る面白し、

「片いさせぬやうに」 は偏
頗なく一杯づゝ給仕のゆき

イヤ是子供衆。何にも御座らず共。ようまいつて下されい。親

が折角おりての辭宜。辭宜返しが仕たふても。動かれぬは知て

有る。爰でく。ハ、ハ、ハ、鼻達。餅を替やいのと。尻もちついて

悦び笑ひ。我膳に押直り。箸を取より。「ムウ／＼扱鹽梅ぢや。

味いはく。三人の嫁女達。給仕も片いさせぬ様に。三杯は喰

合點で。おちやらしまするぢやなんよる。「ハ、ハ、ハ。こりや新

しい三方。土盃。誰が持て來ましたぞ。イヤ夫は八重様の。ハ

テ氣が付て忝い。春も何ぞくれるかい。眞に忘れておりました

と。扇三本袖土産。中の繪は梅。松。櫻。お子達の數を祝ふて

三本ながら末廣がり。目出とふ祝ふて上げまする。「こりやめで

たい忝い。中の繪も咄して知れた。明て見るに及ばぬ。此儘く。

コレ戴きます／＼と。機嫌に千代が袂から。是は切の有合で。

私が縫た手づゝ頭巾。頭に合ずば縫直さう。お召なされて下さ

渡るやうにの意なるべし、
「おじやらし、まするじやな
ぶよゑ」は當時の流行歌
なるべし「なんよゑ」は拍
子、

「三方」の事は前篇に解
す、

「八重が土産に出す扇」

何ぞ知らん夫の運命を占ふ
御圖とならんとは「中の繪
も咄で知れた」とあけて見
ぬは其伏線、「弱」の事を末
廣といふ、

「手づつ」は不細工の意

(手づつとは手業の不調法
なるをいふ、口不調法なる
な口手づつといへること、
宇治拾遺に見ゆ)

「おくりやり物」はおく
れなすつたもの、

「私等はまそつと待つて」

これ女子の禮、
「氏神」は氏の神にて、藤

んせ。「チ、どれもく不足もない。心付けなおくりやり物。サ
ア盃も濟だは。おれが膳から上てたも。子供等が膳は盛た儘。
冷たで有ふ盛直して。コレ鼻達。二人前づゝ喰てたもや。」イエ
く私等ばまそつと待つて。主達が見えてから。打並んで祝ひま
しよ。そんなら夫れよ。おれは村の氏神様へ參つて來ませう。
そんならお參りなされませ。チ、く往きましよ。拵へて置た
十二銅。そこに有る取てたも。三本の此扇。末廣ふに子供の
生先。氏神へ頼んだり見せたりせう。ヤア八重はまだ參るまい。
次手ながら連立ふ。サアく此方へと機嫌よふ。表をさして出
て行く。「コレちよ様。年寄らしやつても物覚えがよい事。こな
様や。此春は。氏神様知つて居る。八重様は今が始め。言はし
やんすりや其通り。物覚えのよい親御に違ひ。物忘れする子供
達。松王殿何故遅いぞ。此方の良人もなぜ見えぬ。但しは來ぬ

原氏に於ける春日の如し、
今一般に産土神を氏神と稱
するは誤れり、別記を見よ
「十二銅」は神への賽錢、
銅錢十二を以てするよりの
稱、

「八重はまだ詣るまい」

と、夫の運命を占ふ靈籤を
取りにつれ立たせたる、作
者の用意周到、

「今日見いでよいものか」

互に夫の運きを氣遣ふ、こ
れ親御の爲のみならず、こ
れをほに兄弟中を直さん
爲めなり、かく兄弟のすれ
ふくなるにかゝはらず、相
嫁の睦じさ、うらやましき
までなり、且夫思ひのいち
らしき心根、よく寫せり、
これ至極の難事にして、若
全々夫につかば、相嫁の中
も亦すれふならざるべか
らず、

氣か。今日見えて好い物かいな。それこそ其處へ松王殿。エ
、是女房を立所に立たして。刻限過たをしらずかい。ヤアベリ
くとかしましい。時平様の御用有て。夫れ仕廻ねば動かれぬ。
先へ參つて其譯言へと。吩咐たを忘れたか。梅王も櫻丸も。
まだ來ぬさうな。親仁殿も内にござらぬ。サア其親父様は八重
様を同道で。も些と先に氏神參り。兄弟衆は未だ見えぬ。ソレ
見いな。遅いといふおれは主持。梅王も。櫻丸も。主なしの扶
持放され。用もない和郎達が。遅いのが眞のおそいの。お春殿
そぢやないかと。詞の端にも残る意趣。梅王も日脚はたける。
喘いて來かゝり突蒐り。松王には顔ふり背け。「お千代殿今日は
太儀。コリヤ女共。親人と櫻丸。八重も爰にはなせ居やらぬ。
イヤ今も松王殿のお尋。櫻丸様はまだ見えぬ。お二人は宮參り
ム、櫻丸は何うして來ぬな。ア待兼ねる者は來いで。胸のわるい

見とむない。頬がまへと。梅王に當こすられ。松王丸逸徹短慮
あたふの悪いねすり言。言ひ分有らば直に言やれさ。何のわれ
に遠慮せう。わが頬がまへを見る度々。ゲイぐと虫唾が出る。
ハ、ハ、ハレ申したり腹の皮。此松王は生れ付て涙脆い。櫻丸
や其方が様に。扶持放されの瘦願。肚饑からうと思ふて遣が。
兄弟のよしみだけ。ホ、扶持放されと笑ふやつが。喰ふ扶持が
ろくな扶持か。鐵丸を食すといへ共。心穢れたる人の物を請ず
とは。八幡大菩薩の御託宣。心汚れた時平が扶持。有難ふ思ふ
はな。人でなしの猫畜生。ヤア畜生とは舌長な梅王。今一言い
ふて見よ。ホ、望みなら安い事。畜生くどふ畜生。最う赦さ
れぬと松王丸。刀の柄に手をかくれば。梅王も反打かへし。詰
寄り詰よる二人の女房。「是は。マアおとましい。氣が違ふたか
松王殿と。千代が夫を抱とむれば。七十の賀を祝ひに來て。親

し、畜生といひきるなど、
凜乎として汚れぬ高潔の氣
性、寫し得て妙、

「あたふの悪いねすり言」

は人聞の悪いい當こすりといふこと、

「腹の皮」 は腹の皮がよ

れるの暑、なかしさに堪へられぬをいふ、冷笑の意、

「瘦頤」 の語、前後の句

に應じて頗るよし、瘦浪人といふに同じ、

「八幡大菩薩」 は八幡大

神（應神天皇）の菩薩號、桓武天皇の御時、勝尾寺の僧

開成に託宣ありて、奉らるゝ由いへど、護國靈驗威身

大自在菩薩と託宣あらせられしといふ、垂跡の説はい

と古き事なり（欽明天皇三十一年といへば、佛法渡來

以後纔に十八年なり、頗るあやし）

父様に逢もせず。反打てどうさしやる。祝ひ日に抜てよいか。

こちの人梅王殿と。刀の柄にしがみ付。女房春を取て突退。「七

十の賀でも祝ひ日でも。堪忍袋のやぶれかぶれ。留立して怪我

するな。コリヤ松王後れたな。女房が留るを幸に。頼げたに似

ぬ腕なしめ。ナ、留らるゝを幸ひとは。我心に引くらべて。松

王には慮外の雑言。身が女房が留たより。其方が女房が。親に

もまだとの一言。肝先へ屹と當り。怵えくくたがもう堪ら

ぬ。眞劔の勝負は親人に逢ての後。夫迄の腹癒に。砂かぶらせ

ねば堪忍ならぬ。千代に是を預けると。兩腰抜てほうり出し。

裾引褰げて身拵へ。「ホ、畜生めが。こりやよい了簡。櫻丸が來

る迄は。松王が命松王に預けると。同じく兩腰ほうり捨。刃物

を渡せば血はあやさぬ。女房共邪魔するなど。つゝと寄て。椽

より下へ踏落せば。早速の松王落さまに。諸足かけは梅王丸。

「鐵丸を食すといへども云々」 運歩色葉集に「三社託宣、八幡大菩薩、雖爲食鐵丸不レ受心汚人之物、雖爲坐銅爛、不レ到心穢人之處」と見ゆ、これ菩薩戒經「復作此願、寧以此口、吞熱鐵丸及大洲猛火、經百千劫、終不レ以破戒之口、食於信心檀越百味飲食」より出でたるなり、

「託宣」 は神のおつけ
「舌長」 は無禮の言をいふ
(支那にては多言、俗には參言の意に用ふれど、こゝは出過ぎたる無禮の言をいふ)

「反打かへし」 は刀を上反にして抜きかけるかまへ
「おとましい」 はうとま
しいの轉、いみじろふべき事をいふ、

眞逆様に落かさなり。「搦み合擲き合。組では放れ離ては。又組
合ひ捻付け引伏。蹴つ踏づ。双方力も同年。血氣盛りの根くら
べ。千代と春とは二人の兩腰。取られもせうかと氣づかい半分
傍へも寄れず。ハア／＼と。心をあせり氣をもみ上。」どち
らが勝も負もせず。擲き合たが二人の存分。梅王殿もうよいわ
いな。松王殿もう置しやんせ。やめて／＼といふをも聞ず。勝
負つかいでむだ働き。投てくれんと松王丸。嵩にかゝつて押す
力。ひるまね梅王つゝかくる。肩先ひねつてがつくりさせ。横
に抱える松の木腕。劣ぬ肘骨梅の木腕。絡みもちつて押合ふ力。
双方一度にこけかゝり。憑るゝ拍手櫻の立木。土際四五寸残る
木の。上はほつきりぐはつきりと。折れたに驚く相嫁同士。二
人が勝負も破角力。俱に呆れて手を打拂ひ。うろつく中へ早下
向。「アレ親父様のお歸りぢや。白太夫様のといふ聲に。二人は

「頬けたに似腕なし」は口に似弱虫、
 「親人に逢ての後」と眞
 銀勝負をさせぬ趣向頗る妙
 「あやさぬ」は流さぬ、
 滴さぬ、
 「つゝと寄つて云々」先
 づ梅王より手を出さしめ、
 松王が受身に諸足をかけ、
 落重りての組打、いづれも
 其氣性をあらはす、
 「力も同年」とかけたり
 「取られもせうかと」刀
 を預かる女房の心配思ひや
 らる、
 「嵩にかゝつて」松王松
 の如く大にして強し「つま
 かくる」梅王梅に似て直に
 して鋭し、
 「松の木腕」梅の木かひな
 相應ず、
 「土際四五寸残る木の云々」
 こゝに櫻を折らしめ、後に

肩入れ裾おろし。腰刀指間も有らず戻られし。年は寄つても怖
 いは親。上へも上らず犬蹲踞。今日の御祝儀お目出たいと。祝
 儀は述ても赤面し。塵をひねらぬ計りなり。親はほやく機嫌
 顔。「噂達が先へ来て。七十の賀を祝ふてくれたで。今日の祝ひ
 はさりと仕廻た。しれてある刻限。遅いは何ぞ障りが有て。
 来ぬに極めた梅王松王。能うこそく来てくれた。コレ二嫁
 女。煮くちたで有ふが。雑煮祝はしたもつたかと。折れた櫻
 は見ながらも。誰所爲ぞと咎めもせず。呵る所を呵らぬ親。一物
 有りとしられたり。梅王丸懷中より。用意の一通取出し。「祝儀
 済んで候へば。私の所存の願ひ。是に書付け候と。親の前に指出
 せば。松王も又一通。身の上の願ひ是に有りと。同じ所へ直せ
 しは。言ひ合せたるごとく也。白太夫打笑ひ。「心安いは親子兄
 弟夫婦。斯う並んだ中。願ひ有らば口では言はいで。きつとし

櫻丸を切腹せしむるは、昔公紅梅殿の櫻、御詠無りしを耻ぢて、枯れたりといへるより作れるなり、此段及飛梅の段の總解を見よ、「二人が勝負も割相撲」とかけたり、割相撲は勝負なしの相撲、懷子に「相撲場にわれや見ゆらん河津がけ」「年は寄つても怖い親」とは古今一様の人情、眉を入れ居すまひを直し、知らぬ顔に祝儀を述べても、心に耻入りて「塵をひねらぬばかりなり」とはよく寫したり、「ようこそ来てくれた」と悦をいふ親の詞、櫻丸に及ばぬは、隠しあること知られたり、「折れた櫻を見ながら」告めぬは氏神の靈藏にて、櫻丸の運命も、これまでと

た此書付。さらばおらもきつとして。代官所の格で捌こと。願ひ書手に取上。つぶく讀も口の中。願ひは何やら聞えねど。春と千代とは。夫の心知て居る筈。跡先を知らねば。案じる八重一人。三人の兄弟鬪諍。親父様お頼み申し。今日中直しと言合した千代様春様。こりや何ぞい。何を言ふてもこちの人。櫻丸殿ござらぬ故。心當が皆違ふた。道で眩暈が發つたかと。見えぬ男を案じるやら。二人の願ひも氣にかゝり。小首傾げ案じ居る。親父は二通讀仕廻。「コリヤ梅王。其方が願ひに。旅へ立つ隙くれとは。ム、推量するに外でも有まい。菅相丞のござる島か。成程く。結構な御殿に引かへ。埴生の小屋の御住居。御用聞く人なければ。梅王下つて御奉公仕らん。身のお暇と申しける。ム、恩を知らねば。人面獸心といふてな。顔は人でも心は畜生。島へ參つて御奉公がしたいとは。まんざら恩を辨へ

あきらめたるゆゑなり、後に明かりなり、

「代官所」は昔地方において、公事訴訟など取扱ひし役所、委しくは前篇に解せり、

「親父様お頼み申し」相嫁の心中極めていぢらし、「埴生の小屋」は土臺もしかとせぬ、小屋がけをいふ、埴は黄色のれば土、「恩を知らぬは人面獸心」暗に松王を罵る、漢書に「夷狄之人、被髮左衽、人面獸心」

「菅秀才の御事は」松王を憚りていはず、菅公流罪となり、家閉門を命ぜられし時、梅王源藏としめし合せ、梅王盗みて高堀の上より、外なる源藏に渡し、かくまはしめたるなれば、其消息をよく知れり、

ぬ。畜生氣は離れた心。コリヤやい。御臺様や若君様。お變りも遊ばされず。御座る所も知れた上。旅立の願ひぢやな。イヤ御臺様は。其以來お目にもかゝらず。御座所も存じませぬ。併し女義の御事なれば。若君様とは又格別。菅秀才の御事は慥にと。いはんとせしが。松王を尻目につけ。「慥に所は存ぜねども。息災に御座有る噂。ヤイ馬鹿者。大切な菅秀才。御息災なを聞た計。お目にもかゝらず。有家も知らず。夫で儕忠義が濟むか。女義の身と吐かしおる。御臺様は主ぢやないか。コリヤやい。尤御不自由な配所のお住居。お傍へ参つて御用を聞く。膝行役の奉公は。此白太夫がよい役ぢやわい。血氣盛り奉公盛り。菅相丞の所縁と有らば。根掘葉掘絶やさん。油鵜の目鷹の目。油断ならぬ讒者の所爲。すはといふ時身を惜まず。御用に立つ所存はなふて。膝行役を願ふは命が惜いか。敵が怖い。旅立の

「イヤ馬鹿者」 晴天の霹

靨、
「鵝の目鷹の目」 は目を

鋭くして捜し索むること、
もと硫黄の品目より出でた
る語なりと、世事百談に見
なれど、それにも及ばざ
るべし、

「願書を顔へ」 梅王が忠

義を見抜きて叱付け、志を
勵す處、頗るよし、

松王が箸にも棒にもかゝら
ぬ性根を知りて「神武天皇
様以來」珍らしい願じや、
「不孝といはば譬のいなや
つ」と聞届ける勘當「此松
王が主人へ忠義推量あつ
て」とづうしき眞面目
の應答に「口は調法な物じ
や」「臍ぐくれるわい」「蟹忠
義といふわい」と冷笑
半分にしなめ置いて「人外
め早歸れ」と叩き出す處、

願ひ叶はぬく。取上ぬと。願書顔へ打付て。はつたと睨む老

の腹立。道理至極に梅王夫婦。誤り入たる風情なり。「ヤイ松王

そちが此願ひを見れば。勘當を請たいとな。ハアハ、ハ、神武

天皇様以來。珍らしい願ひぢやな。エ、不孝といはゞ譬のない

やつ餘り珍しい願ひなれば。聞届けてくれるぞと。親の了簡。

ハ、ハア忝しと。悦ぶ松王勇み立。親子兄弟の縁を切る。所存

も問はず赦されしは。此松王が主人へ忠義。推量有ての事なる

べし。「ハ、ハ、如何様。口は調法な物ぢやな。主人への道立。

臍がくねるはい。道も道に寄てな。横に取て行道を。蟹忠義と

云わいはい。甲に似せて穴を堀ると。勘當請れば兄弟の縁も離

れ。時平殿へ敵對せば。切ても捨ん所存よな。尤善惡差別なく。

主人へ義は立にもせい。親の心に背くをな。天道に背くといふ

はい。望叶へてとらする上は。人外め早歸れ。隙取らば親子の

最も妙一臍がくれる」は臍がまわつゝなごしさに堪られぬこと、臍がよれるに同じし。
 「顔を見る目もあかれぬ涙」とかけたり、千代の心

「八重様あとでお話を」と、頼む女心頗るしほらし
 「仕廻」は始末又仕方の意
 「立そに待つ」は立々して待つをいふ、

別れ。竹帚くらはさうと。筋骨立て怒聲。松王は思ひの儘。女房來いと引立行く。千代は道に親兄弟。名残も惜き相嫁の顔を見る目もあかれぬ涙。袂絞つて出て行く。「ハレヤレ嬉しや。面倒なやつ片付た。ヤイそこな馬鹿者。御臺若君の御行衛。尋にいかぬか。うせぬかと。是も手づよふ佞め付られ。そんなら島へは。サア行所へはおれが行わい。出て行くを。怯がるおはる。八重様跡で能いやうに。お詫言をと云ひ捨て。夫婦は門へ白太夫は。唾を呑込で奥へ行く。「兄弟夫婦に引わかれ。取残されし八重が身の。仕廻もつかぬ物思ひ。門へ立そに待夫。思ひがけなき納戸口。刀片手に莞爾と笑ひ。女房共嘸待つらんと。聲に恟り走り寄。ヤアいつの間にやら。來た共云ず。案じる女房を思はぬ仕方。兄弟衆の事に付て。親父様のお腹立。其場へは出もせいで。「マア何で此方様は納戸の内に。エ、これ。ナア

「食出し鐔」は僅に食出

せしまでの鐔にて、短刀に限る、

「老の足弱車」といひて

「舍人櫻」とつづけたる最も妙、足弱車は進みのあしき車、俗に牛車の牛の足の弱

きないふ、以て老の進かぬる足にたといふ、舍人は牛

車を掌る者、縁の語味ふべし、

「何で死ぬのじや」思ひ

がけなき夫の切腹、八重の

驚き想ふべし、

「さざやませぬ」は止

め妨げの意、

「所存残らしいひ聞さん」

これより懇々として女房を説き諭す所、かれが盛しく

美しき性質を寫し盡せり

「烏帽子子」は男子元服

の時、身分尊き人を頼みて

譯を聞してくと。聞たがるこそ道理なれ。暫く有て白太夫。

食み出し鐔の小脇指。三方に乗せしほくと。出るも老の足弱

車。舍人櫻が前に置。用意能くばとくと。いふに女房又恟

り。「ヤアこりや何ちや親父様。櫻丸殿どうぞいなア。何で死の

ちや腹切るのちや切らねばならぬ譯ならば。未練な根性さぎや

仕ませぬ。こなさんが云はれずば親父様の只一言。案じる胸を

休めてたべ。お慈悲くと手を合せ。泣より外の事ぞなき。「ヤ

ア親人に何御苦勞。是迄馴染む夫婦の中。所存残さず云聞さん

「某が主人と申すも。畏れ多き齋世の君様。百姓の忤なれ共。菅

相丞の御不便を加へられ。親人へは御扶持方。御愛樹の松梅櫻

兄弟が名に象り。松王梅王櫻丸。憚り有や冥加なや。烏帽子子

に成し下され。御恩は上なき築地の勤。三人の其中に。櫻丸が

身の幸。人間の胤ならぬ竹の園生の御所奉公。下々の下々たる

烏帽子親とす、この烏帽子親に對して、烏帽子々といふなり、

「築地の勤め」 は堂上方

(公卿)の御奉公といふ意、築地は堂上方の土塀をいふ

「人間の種ならぬ竹の園生」

徒然草に「竹の園生の葉末まで、人間の種ならぬぞや

んことなき」とあり、人間の種ならぬは皇室の御血統は

神の御末なるゆゑにいふ竹の園生とは皇子のこと別記

を見よ、

「此八重も生ては居れぬ」

夫と共に宮姫君の中を取持ちしなり、

「禮を申せ」 といふ櫻丸

「それが何の禮所」といふ八重いづれも尤も、助けたさに思ひ亂れ「よい智恵出して」と親御にすがる狀、ま

たなくあはれなり、

牛飼舎人。勿躰なくも身近く召れ。菅相丞の姫君と。わりなき中

の御文使。仕課せたが仇と成て。讒者の舌に御身の浮名。終に

は謀叛と云立られ。菅原の御家没落。是非もなき次第なれば。

宮姫君の御安堵を見届け。義心を顯す我が生害。今朝早々爰迄

來て。右の段々。生て居られぬ最期の願ひ。聞届けて切腹刀。

親の手づから下されたはい女房。我にかはつてお禮も申し。死

後の幸行頼むぞと。義を立守る夫の詞。女房わつと聲を上。仇

成る戀路のお媒介。親王様の御惡名。相承様の流され給ふ。其

言譯に切る腹なら。此八重も生ては居られぬ。私は残つて幸行

せいと。胸欲にもよふいはれた。夫よりはまだむこい。腹切る禮

を申せとは。それが何の禮所。無理な事いふ手間で。いつしよ

に死ねとコレ申し。女房の願ひ立てたべ。親父様の思案はない

か。コレ俯伏いて計りござらず共。よい智恵出してくださりま

「言譯ではないけれど」と
言譯の爲め仔細を語る白太
夫、一寸延ばしに命をかば
ひ、神の御心に任せんと氏
神へ出かけ「助けたいかー
ばいで、御圖を取直した」と
は、親子の情着海より深き
處、おつかりして家にかへ
れば「折れた櫻」こにあき
らめて腹切刀渡すとは、何
たる悲惨ぞ、句々皆血の涙、
「加護」は御心の意に見
てよし
「御圖」は神佛の冥慮に
よりに吉凶を占ふ法、委し
くは後にいふべし、

せ。夫の命生死は。親父様の御詞次第。御前は悲しうござりま
せぬか。親の手づから此三方。腹切刀は何事ぞと。恨みつ頼み
つ身を投伏。悶えこがるゝ有様は。物ぐるはしき風情也。白太
夫顔ふり上。子に死ねといふ腹切刀。むごい親と思ふ。言ひ譯
ではなけれどな。「此曉は我身の悦び。いつもより早く起。門の
戸明れば櫻丸。ヤレ早ふ來てくれた。徒歩ならば夜通し。但し
は船か。サアまあ此方へと呼入れて。様子を聞けば右の次第。
白太夫づれが忤には。驚き入た健氣者。とゞめても聞入れず。
今日の祝義仕廻迄。女房が來ても逢しはせぬぞ。おれが出いと
いふ迄は。納戸の内に隠れて居いと。一寸延しに命をかばひ。
助けてよいか悪いかは。おらが了簡に及ばず。神明の加護に任
さんと。「最前祝義にくれた扇三本。幸ひ繪には梅。松。櫻。子
供の行末祈る顔で。氏神の祠へ直し置。信を取て御圖の立願。

「上らせたまへ」
は神の
感應をいふ

檀木を取上げて「此刀で介錯すれば」と唱ふる念佛、
せめて未來は助けたき親の慈悲心、其ありむたさ何ともいはれず、せめ念佛にこらへても、堪へかれたる恩

櫻丸が命乞。中の繪は上から見えぬ。三本の此扇。初手に櫻をと
らしてたべ。エ、上らせたまへと。再拜祈念。取上た扇ひらけ
ば梅の花。南無三是は叶はぬ告か。神の心を疑ふ御鬨の。取直
しせぬ物なれ共。助けたいが一ばいで。取直す次の扇。今度も
違ふて又た松の繪。頼みも力も落果て。下向すりや折れた櫻。
定業と諦めて。腹切刀渡す親。思ひ切ておりや泣ぬ。そなたも
泣きやんな。ヤ、ヤ、ヤ、ヤ。アレ聞たか女房共。櫻丸が命惜ま
れて。老人の心づかひ。御恩も送らず先立つ不幸。御赦されて
下されい。下郎ながら恥を知り。義の爲に相果ると。三方取て
載くにぞ。もうコレ今が別れかと。泣も泣れぬ夫の覺悟。白太
夫目をしばたゝき。「潔い倅が切腹。介錯は親がする。其刀コレ
見やれと。懷から取出すは。願ひ込たる鉦撞木。コレ此刀で介
錯すれば。未來永劫迷はぬ功力。利劍即是彌陀號と。撞木を取

愛の情、鉦も柏千も亂るゝ
一刹那の苦悶、身を八つ裂
にせらるゝよりつらし、後
へまはり介錯と「打つや此
世の別れの念佛」とは、悲
風慘憺讀むに堪へず、これ
即ち利劔即是彌陀號、
「未來永劫」は未來いつ
までも、佛典の語、
「利劔即是彌陀號」は彌
陀の名號は利劔の如く、こ
れを唱ふれば、一切の罪惡
悉く滅すといふ意、般舟讀
に「利劔即是彌陀號、一聲
稱念罪皆除」檀木の利劔最
も然るべし、
「弓手」は左の手、前に
いへり、
「喉のくさり」は喉實な
るべし、
「親人の鉦鼓に合せ」女
夫の者が忍びの念佛、出る
に出られず助くるに助けら

て打ち鳴す。鉦もしどろに。南無阿彌陀く。南無阿彌陀く
く。南無阿彌陀く。念佛の聲と諸共に。襟押寛げ九
寸五分。弓手の脇へ突立れば。八重が泣聲打鉦も。拍子亂れて。
南無阿彌陀く。右の肋へ引廻し。憚りながら御
介錯。ヲ、介錯と後ろへ廻り。撞木振り上。「南無阿彌陀佛と。
打や此世の別れの念佛。九寸五分取直し。喉のくさを刎切て。
かつばと伏て息絶たり。八重が覺悟も此場をさらず。夫の血刀
取上る。枳穀のかげより梅王夫婦。走り寄つてこりや何事と。
九寸五分もぎとり捨て。親の前に畏まり。「先き程歸れと有し時。
表へは出たれど。櫻丸がこぬ不思議と。相承様の御秘藏有し。
櫻の折たを詮議もなされぬ。彼是不審に存ずるから。裏より忍
び立戻り。始終の様子は承はつた。ヘエ是非に及ばぬあの樹と
共に。枯し命の櫻丸。兄弟の最期餘所に見て。親人の鉦鼓に合

れぬ、骨肉の情如何んぞや
 「是非も涙に云々」「撞木と
 かばる笠と杖」あはれにか
 なし、子の死を跡に老の身
 が、主君の供に出立つ處、
 既に千本櫻に於て涙を灑
 しむ、(大阪にて出せる淨瑠
 瑠注釋)更にこゝに再びす
 出雲何ぞ泣かしむる事の多
 きや、
 「現世の旅立」未來へ旅立」
 相對す「頼む詞の置土産」
 「冥途の土産に只念佛」相
 應す「南無阿彌陀笠打かぶ
 り」とかけ「西へ行く足十萬
 億土」とつづけたる文の妙
 何ともいはず、老の旅立
 つ筑紫は西方、十萬億土は
 西方淨土、なきから送る親送る、櫻の丸野邊送りと白太夫の旅送り、
 「末世にそれと白太夫」とかけたり、
 「佐太の社」の事は総解を見よ、

せ。女夫の者が忍びの念佛。可惜若者殺せしと。悔む夫婦も聞
 く親も。八重も死なれぬ身の繰言。是非も涙に南無阿彌陀佛と。
 鉦打納め。撞木とかはる杖と笠。白太夫は片時も早く。菅相丞
 の御跡慕ひ。島へ赴く現世の旅立。櫻丸が魂魄は。未來へ旅立。
 此亡骸梅王夫婦を頼むぞと。八重が事迄つとく。頼む詞の
 置土産。冥途のみやげに只念佛。南無阿彌陀佛。南無
 阿彌陀佛。南無阿彌陀笠打かぶり。西へ行く足。十
 萬億土。亡骸送る親送る。生ての忠義死したる義臣。一樹は枯
 し無常の櫻。残る二樹は松王梅王。三つ子の親が住所。末世に
 夫と白太夫。佐太の社の舊跡も。神の恵みと知れける。

菅原傳授手習鑑 飛梅の段

總解

飛梅の事 此事諸書に見えたるがこゝは源平盛衰記に北野天神は時平大臣の讒訴によつて延喜五年正月五日(年月は妄なり)に安樂寺に遷され給ふ。住なれし故郷の戀しさに常は都の空をぞ御覽じける。比は二月の事なるに日影閑に照しつゝ東風の吹きけるに思し召し出づる御事多かりける中に。

東風吹けば香ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るなと詠じ給ひければ天神の御所高辻東洞院紅梅殿の梅の枝割き折れて雲井遙に飛行きて安樂寺にぞ参りける。櫻も御所にありけるが御歌なかりければ梅櫻とて同じく籬の内に育ち同じく御所に枝をかはして有つるに如何なれば梅は御言葉にかゝり。

我れはよそに思し召さるらんと。怨み奉りて。一夜が中に枯れに
けり。源順が。

梅は飛び櫻はかれぬ菅原やわけてぞたのむ神の誓ひを
かゝる現人神なれども。歸京を赦され給はず云々。

此梅は飛びの歌。順の集に見えざれば。彼れが詠にはあらざるべし。
これを第三句よりかへて。

梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に何とて松のつれなかるらん
とし。菅公の歌とせり。しかして松のつれなかるらん」の句。寺子屋
の段に松王が解せる如く「何とて松はつれなからうぞ」との意に
用ふ。これ親兄弟まで無二の悪者と思へる。松王の性根を菅相丞
のみ見知り給へる明識をいへるなるが。さらば「つれなかるべき」
とせざる可からず。作者は「松の」ゝのゝ字にて。かく利かせたる積
ならんも。さは意得られず。出雲にして斯の如し。他の作者が歌學

に乏しき事。推して知るべし。

又十訓抄に

菅家太宰府に思しめし立ちける頃。

東風かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ
と詠み置きて。都を出で、筑紫に移り給ひて後、かの紅梅殿の梅
片枝飛びまゐりて。生ひつきにけり。ある時此梅に向ひて

故郷の花のものいふ世なりせばいかに昔しのことを問はま
し

とながめ給ひければ。この木

先人於故宅。籬廢於舊年。麋鹿猶棲所。無主獨碧天。

と申したるこそ。あさましとも。あはれとも。心もおよばれぬ。

〔東風吹かば〕の歌は大鏡拾遺集などにも見え。都出立の時。梅に向ひ
て詠み給へるにて。筑紫にて梅を思ひての歌などいへるは。俗説

なり。しかして大鏡は。十訓抄に同じけれど。拾遺集は盛衰記の如く。第五句を「春を忘るな」としたり。

又後撰集に。櫻に結びつけ給へる歌とて。

櫻花ぬしを忘れぬものならば吹き來む風にことづてはせよ
攝津名所圖繪には。矢田部郡板屋村の山頭に。菅神。飛松とて。公を
慕ひて都よりこゝまで。飛び來れる由載せたり。何事も神異測る
べからず。

名所圖會に「紅梅殿天王寺(北野宮東門)の前にあり。祭る所菅神愛
し給ふ。飛梅の靈神なり」と見ゆ。此所に勸請せしにて。傍に梅銘の
碑あり。

太宰府 筑前國筑紫郡水城村にありて。往古鎮西の首府たり。今廢
趾を止むるのみ。筑紫紀行に。

太宰府の故址ある所をば。今も御笠の里といふ。此里貞享年中。か

さねて觀世音寺を再興せし時。多く舊府の礎を取用ひたり云々。
觀世音寺の西南にあり。太宰府の跡とて築山といふ所に。今も猶
大なる礎残りとぞ。又都府樓址は。かの築山の北の方にならび
て云々。

菅公此地に配流せられてより。門を閉ぢて餘り他出せられざり
しといふ。公が詩に

一從貶謫就柴荆。萬死競々跼蹐情。都府樓纔看五色。觀音寺只聽
鐘聲。中懷好逐孤雲去。外物相逢滿月迎。此地雖身無撿繫。何爲寸
步出門行。

安樂寺。太宰府天神宮 同國同郡太宰府村にあり。福岡市を去る四
里。太宰府址の東十町許。今官幣社に列す。もと安樂寺の菅廟。又聖
廟と稱せしが。近年寺號を廢して僧徒を去り。専ら太宰府天神宮
と呼ぶ。建久本天神記に。四堂の邊に。菅家の墓所を點定して。こゝ

に葬らんとしけるに。御車忽ちに道中に止りて動かず。依つて其所に納む。今の安樂寺これなり云々。

當社の創建は延喜五年にして。同九年に落成せしとぞ。社前に有名なる飛梅あり。神事多かる中に。陰曆正月七日の夜行はるゝ。鶯うそ換祭りは最も名高し。木にて刻める鶯を取かへ。大なるものに換當つれば。其年運よし。中に黄金の鶯一つありて。これを得たるものは。大吉なりといふ。昔は天神自ら群衆に混りて。授け給ふと信ぜり。徳川の末世。大阪天満宮。江戸龜井戸天神などにも。一時行はれしものにて。去年の悪しき事は。皆うそとなりて。善き事といひかへるといふ意なりと。

天拜山 一に天判山ともいひ。同國筑紫郡二日市村にあり。山さのみ高からずといへども。北方は御笠川の平野なれば。眼界極めて廣し。山上に天満神社ありて。菅公の靈を祭れり。傳説に。公此山に

登りて。冤を天に訴へ給ひしかば。天より天滿自在天神の尊號を下し給へりといふ。其時公の坐せられしといふ盤石は。天拜石とて神社の傍らに残り。又菅公衣懸石といふもあり。我れは見上ぐる此高山より以下は。此事と。怨靈雷になりて。仇を殺し給へりといへる。説より書けるなるべし。雷の事は。菅原傳授の總解を見よ。以上の記事を讀まば。作者が趣向の據所を知るに足らん。

飛梅の段

飛梅の段

「君をおもへば云々」 當時の流行歌なるべし場合にかなひてよし、

「つらき筑紫」 これ心づくしなり、筑紫は今の筑前筑後あたりの古稱なれど、九州を呼ぶにも用う、

「きさらぎ」 は陰暦六月の異名、

「野飼」 は牛をいふ菅公筑紫へ趣かるゝ時も、配所にありても、牛に乗り給へりとして、牛天神といふあり又其社には、必ず石像の牛あり、

「しわらくさいどつてう聲」 しわかれたる突拍子の聲な

いふ、

「惣毛一色」 昔は黒に限らず、何にても一色にして角のととのひたるを賞び、

君を思へば。

よやヨホイホ。

結ばれ糸の。

ハリナ。

とけぬ心が

辛ろござる。

いよつろござる。

辛らき筑紫に立年月。

御悼はし

や菅相丞。

讒者の業に罪せられ。

埴生の小家の起臥も。

きの

ふと暮て今日は早。

延喜三年如月半。

空も春めく野山の眺め。

野飼に召させ奉り。

我樂しみは在郷歌。

君を思へば。

よやヨホ

イホ。「ハ、ハ、ハア何をがな

う聲。牛殿の手前も面目ない。エ、見れば見る程見事な毛並。

角の構へ。眼の備へ。頭持の様子。骨組。肉合。惣毛一色。眞

黒黒牛。渡り縷子も及ばぬ色艶。天角地眼。一黒。直頭。耳小

齒達。天晴御牛候よ。ちよくらのちよせい。と譽にける。菅

相丞はめづらかに。聞馴給はぬ譽詞。「ヤイ白太夫。春は耕し。

神の性にもこれを用ひしなり。
「渡り橋子」 ば支那より渡來の橋子、光澤よし。
「天角地眼」 ば角は天を衝き、眼は地を睨むといふ
良牛の相、俚言集覽に「天を衝き地を睨みつゝ涕たれて一黑陸頭耳小齒違」これは相牛の法なり、天を衝くとは角の上を衝くをいふ、一黑とは純黒をいふ、陸頭とは頂の平なるを善とす、耳小とは耳の小なるを善とす、齒違とは齒の違ふを善とす、量數になぞらへて、一石六斗二升八合といふなり」と見ゆ、白太夫の講釋とるく頭たけ異なれど、こは字のちがへるゆゑなれば、いづれも咎むべからず、「ちよ／＼らのちよせい」俗語なれば其道の人に尋れ

秋は刈穂の稻を貢せ。耕作の助けと成る牛の善惡。能く知る筈。
天角地眼と申せしは。角と眼の備への事。一石六斗二升とは。牛を買取る其價ひ。舛目に積る物やらん。語れ聞んと仰ける。
「さつてもしたり。天下に有るとあらゆる事共。餘さず漏さず知てござる相承様。牛の事は御存知なく。お尋に預るは。百姓に生れた一德。お慮外ながら。牛の講釋聽かしやりませ。一黑と申すは。俵物の石目ではござりませぬ。毛色を吟味する時は。黒いが極上。それで一黑。次に直頭とは。天窓の見所。頭とは頭どちらへも傾かず。ましろくなが能いさかいで。直頭と申します。耳小の耳は耳。小はちいさし。随分耳はちいさいを好みます。扱齒違ふとは。きやつがおね／＼伺を嚙。上下の齒先揃ふは悪し。五一に生たが齒違ふの。齒の見所。次第を上から言立つれば。一石六斗二升八合。牛の講釋もう仕廻でござまする。

たれと詳ならず、なほ考ふべし。

「春は耕し秋に云々」 「春は耕し秋は收む」といへる句に「秋の田の」御歌をあらせて書たるなり。

「ろく頭」 なまろくな頭といへるは當れり、ろくはまろく(圖)の略にて物のととのひてかけざるをいふ、直の字は義にて用ひしなり。

「五一に生へた」 はくひち、ひに生じたるをいふ、ぐいちとよむべし。

「性は道によつて賢し」は各其道にすぐれたるをいふ諺。

「大宰府」 は筑前國筑紫郡水城村に舊趾あり、昔鎮西の府廳にして、菅公の配所なり、總解を見よ、
「うそさびしい」 はそら

「誠に性は道に依て賢し。白太夫が咄しを聞。一つの徳を得たる

はと。仰にひよこく小踊りして。」こりやマアあんたる仰ぞい。

親の代から御領分の百姓。三つ子の事迄お世話になされ。御恩

に御恩有がたふて。寝た間も忘れぬ。此親と違ふて。三人の躬

共。一人は死ぬる。跡二人は。氣も揃はず。面倒な奴們打ほう

つて。此太宰府へ参つたは。去年の三月。うそ淋しい不自由な

お住居。一年の日数は立てど。月見花見に出もなされず。今日

は何と思し召す。牛引けと有る御意が出て。私が皺も腰も。ア

延やかな春の野面。安樂寺へお参詣は。御歸洛のお立願でが

なごさりませう。否やとよ。我に科なければ。佛に苦勞かけ奉

り。身の上祈る心はなし。讒者の業としろし召さば。罪なき事

も世に顯はれ。歸洛の勅説下るべし。夫迄は菅相丞。月にも花

にも目はふれず。私なき臣が心。帝はしろし召れず共。天の照

淋しい、きみわるき、
「延びやかな」 上下にか
れり「安樂寺」よく用ひ
たり、安樂寺は太宰府村に
ありて、今太宰府天満宮の
ある所、もと安樂寺の菅廟
と稱せしが、近年寺號を廢
せしなり、計前に有名なる
飛梅あり、總辭を見よ、
「月見花見にも出もなされ
ず」 菅公配所にあり、門
を閉ぢて、餘り他出せられ
ざりしといふ、公の詩に「此
地雖身無檢繫。何爲寸步
出門行」
「身の上祈る心はなし」
菅公の歌に「心だにまこと
の道にかなひなば祈らずと
ても神やまゐらん」
「天の照覽明かなり」 菅
公筑紫にての詠に「海なら
ずたゞよふ水の底までも清
き心は月ぞ照さん」

覽明らかなり。安樂寺へ志すは。此曉不思議の靈夢。菅相丞が
愛樹の梅。今如月の花盛り。都の住居思ひ寢の。枕の硯引寄て。
筆に任せて斯くばかり。東風吹かば匂ひおこせよ梅の花。主な
しとて春な忘れぞと。心を述て睡眠しに。妙なる天童。我枕に
立せ給ひ。「汝憐愍の心深く。仁義を守る忠臣の功。心なき草木
迄情を受し主を慕ひ。花物いはねど其驗。安樂寺へ詣見よと。
示現に依てと宣ふ所へ。安樂寺の住僧。杖を便りに老の足。夫
れぞと見奉りしより。小腰を屈め立寄れば。相承鞍よりおりさ
せ給ひ。「住侶の歩行は何處へぞ。我は貴院へ行く折から。是に
て對面祝着く。ハア愚僧義も外ならず。公の御目にかゝりた
く。參る子細餘の義にあらず。夜前不思議の靈夢の告。御慈愛
の梅一樹。配所の主に見せよと有る。示現にかはらぬ觀音堂の
左の方。一夜に生出る不思議さよと。語るも聞くも正夢の。割

「東風吹かば云々」 菅公

二月の頃、愛樹の梅をおぼし出で、此歌をよみ給ひたれば、四條高辻東洞院紅梅殿の梅が、安樂寺へ飛行きしなどいへるが、都出立の時の詠なるべし、意は春の東風が吹かば香を配所までおくりよこせよ、主なしといふて春を忘るゝことなかれといふこと。

「花ものいばれど」 十訓抄に菅公飛梅に向ひて「古里の花のものいふ世なりせばいかに昔しの事を問まし」とよみ給ひたれば梅がものいひし由を詠せり、又桃李不言下自成蹊、

「住侶」 は住僧の意、餘り聞かぬ語なり、

「正夢」 は事實に合ふ夢

「袖に留木」 は袖の香をいふ、留木の事は道明寺の

符を合せしごとく也。是より寺へは程近しと。住侶伴ひ御歩路。

安樂寺に入り給へば。夫れぞとしるき梅花の薫り。袖に留木の

心地せり。暫く是にて御詠めと。床几直させ褥を設け。御菓子

小竹筒と住寺の饗應。白太夫はこつそこそ。梅の土際覗き廻り。

「こりや不思議。イヤ希代ちや。申し相承様。途次お住寺の夢咄

し。へ、何をやらるゝやら。そんな事が能う有らうと。誠しな

い事。疑ふておりましたが。來て見て恠り。此木の枝ぶり花の

匂ひ。佐太のお下屋敷に預つて居りました。夫れぢや。其

梅でござりまする。ア、神佛の告は争はれぬ。おらが爰へ來た

跡では。水一杯飲まし人も有まいに。ぶきくとした木の色艶

芽立の氣條つういつい。花はうさる程付たれば。梅漬の時分二

三斗は慥に生らふ。四五升は地を借た年貢代。お寺へも進ぜま

す。跡は此方の實入。今は先腹の實入。御馳走酒下さりま

段に解す、梅を袖が香によ
 そへて詠みし賦、頗る多し
 古今集に「色よりも香こそ
 あはれとおもふゆれ誰か袖
 ふれし宿の梅をも」散ると
 見てあるべきものを梅の花
 うたてにほひの袖に残れ
 る」
 「小さく」は酒を入るゝ
 小き竹筒なるべし、
 「ぶきく」とした」は勢
 のよきをいふ、
 「うざるほど」は極めて
 澤山なるをいふ、
 「梅漬の時分云々」親父
 のいひさうな事。實入りの
 語面白し味ふべし、
 「いつでも」は何時で
 もの音便、
 「天目」は茶碗の一種、
 支那建安の、天目山に始ま
 るゆゑの稱とぞ、
 「口も心も有のまゝ」よ

しよ。ア、これお酌。白太夫が盃は。いつゝでも此天目。立酒
 は氣にかゝると。床几の傍にちよつゝくばひ。口も心も有の儘。
 見えた通りの律義者。花の眺めに一入の。興を催しおはする所
 に。そりや喧嘩よ。アリヤ拔た。切合てそりや來るは。寺内へ
 入れな門打てと。いふ間あらせず踏込く。打合戦ふ侍二人。
 寺僧は驚き白太夫。御座を圍ふて。ア、これく。「見れば双方
 旅装束。喧嘩はふり物と有つてから。爰で仕廻は付させぬ。出
 やれくといふをも聽かず。切合ふ一人は我子の梅王。コリヤ
 まあ其方は何として。ハッくひあいな切られなと。氣をもみ
 あせる親心。「聲の助太刀相人の刀。梅王に打落され。逃るを隙
 さず飛かゝり。片手つかみに筋斗打せ。膝にかためし健氣の舉
 動。「ヤレく出かした。手がらく。ヤ手柄はしたが喧嘩の次
 第。次には其方が下つた様子。都の事を案じてござます。幸ひ

く見たり、
 「ふり物は」 降つて湧い
 た物、
 「ひあい」 はむごきない
 ふ、
 「ござます」 はござりま
 す、
 「置きまされす」 は置き
 申されす、
 「日和まん」 は日和の都
 合よきないふ、
 「千里一跳」 句勢あり、
 李太白「千里江陵一日還」
 「此地へ筑紫船」 とかけ
 たり、筑紫船は萬葉に「つ
 くし船いまだも来ればあら
 かじめあらぶる君を見るが
 悲しさ」
 「ふづくりかけて」 謀り
 てたぶらかしかけるないふ
 色道大鑑に「常道のふづく
 りは謀りてもて、人をたぶ
 らかす事をいふ」と見ゆ

是に相承様。様子一々申し上い。ハッハア恐れながら。梅王が
 念願達し。變らせ給はぬ御尊躰。見奉るは生涯の本望。都に御
 座有るお二人様。世を忍ぶお身なれば。一所には置きまされず。
 若君様は。武部源藏に預け置き。私が妻。櫻丸が女房。八重と
 春とは。御臺様の御介抱。お身の上は差置れ。配所の様子見て
 参れと。仰に幸ひ出船の手番。天運に叶ひ日和まん。千里一跳
 ね日數も込ます。夜前此地へ筑紫船。乗合の中に時平が家來。
 驚塚平馬。「此梅王を見しらぬ馬鹿者。ふづくりかけて様子を問
 へば。昔相丞を殺しに來たと。儕が口から最期を急ぐ。寺にご
 さるを能ふ知つて。直に仕かける不敵者。梅王が御土産と。早
 繩かけてぐつと縛め上。椽柱に猿縛ぎ。心地よくこそ見えにけ
 る。相承御悦喜淺からず。戀しき都の様子を知らず。忠義の花
 は。有情の梅王。示現によつて飛來る花は。非情の此梅の木。

「忠義の花、飛來る花」「有情、無情」「梅王、梅の木」よく對したり、山川草木靡かぬものなき、菅相丞の高徳おもひやらる、

「梅は飛び云々」の歌は源平盛衰記に源順が詠といへる、第三句より以下をかへたるなり「松のつれな

るらん」の句「松はつれなかるべき」の意にてよみたる事は、寺子屋の段の、松王が解釋にて明なれば、下の「つれなかるらん」とある松王「はつれなかるべき」とある松王のこゝろなり、これ親兄弟まで悪者とおもへる松王の性根を、菅相丞のみ見抜き給へる明眼をあらはせる積なるも、いかんせん字句にては「松王は情なし」と「意得る外いたしかたなし、作者は松のの字にて

有情非情も隔なく。菅相丞を慕ひくる。梅に褒美の御言の葉。

梅は飛び櫻は枯る世の中に。何とて松のつれなかるらん。つれ

なかるらん松王は。時平が舍人。枯し櫻は宮の舍人。梅王は我

舍人。花の榮えは安樂寺。其名も高き飛梅の。不思議は今に隠

れなし。「ヤイ梅王。有がたい今の御歌。此梅に准へ。其方をお

譽遊ばし。櫻は枯る世の中とは。死んだ悴を御悔み。つれなか

るらんと有る松王めは。時平に追從しておろな。ホ、親人の推

量違はず。兄弟といふも穢らはしい。畜生めはさて置いて。さす

敵は此驚塚。シア時平が工み白狀せい。いやといへば刀の引導。

如何ぢや／＼と立かゝる。「ア、これ聊爾有るな。主従の義を立

ぬき。命にかへて云はぬは古風。いはして置いて殺すも古風。新

しう助かる様に残らず申す。時平殿は王位の望み。邪魔になる

菅相丞。首取て立歸れ。軍陣の血祭して。大望の旗を上げ。天

利かしたる考ならんも、駄目なり、

「飛梅の事」 は總解を見よ、

「主従の義を立ぬき云々」

此兩古風、いづれも命助かられば、望む所にあらず

いひもし助かりもする新工夫を前置に、白狀とは至極妙案、

「血祭」 は軍陣に牲の血を以て軍神を祭り、必勝を祈ること、後にはこれになぞらへて、其手始めに殺すものをいふ、

「柔和の相」 の瞋恚の相に變ずる所、よく書きたりものすこし、

「呪ましやまして」

呪ましやまして、

ば

皇親王院の御所。片端し仕廻ふて天下を一呑。身共も公家に成

る樂し。空悦びの裏が來て。耻をさらす縛り繩。早ふ解いて

くださりませと。時平が叛逆一々残らず。聞し召れし菅相丞。

柔和の形相忽ちかはり。御皆に血をそゝぎ。眉毛逆立御憤り。

都の方を睨付。物狂はしく立給へり。白太夫恠りし。「しれて有

る時平が奸計。今聞たか何ぞの様に。ついぞ覺えぬ怖い顔

爰から睨しやまして。都へは届きませぬ。御持病の瘡が發れ

ば。エヘン悲しうござりますと。老のぐどく物案じ。「やおれ

梅王白太夫。時平の大が謀叛の企。聞捨られぬ御大事。赦免

なければ歸洛も叶はず。王位を望む朝敵と。しろし召れぬ玉體

危し。臣が忠義。徒に此所に朽果る。骸は虚命蒙る共。死した

る後は憚りなし。靈魂帝都に立歸り。帝を守護し奉らん。天に

誓ひの我願ひ。驗は目の前白梅の。氣條ぼつきと折取給ひ。朝

「花の亂れ焼」 頗る味あり、亂れ焼刀の刃のくもり
のうねりたる物「梅の名作云々」即ち首は飛梅の歌、
「虛名」 はなき名、無實の名、
「此高山絶頂に云々」 菅公天拜山に上り、無實を天に訴へ給ひしといへるより書く、總解を見よ、
「梵天帝釋」 は天部三十三天の天子にして、居城を喜見城と名づく、
「閻羅王」 は地獄の長官鬼類の總司なりといふ、十王經などに見えたり、
「三天主」といふ事は佛書に見當らずとぞ、恐らくは、梵天帝釋を四天王の一と思ひて、其餘を三天主と書けるにばあらざるか、佛書の四天王は、東方持國

敵一味の倭人原。退治の手始めは見よと。枝にて丁と打給へば。
平馬が首は飛梅の。氣條も花の亂れ焼。誠の劔も及びなき。梅
の名作御手の中。親子は恐るゝ計也。「ヤイ汝等。かゝる大事を
聞からは。片時も早く都に登り。時平が謀計奏問せよ。我は見
上る此高山。絶頂に三日三夜。立行荒行根氣を碎き。梵天帝釋
閻羅王。三天主に誓を立。魂魄雲井に鳴雷。十六萬八千の首領
と成て。眷屬引連れ都に登り。「謀叛の奴原引裂捨ん。現世の對
面是迄也。急ふれやつと御聲も。共に烈しき颯ち風。吹立／＼
本堂の。薨破れて庫裏方丈。薨遣り戸は木の葉のごとく。庭の
立木も飛梅も。花も砂も吹しきる。親子も住寺も大きに驚き。
「期も來らざる御身を捨。天帝へ祈誓有る。御本意は達する共。
御臺姫君若君の。御歎きはいか計り。とゞまり給へと御袖に。
取付梅王白太夫。弓手馬手へ反ね飛し。「住僧いたくなとめ給ひ

天、南方增長天、西方廣目

天、北方多聞天、

「魂魄雲井に鳴る雷」

菅

公の怨靈雷となり、讒を排

へたる時平菅根の輩、これ

が爲めに震死すといへるよ

り書けり、菅原傳授の總解を見よ、

「十六萬八千」

又八萬四千などの語は屢佛經に、用ひらるれど、只數多きを示すまでなり、字に拘泥すべからず、

「いそふれやつ」

は、いそおれやつとよむべし、急げといふに同じ、

「御聲も共に烈しきはやち風云々」

祈誓感應の狀、よく書きたり、

「立木も飛梅」

面白し

「期」は時節といふに同じ、

「渦く花びら火焰となつて」

頗るものすごし、

そ。早はや天てん帝ていの惠めぐみによつて。形かたちは此儘このま鳴神なるかみの。ふしぎを見みせんと

散ちり残のこる。梅はな花くわを取とて口くちに含くみ。天てんに向むかつて吐はく梅はな花くわ。渦うづく花はな芭はなびら

火焰くわえんと成なつて。雲井遙くもみはるかに行末ゆくすえは。怪あやし。恐おそろし。

菅原傳授手習鑑 寺子屋の段

總 解

出雲は淨曲作者中の傑物にして菅原傳授は出雲作中の傑作なり。しかして寺子屋の段は菅原傳授中に傑出せり。淨世は出雲出でゝ國文壇に重きをなし菅原傳授あらはれて光輝を放ち。寺子屋の段あつて精華を發す。其趣向の妙文章の妙に至つては古今文士の共に賞嘆するところ。今更論ずるが野暮なるべし。あやしの賤山樵しやまがらにいたるまで「一字千金二千金」と首を振るは。其文句の千金二千金なるによらずんばあらず。

芹生里 山城國愛宕郡大原の西。今の草生井出の里なるが。其名亡びしといふ。こゝに忍ばせたるは。古歌に隱者めきたる詠多きに思ひよれるものか。夫木集「世をそむく門出はしたり大原や芹生

の里の草の庵に「拾玉集」詠めやる人の思ひは大原や芹生の奥の
 檜の炭が「山家集」大原は芹生を雪の道にあけてよもには人の
 通はざりけり「閑谷集」おぼつかな芹生の谷の細道にふみたがへ
 てや君隠れけん」

武部源藏菅秀才の事は傳授の段の通解。松王などの事は佐太
 村の段の總解を見よ。其他各段の總解を參照せば。何事も明か
 なるべし。

此段趣向應照字句の妙はいふまでもなけれど。作者が興に乗
 じて。筆をやりしとおぼしく。解釋にくるしむ語頗る多し。註釋
 の古書には。賽笠翁の瑠璃天狗といふあれど。あらまかしき上
 難語を省きたれば。いふに足らず。其他新しく出たる書は。絶え
 て見ざれど。恐らくは解釋にはあらで批評の著ならんか。され
 ば自ら考ふるまゝを書きつらねたれば。誤りの箇所も多から
 ん。よろしく讀者の御指導を乞ふ（此段のみならず。すべて机上
 に編出し居れど。こゝにいふのみ）

寺子屋の段

「二字千金」の書出し、

寺子屋に懸じて最も妙、之をうけて二千金三千世界と書下せる處、眞に千金の名句、一字千金の語は、もと呂氏春秋より出て、文字の貴きないふ、別記を見よ、三千世界の寶は此世の寶といふ意、大きくいへるなり「菅秀才」の事は傳授の段を見よ、

「武部源藏」は、元祿の頃、江戸に建部傳内といふ能書ありて、傳内流とて傳はれり、作者其人の名をかりて、取くみたるなりと、傳授の段の總解を見よ、

「いたばり傳き」は大切に事ふること、

「芹生の里」は山城愛宕郡大原の西今の草生井出の

寺子屋の段

一字千金二千金。三千世界の寶ぞと。教へる人に習ふ子の。中

に交はる菅秀才。武部源藏夫婦の者。いたはり傳き我子ぞと。

人目に見せて片山家。芹生の里へ所替。子供集て讀書の。器用

不器用。清書を。顔に書く子と手に書くと。人形書く子は天窓

搔。教ゆる人は取分て。世話をかくとぞ見えにける。中に年か

さ五作が息子。コレ皆は見や。お師匠様の留主の間に。手習す

るは大きな損。おりや坊主天窓の清書したと。見せるは十五の

涎くり。若君はおとなしく。一日に一字學べば。三百六十字の

教へ。そんな事書ず共。本の清書したがよいと。八つに成る子

に呵られて。ませよくと指さして。嘲戲かゝるを殘りの子供

兄弟子に口過す。涎くりめをいがめてやると。手ん手に壓尺振

里なるが、其名亡びしといふ、古歌に隱者めきたる詠多ければ、こゝに忍ばせたるが、總解を見よ、
 「讀書の器用不器用清書を云々」の書盡し、輕快にして妙味盡さず、且昔の寺子屋の狀を、よく寫したり「よだれぐり」ば涎を垂るゝ一種の病、十五にして此の如し、已に其愚鈍なるを知る、
 「一日に一字學べば云々」群鶴の一鶴、天性の利發を見る、
 「ませ」ば年よりれびたるをいふ、ますの意か、老成など書く、
 「てうげ」ばふさげの意、
 「壓尺」ば文鎮の一種、卦算より出でしなるべし
 「傳はる筆の威徳」菅公は筆道の神、源藏此傳授を

廻す。自然天然肩持も。傳ふる筆の威徳かや。主の女房奥より立出。又こりや例の鬭諍か。おとましや。今日に限つて連合の源藏殿。振舞にいてなれば。戻りもしれぬ。ほんにこなた衆で。一時の間も待兼ね。今日は取分寺入も有筈。晝からは休ます程に。皆精出して習ふたく。ソレヤ又嬉しや休ぢやと。筆より先に讀聲高く。いろはに。此中は御人被下。一筆啓上候べく。男が肩に堺重。文庫机を擔せて。惻發らしき女房の七つ計りな子を連て。頼ませうと言入る。内にもそれと早悟り。此方へおはいり遊ばせと。言ふもしとやか。アイくんと。愛に愛持つ女子同士。來た女房は猶笑面。一私事は此村はづれに輕う暮してをる者でござりまする。此腕白者をお世話なされて下さりよかと。お尋申しにおこしましたれば。おこせ。世話してやろと。結構なお詞にあまへ。早速連て參じました。内方にも

受く、傳授の段を見よ、
「おとましや」 はうとま
しやの轉、思みきらふべき
ないふ、
「振舞」 は動作の意より
轉じて響應のこと、
「寺入」 は寺子屋へ入門
ないふ、
「筆より先に讀聲高く云々」
休みと聞いて兒童の嬉ぶ
狀、寫し得て妙、今の學校
も此の如し「候べくの男の
肩」頗る面白し、
「堺重」 は細長き形の重
箱ないふ、泉州堺より出で
たる名なるべし、
「利發」 は怜悯發明の意
さとしくさかしきないふ
「愛に愛もつ」 女同志の
挨拶ぶり、愛嬌あるないふ
千本櫻の鮎屋にも「愛に愛
もつ鮎の鮎」
「梔白者」 は手に乗らぬ

御子息様ごしそくさまがござりますすげなが。どのお子こでござりますすぞ。アイ
是これが源藏殿げんざうどのの跡あととりでござりますす。コレハ／＼よい御子様ごさまや。
外ほかにも大勢おほぜいの子達こたち。いかいお世話せわでござりましよ。アイ御推量ごすいりやう
なされて下さりませ。シテ寺入てらいりは此このの子でござりますすか。名なは
何なんと申します。アイ小太郎こたろうと申しまして。梔白者わんぱくものでござりますす。
イ、ヤイヤ高氣けだかいよいお子こや。折悪なりわるふ今日は連合源藏れんあいげんざうも。振舞ふるまひ
に参まゐられました。是これはマアお留主るすかいな。お待遠まちどほなら私わたしが。呼よび
に参まゐりましよ。いへ／＼。幸さいはひ私も参まゐつて來る所ところが有あれば。其その
内うちにはお歸りかへでござりませう。コレ三助さんすけ。其持そのもつて來た物もの。あな
たの傍そばへ上あませ。アツト答こたへて堺重さかいぢゆう。櫃へびに乗のせたる一包ひとくみ。内儀ないぎの
傍そばへ差出さしだす。「是これはマア／＼いはれぬ事ことを。イヤおはもじながら
此この子が参まゐつたしるし。此堺重このさかいぢゆうは子達こたちへの土産みやげ。取弘とりひろめて下さり
ませと。いはねどしれし蒸物むしもの。煮染にしめ。我子わがこに世話せわを焼豆腐やきとうふ。粒つぶ

子供をいふ、わらばの音便
わつぱの轉なりといふ、

「いかい」 は大層の意、

「けだかい」 は氣品のあ
るをいふ、

「へぎ」 はへぎ板にて作
れる盆の類、

「おほもじ」 はおほづかし
何文字といふは婦人の語、

もと宮女の隠語より出でた
る由、後にいふべし、

「蒸物」 は饅頭の類をい
ふ「世話を焼豆腐つゝ椎茸」
といへり、椎茸は一種の小
き椎茸、

「ほんそ子」 は最愛の子
をいふ、奔走子にて父母の
走りまはり、世話するより
の稱、

「わるあかき」 はいたづ
らなをいふ（もと馬の足掻よ
り出づ）

「御内證様」 は奥様とい

椎茸の入たるは。奔走子とこそ見えにけれ。「是はマア何から何迄。取揃へて御念の入た事。戻られたら見せませう。」イヤモほんの心計。宜しうお頼み申し上げます。コレ小太郎。ちよつと隣村迄往て来る程に。おとなしうして待て居や。悪あがきせまい。

いざ御内證様。往て参じましょと。表へ出れば。母様わしも行たいと。縋り付を振放し。「嗜めよ。大きな形して跡追のか。御覽ふじませ。まだ頑是がござりませぬ。ソリヤ道理いな。ドリヤ叔母がよい物やりましょ。つい戻つてやらんせと。目でしらすれば。アイ。ついちよつと一走りと。跡追子にも引さる。

振かへり見返りて。下部「引連急ぎ行く。どりやこちの子と近付にと。若君の傍へ寄せ。機嫌紛らす折からに。立歸る主の源藏。常にかはりて色蒼白。内入悪く子供を見廻し。」エ、氏より育ちといふに。繁華の地と違ひ。いづれを見ても山家育。

ふに同じ、正しくは内政と書くべし、女房は内をとりまかなふよりの稱、秘密の内證は佛典より出て別なり、

「嗜め」はつゝしめ、
「ぐわんぜない」は子供

のわきまへなきないふ、多く頑是など書けど、觀世の方正しく、世の中の事を觀じ知ることなき意なりと、
いかゞ、

「氏より青ち」生れながら

より青でがらといふ世の諺
「いづれを見ても山家育ち」
此句よく世に用ひらる

「さゝ」酒の古語、

「いたいけ」は子供の愛

らしき狀、

「器量」は才智の事より

轉じて容貌をいふ、

「公家」は堂上方、高家

は武家の歴々をさす、

世話甲斐もなき役に立ずと。思ひ有げに見えければ。心ならず

女房立寄。「いつにない顔色も悪し。振廻の酒機嫌かはしらぬが。

山家育は知れて有る子供。憎駄口は聞えも悪い。殊に今日は。

約束の子が寺入して居まする。悪い人と思ふも氣の毒。機嫌直

して。逢てやつて下されと。小太郎連て引合せと。差俯伏いて

思案の躰。幼氣に手をつかへ。「お師匠様。今から頼み上ますと。

いふに思はず振り仰向。急度見るより暫くは。打目守り居たり

しが。忽面色柔らぎ。「扱々。器量勝れて氣高い生れ付。公家高

家の御子息といふても。おそらく耻しからず。ハテ扱。そなた

はよい子ぢやなふと。機嫌直れば女房も。何とよい子。よい弟

子でござんしよが。好いともく上々吉。シテ其連て來たお袋

は何處に。サお前の留守なら。其間に隣村迄往て來といふて。

ナ、夫もよし。大極上。先子供と奥へやり。機嫌よふ遊ばし

「上々吉」 はうらないの語より出づ、

「お袋」 は母のこと、胎内に子をやどすさま、袋の如きよりの稱とぞ、又ふところ(懷)の轉ともいふ、委しくは後にいふべし、

「きつさう」 は氣相と書く、顔つきをいふ、振舞とのみ心得居る女房には、夫の様子合點行かざるべし、

「ホ、ウ氣遣な筈」 先づ事の重大なるを知る、

「庄屋」 は村の長、前にいへり、

「家來」 は己に解す、玄蕃の名にあまりよき者なし

「相丞」 は大臣の唐名、道真は右大臣、

「數百人」 とは仰山、

「のつびき」 は退き引きの音便

「玉簾」 は高貴菰垂は下

召され。夫れ皆お隙が出た。小太郎共に奥へくと。若君諸共

誘はせ。跡先見廻し夫に向ひ。「最前の顔色は常ならぬ血相。合

點の行ぬと思ふた所に。今又彼の子を見て。打てかへての機嫌

顔。猶以て合點行ず。どうやら様子が有さうな。氣づかひな聞

してと。問へば源藏。「ホ、ウ氣づかひな筈。今日村の饗應と偽

り。某を庄屋の方へ呼付。時平が家來春藤玄蕃。今一人は菅相

丞の御恩を被ながら。時平に隨ふ松王丸。此奴病ほうけながら。

見分の役と見え。數百人にて追取卷。汝が方に菅相丞の一人菅

秀才。我子としてかくまふよし。訴人有て明白。急ぎ首討て出

すや否や。但し踏ん込請取ふや。返答如何にと。退つ引ならぬ

手詰。是非に及ばず首討て渡さうと請合た心は。數多有る寺子

の内。いづれ成り共身がはりと。思ふて歸る道すがら。あれか

是かと指折ても。玉簾の中の誕生と。菰垂の中で育つたとは。

賤、此語よく對したり（玉簾はみすのこと、玉はほむる詞）

「屠所のあゆみ」は牛羊の屠所へ牽かれ行く如く、しほれて進みかれるをいふ、涅槃經に「如き牽牛羊詣於屠所」又孟子にも牛の屠所にひかれ行く狀をいへり、「天道のひかへ」はたすけの意、

「烏を鷺」は相違の甚しきをいふ、

「一かばちか」は乗るか反るかの意、賭博より出でたる語なるべし、

「さうかう」は相形、相恰、相格など書けど、もと佛典より出で、相好と書くが正しきとぞ、顔のかたちをいふ「生顔と死顔とは相形のかはるもの」と、こゝに身代と一決せしめたるは

似ても似付ず。所詮御運の末なるか。いたはしや淺ましやと。屠所の歩みで歸りしが。天道のひかへ強きにや。「あの寺入の子を見れば。まんざら烏を鷺共云れぬ嫖致。一旦身がはりで欺き。此場さへ遁れたらば。直に河内へお供する思案。今暫くが大事の場所と。語れば女房。待んせや。「其松王といふ奴は。三つ子の内の悪者。若君の顔はよふ見知て居るぞへ。サアそこが一かばちか。生顔と死顔は相格のかはる物。面ざし似たる小太郎が首。よもや贗とは思ふまじ。よし又夫と顯はれたらば。松王めを眞二つ。残る奴原切て捨。叶はぬ時は若君諸共。死出三途の御供と。胸を居たが一つの難義。今にも小太郎が母親。迎ひに來たらば何とせん。此義に當惑。指當つたは此難義。「イヤ其事は氣づかひ有るな。女子同士の口先で。ちよつほくさ欺して見よ。イヤ其手では行まい。大事は小事より顯はるゝ。事に寄た

後に松王をして、此語を吐かしむる伏線、

「面ざし」は顔のふりをいふ、

「死出三途」は冥途にあ

りといふ山と川前にいへり

「叶はぬ時は若君諸共」と最

後の決意、語氣頗る迫る「胸

を据たが一つの難義」とし

ほれかへる状、見るか如し

「ちよつほくさ」はちよ

つこり、ちよこゝとなど

の意、大阪地方の俗語、

「大事は小事より顯ばる」

は微をつゝしましむる戒、

中庸に「隠れたるより顯ば

るゝはなし、老子「に天下

の大事は必ず細に作る、

「事によつたら母もろ共」

と、夫の決心驚く女房、お主

のための辨へよ」といひ聞

かすものゝ、罪なき者を二

人まで殺すかと思へば、胸

ら母諸共。エ、イこりややい。若君には替られぬ。お主の爲を

辨へよと。いふに胸する。左様でござんす。氣弱ふては仕損ぜ

ん。鬼に成てと夫婦は突立。互に顔を見合せて。「弟子兒といへ

ば我子も同然。サ今日に限つて寺入したは。あの子が業か。母

御の因果か。報ひは此方が火の車。追付廻つて來ませうと。妻

が歎けば夫も目をすり。せまじき物は宮づかへと。共に涙にく

れ居たる。かゝる所へ春藤玄蕃。首見る役は松王丸。病苦を助

くる駕乗物。門口に昇居れば。跡には大勢。村の者。附隨ふて

申し上ます。「皆是におる者の子供が。手習に參つております。

若取違へ首討れては。取返し成ませぬ。何卒お戻し下されと。

願へば玄蕃。ヤアかしましたい蠅虫奴們。「うぬらが悴の事迄。身

共がしつた事か。勝手次第に連失ふと。呵り付れば松王丸。ヤ

レお待なされ。暫くと。駕より出るも刀を杖。「憚りながら。彼

中の苦しいかんぞや「弟子
々といへば我子も同然」と
妻が人情に立かへりて、母
子の不幸を歎き「報はこち
が火の車」と、因果をかつ
に至り「せまじきものは宮
仕へ」と、觀念の眼を閉づる
處、熱鐵を呑むよりつらし
「弟子子」は弟子はなほ
子の如しといふよりの辭、
「火の車追つて廻つて」
の句よし、佛説に因果應報
車輪の廻るが如し、火の車
は鬼が罪人を載せて地獄へ
送るといふ車、實は人間火
宅の苦みにたとへたるもの
なりと、
「宮仕へ」は朝廷へ仕ふ
る事より、後には一般貴族
に奉公するにいふ、
「かしましい」はさわが
しい、
「うぬらが忤の云々」
ま

等迎も油斷はならぬ。病中ながら拙者めが。見分の役勤るも。
外に菅秀才の顔見しりし者なき故。今日の役目仕課すれば。病
身の願ひ御暇下さるべしと。有難き御意の趣。疎には致されず。
菅相承の所縁の者。此村に置からは。百姓共もぐるになつて。
銘々が忤に仕立。助けて歸る術も有る事。コリヤやい百姓めら。
ざはくどぬかさず共。一人づゝ呼出せ。面改めて戻してくり
よと。退引させぬ釘鐙。打はひづけの内には夫婦。豫て覺悟も
今更に。胸轟かす計也。表は夫れ共白髮の親仁。門口より聲高
に。長松よ／＼と呼出せば。ナット答へて出でくるは。椀白顔に
墨べつたり。似ても似付ぬ雪と墨。是ではないと赦しやる。岩
松は居ぬかと呼ぶ聲に。祖父様何ちやとはしごくで。出くる子
供の頑是なき。顔は丸顔木みしり茄子。詮議に及ばぬ連うせふと。
睨付られテ怖や。「嫁にもくはさぬ此孫を。命の花落遁れしと。」

蕃の横柄にして、性質のそ
ふつゝのしきを見る。

「ヤレお待ちなされ」と

止めて置いて「疎にはいた

されずと、忠義の心中を示

し「百姓どもゝぐるになり

と、用心に拔目なきを顯す、

「二人つゝ呼出せ」頗る

手厳し、

「のつびきさせぬ釘鏝打て

ば云々」戸外の言葉に内な

る夫婦が、胸をゝどらす

狀、縁の語にて頗るよき書

きたに味ふべし、

「それとも白髮の親父」と

かけたり、

「長松よ〜」これより

以下子供改めば、興に乗じ

て筆を走らしたれば、其積

にて心得べし、

「梔白顔に墨べつたり」頗

る面黒し、雪と墨なるべ

祖父が抱て走行。次は十五の涎くり。ぼんよ〜と親父が手招

き「父よ。おれは最う爰から抱れて往のと。あまへる顔は馬顔

で。聲蕎。泣くな。抱てやらふと干鯢を。猫なで親がくはへ行

く。「私が悴は嫫致よし。お見違へ下さるなど。斷いふて呼出す

は。色白〜と瓜實顔。こいつ胡亂と引捕へ。見れば首筋眞黒

々。墨か黧かはしらね共。こいつでないと突放す。其外山家奥

在所の。子供残らず呼出して。見せても〜似ぬこそ道理。土

が産した斗芋。子ばかりよつて立歸る。スハ身の上と源藏も。

妻の戸浪も胸を据。待間程なく入来る兩人。「ヤア源藏。此玄蕃

が目の前で。討て渡そと請合た菅秀才の首。サア請取ふ。早く

渡せと手詰の催促。ちつ共臆せず。「假初ならぬ右大臣の若君。

搔首捻首にも致されず。暫くは御用捨て。立上るを松王丸。「ヤ

ア其手はくはぬ。暫しの用捨て隙とらせ。逸支度しても。裏道

「は。。。。」は「走りこくで」なるべし。祖父の聲を聞き、うれしく走り出し、いふならむ、
「木みしり茄子」は秋木よりむしり取る小茄子と、のはめ顔形をいふなるべし、
「嫁にも食さぬ云々」は木みしり茄子をうけ、萩茄子は嫁に喰はすなといふ諺より書く、花落も亦其縁の語なり意は大事の孫の命を拾ひしといふこと、面白くあやなして書けり、妙味いふべからず、宜しくさとりべし、秋茄子の事は別記を見よ、
「ぼん。。。。と親父が手招き其甘きを知る「おらもうこゝから懷れていの」其甘へたるを見る「あまへる顔は馬顔で聲きりんぐす」拔作たるをあらはす、頗る

へは數百人を付置。蟻の這出る所もない。生顔と死顔は相格がかはるなど。身替りの質首。夫もたべぬ。古手な事して後悔すなど。言はれてぐつとせき上。一ヤアいらざる馬鹿念。病ほうけた汝の目玉がでんぐり返り。逆様眼で見やうはしらず。紛れもなき菅秀才の首。追付見せう。ナ、其舌の根の乾かぬ内に早く討て。とく切れと玄蕃が權柄。ハット計に源藏は。胸を据てぞ入にける。傍に聞居る女房は。爰ぞ大事と心も空。檢使は四方八方に。眼を配る中にも松王。机文庫の數を見廻し。「ヤア合點の行ぬ。先達て往んだ餓鬼等は以上八人。机の數が一脚多い。其悴は何所におるぞと。見咎られて戸涙ははつと。「イヤこりや今日初めて寺イヤ寺参りした子がござんす。何馬鹿な。ナ、それく。是が則菅秀才のお机文庫と。木地を隠した塗机。ざつとさばいて云拔る。「何にもせよ隙どらすが油斷の元と。玄蕃諸

妙々、
「チ、泣くな抱いて、やらうと云々」甘へて泣く音を猫にたとへて「だいてやらうと干紐とつゞけ、甘き親を「猫撫親」といひて「くはへ行く」と書けるなるべし、これも面白くあやなしたる文なれば、味ふの外なし、「うろん」は俗にくさいやつといふに同じ、胡論の唐音なりといへど、いかゞ「土が産した斗芋、子ばかりよつて」此上なく面白しこじ／＼芋の子ばかりなるべし、これも味ふべし、「スハ身の上と云々」危機正に迫る、
「しばしの用捨とひまどらせ」と言葉尻を取つての毒言さへあるに「生顔と死顔は」と死まばりの一言、夫婦の胸に釘、

共突つ立上る。こなたは手詰命の瀬戸際。奥にはばつたり首討音。はつと女房胸を抱。蹈ん込む足もけしとむ内。武部源藏白臺に。首桶乗せてしづく出。目通りに指置。「是非に及ばず。菅秀才の御首討奉る。いはゞ大切な御首。性根をすゑてサア松王丸。しつかりと検分せよと。忍びの鈐元くつろげて。虚といはゞ切付ん。實といはゞ助けんと。堅睡を吞で扣え居る。「ハ、何の是しきに。性根所か。今淨瑠璃の鏡にかけ。鐵札か。金札か。地獄極樂の境。家來衆。源藏夫婦を取巻めされ。畏つたと捕手の人数。十手振て立かゝる。女房戸浪も身を固め。夫は元より一生懸命。サア實檢せよ檢分と。いふ一言も命がけ。後は捕手。向ふは曲者。玄蕃は始終眼を配り。爰ぞ絶躰絶命と思ふ内早首桶引寄せ。蓋引明た首は小太郎。質といふたら一討と。早抜かける戸浪は祈願。天道様佛神様。憐み給へと女の念

「古手」は古くさきしかた、

「いらざる馬鹿念」語氣

頗るあひる、源藏が忠義一途の心に、常々人外と思ひし松王が、見分の役目に来るさへあるに、此にくくしき詞を聞きては、憤懣に堪へざるへし、

「其古の根の乾かぬ中云々」玄蕃が主の威光を笠に横柄の鬨つかひ、よく見わたり

「權柄」は威を振ふをいふ（權は秤の錘、柄は斧の柄、前漢書に「大臣操權柄持國政」と見ゆ、此意より轉ぜしなり）

「机の數ち一脚多い」机の數を改めて子供に合せ「一脚多い」と手きびしく詰問する抜目なき注意、彼れが時平に盡す心中、誰か一點の疑を容れんや、しかし

力。眼力光らす松王が。ためつすがめつ伺ひ見て。「ムウこりや

菅秀才の首討たは。まがひなし。相違なしと。いふにも恠り源

藏夫婦。傍きよろ／＼見合せり。檢使の玄蕃は。見分の詞證據

に。出かした出かした。よく討た。「褒美にはかくまふた科赦し

てくれる。イザ松王丸。片時も早く。時平公へお目にかけん。

いか様隙取てはお咎めもいかゞ。拙者は是よりお暇給はり。病

氣保養致たし。チ、役目は濟だ。勝手にせよと首請取。玄蕃は

館へ松王は。駕にゆられて立歸る。夫婦は門の戸びつしやりし

め。物も得云ず青息吐息。五色の息を一時に。ほつと吹出す計

也。胸撫おろし源藏は。天を拜し地を拜し。「ア、有がたや忝や

凡人ならぬ我君の。御聖徳が顯はれて。松王めが眼が眊み。若

君と見定めて歸つたは。天成不思議のなす所。御壽命は萬々年。

悦べ女房。イヤもふ／＼大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王め

て彼れが至極の血の涙、
「本地をかくした塗机」
よくいひくるめるをいふ、

語味ひふかし、

「瀬戸際」は危急の場合
をいふ、船より出でし語な
るべし、

「女房の胸を抱く」

より
松王の肝にこたへしなるべ
し、

「けしとむ」は肝を冷す
といふに同じ、

「是非に及ばず云々」源
藏か玄番と松王とに對する
詞の遣分け、よく出来たり

臍を固めて「性根をすゑて
檢分せよ」と差出す首桶、

松王が虚實の一言は、正に
これ安危の分らるゝ所、兩

奸の間十手の下、氣を呑み
眼を配りて、刀を握りつむ

る絶命の様、見るが如し、
「忍びの鰐元くつるけて」

が眼の玉へ。菅相承様はいつてござつたか。但し首が黄金佛

ではなかつたか。似たといふても瓦と金寶の花の御運開きと。

餘り嬉しうて涙がこぼれる。ハア、有がたや尊やと。悦びいさ

む折からに。小太郎が母いきせきと。迎ひと見えて門の戸たゝ

き。寺入の子の母でござんす。今漸歸りましたと。いふ聲聞よ

り又恟り。一つ遁れて又一つ。こりやマア何と。どうせうと。

妻が騒げど夫は胴する。コリヤ最前言ふたは爰の事。若君には

替えられぬ。狼狽者と戸浪を引退。門の戸ぐはらりと引明れば。

女は會釋し。コレハマあゝお師匠様でござりますか。悪さを

お頼み申ます。何處に居やるぞ。お邪魔であるにと。いふを幸

ひ。「イヤ奥に子供と遊んで居ます。連立て歸られよと。眞顔で

いへば。「チ、そんなら連て歸りましょと。ずつと通るを後より。

只一討と切付る。女も白物ひつばづし。逃ても逃さぬ源藏が。

は内々に刀の鯉目をゆるむるをいふ、
「何のこれしきに」源藏の詞を嘲る、頗る大きく頗るづるし、
「淨玻璃の鏡にかけ云々」言辭、壯嚴偉大、趣味また頗る深し、實に千古の名文淨玻璃の鏡は地獄炎獄の廳にありて、罪人の亡者、これに向へば、生前の罪業を寫しあらはすといふ鏡、十王經に見えたり、こゝは眞偽を見分くる、松王の明眼にたとふ、「金机が鐵机か」十王經に、善事は金箔に書し惡事は鐵札に書する由、見わたるより書けり、善惡眞偽の見分けをいふ、「地獄極樂の界安危の分目をいふ、前をうけて書けり、頗る妙「十手」は慶安中歸化せし、明人陳元賛の傳へし由

刃するどに切付るを。我子の文庫ではつしと請とめ。「ユレ待た待んせ。こりやどうぢやと。反る奴も用捨なく。又切付る文庫は二つ。中よりばらりと經帷子。南無阿彌陀佛の六字の幡。顯れ出しはコハいかにと。不思議の思ひに劔も鈍り。進み兼てぞ見えにける。小太郎が母涙ながら。「若君菅秀才のお身がはり。お役に立て下さつたか。まだか。様子が聞たいと。いふに悔り「シテく夫れは得心か。得心なりやこそ此經帷子。六字の幡。ムウして其元は。何人の御内證と。尋る内に門口より。「梅は飛び櫻はかるゝ世の中に。何とて松のつれなかるらん。女房悦べ。悴はお役に立たぞと。聞よりわつとせき上て。前後不覺に取亂す。ヤア未練者めと呵付。ずつと通るは松王丸。見るに夫婦は二度悔り。夢か現か夫婦かと。呆れて詞もなかりしが。武部源藏威儀を正し。「一禮は先跡の事。是迄敵と思ひし松王。打てか

伊賀越岡崎の段を見よ、

「一生懸命」は命むけの

意、もと一所懸命より出で

たりと、絶跡絶命は脱れが

たき場合をいふ語、

「天道様佛神様」大事に

臨み身を以て當るは男兒の

事、神佛の加護を仰ぐは女

性の常、

「眼力光らす松王丸」頗

るす、

「ためつすがめつ」はた

てより仔細に見るをい

ふ（すめつば一目にして

見るよりいふ）

「こりや菅秀才の首うつた

は」意外の音響にあき

て夫婦が顔見合す状、眼前

に髻髻たり、此首實見の所、

危機眼前に迫つて、殺氣の

身を襲ふを覺ゆ、金玉の文

賞するに詞なし、大言を吐

き平氣をよそほひ、我子の

首を摘分する、松王が胸中

はつた所存は如何に。不審さよと尋れば。ナ、御不審尤存じ

の通り。我と兄弟三人は。銘々に別れて奉公。情なや此松王は。

時平公に隨ひ。親兄弟共肉縁切。御恩請た相丞様へ敵對。主命

とはいひながら。皆是此身の因果。何とぞ主従の縁切んと。作

病搦へ暇の願ひ。菅秀才の首見たらば。暇やらんと今日の役目。

よもや貴殿が討はせまい。なれ共。身がはりに立べき一子なく

ば如何せん。爰ぞ御恩報する時と。女房千代と云合せ。二人の

中の悴をば。先へ廻して此身がはり。「机の敷を改めしも。我子

は來たかと心の著。菅相丞には我性根を見込玉ひ。何とて松の

つれなからうぞ。との御歌を。松は難面くくと。世上の口にか

ゝる悔しさ。推量有れ源藏殿。悴がなくば何時迄も。人でなし

といはれんに。持べきものは子なるぞやと。言ふに女房猶せき

上。草葉の蔭で小太郎が。聞て嬉しう思ひましよ。「持べき物は

如何ぞや、彼れの性根にして、始めて忍び得、全篇を通じて松王が言語動作づうづしき中に、動かすべからざる度量を有せり、此度量を以て偽悪となり、時平をして無二の忠臣と信ぜしめ、親兄弟に例しなき人外と思はしめ、其間に處して、他のなすべからざる大忠を、首尾よく行へり、これ松王の度量にして、始めてなす得べし、誰かよく及ぶものぞ、
「い。か。さ。ま。隙。取。て。は。」 語
頗る落ついたり、
「役目は濟んだ勝手にせよ」 頗る横柄、
「青息吐息五色の息」 いふべからざる名句、今迄胸中の苦思思ひやらる、
「天を拜し地を拜し」 其悦び見るべし、

子なるとは。彼の子が爲に好い手向。思へば最前別れた時。い
つにない跡追たを。呵つた時の其悲しさ。冥途の旅へ寺入と。
早虫が知らせたか。隣村へ行といふて。道迄いんで見たれ共。
子を殺さしにおこして置いて。どうマア家へいなるゝ物ぞ。死顔
成共今一度。見たさに未練と。笑ふて下さんすな。包みし祝儀
はあの子が香奠。四十九日の蒸物迄。持て寺入さすと云ふ。悲
しい事が世に有ふか。育ちも生れも賤しくば。殺す心も有るま
いに。死る子は媚よしと。美しう生れたが。可愛や其身の不仕
合せ。何の因果に庖瘡迄。仕廻た事ちやとせき上て。かつばと
伏て泣ければ。共に悲しむ戸浪は立寄。最前にナ。連合の身が
はりと。思ひ付た傍へ往て。お師匠様今から頼み上ますと。い
ふた時の事思ひ出せば。他人のわしさへ骨身が碎ける。親御の
身ではお道理と。涙添れば。イヤ是れ御内證。「コリヤ女房も何

「凡人ならぬ」 はたゞ人
 でなき、
 「天成不思議」 は自然の不
 思議、我君を聖人と思へる
 源藏、かく思ひしなるべし
 「御壽命は萬々歳」 嬉色
 面に溢る、
 「あの松王めが眼へ云々」又
 「首が黄金佛では云々」先に
 佛神を祈りし戸浪、かく思
 ふなるへし、
 「似たといふても瓦と黄金
 寶の花の御運開き」 字句
 皆黄金の花、菅秀才は如何
 ばかりの美童なりしか、
 「寺入の子の母でござんす」
 疾雷一聲、
 「いふ聲聞より又びつくり」
 眉を開きし間もなく、一難
 去つて一難来る、途方にく
 るゝは女の常、胸をすうる
 は男の度量、
 「連立つて歸られよ」 語

でほえる。覺悟した御身がはり。内で存分ほえたでないか。御
 夫婦の手前も有る。イヤ何源藏殿。申し付てはおこしたれ共。
 定めて最期の節。未練な死を致したで御座らふ。イヤ若君菅秀
 才の御身がはりと。云聞したれば。潔ふ首指のべ。アノ逃隠れ
 も致さずにナ。につこりと笑ふて。ム、ハ、ハ、ハ、出かしおりまし
 た。利口な奴。立派な奴。健氣な八つや九つで。親にかはつて
 恩送り。お役に立は孝行者。手柄者と思ふから。思ひ出すは櫻
 丸。御恩も送らず先立し。嘸や草葉の蔭よりも。羨しかる。け
 なりかる。忤が事を思ふに付。思ひ出さるゝくと。流石同腹
 同性を。忘れ兼たる悲歎の涙。「なふ其伯父御に小太郎が。逢ま
 すわいのと取付て。わつと計に泣沈む。歎きも漏て菅秀才。一間
 の内より立出給ひ。我にかはると知るならば。此悲しみはさす
 まいに。可愛の者やと御袖を。しほり給へば夫婦ははつと。共

頗る平然、
「しれもの。」ばさるべき
者の意（しれ者）はもと白者
白痴など書きて、まぬけ者
の事なれど、かく轉ぜしな
るべし。
「遊ても遊さぬ云々」 語
頗るするどし。烈しく切込
むさま、見るが如し、
「經帷子」は死人に着す
る衣、經文の句など書きし
よりの稱、これと六字の幡
との意外には、あきれざる
を得ず、
「若君皆秀才のお身かはり
云々」 電光閃々の下、此
一轉頗る妙、源藏いよく
惘然松王の名乗出づるに至
つては、狐につまゝれし感
あるべし、
「梅は飛び櫻はかるゝ云々」
これは飛梅の段の總解及通
解にいへる如く、紅梅殿に

に浸する有がた涙。次手ながら若君様へ御土産と。松王つゝ立
申付た用意の乗物。早く／＼と呼はるにぞ。ハット答へて家來
共。御目通りに昇居る。早御出と戸を開けば。菅相丞の御臺所
ノウ母様か我子かと。御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を
打。「方／＼と御行衛尋しに。何處にか御座なされし。サレバ／＼
北嵯峨の御隠れ家。時平の家來が聞出し。召捕に向ふと聞。某
山伏の姿と成。危い所奪取たり。急ぎ河内の國へ御供なされ。
姫君にも御對面。コリヤ／＼女房。「小太郎が死骸。あの乗物へ
移し入れ。野邊の送り營まん。アイと返事の其中に。戸浪が心
得抱て來る。死骸をあじろの乗物へ。乗て夫婦が上着を取れば。
哀れや内より覺悟の用意。下に白無垢麻上下。心を察して源藏
夫婦。野邊の送りに親の身で。子を送る法はなし。我々夫婦が
かはらんと。立寄れば松王丸。イヤ／＼是は我子に有らず。菅

菅公愛樹の梅櫻ならびありしに、梅は「東風吹かば」の御歌ありしゆゑ、筑紫へ飛び、櫻はこれなかりしゆゑ、耻ぢて枯れたり、といふより、源順「梅は飛び櫻はかるゝ菅原や深くぞ頼む神の誓を」と詠めりとある第三句以下を「何とて松のつれなかるらん」とかへて菅公の詠とせるなり、松の、などの拙き語を用ふるところ、己に歌の何ものたるを知らず、出雲にして此の如し、他はいふに足らず、凡て淨瑠璃作者の和歌の如き、眞面目にかれこれ論するが野暮の至り、たゞ三十一文字ありて、意さへ通すればよしとなし置くべきに、これはそれさへあやしきふしあり、何とて云々、の句尋常に解すれば「何とて松王はかくつれなきならん」との外、意の得べきやうなし（掩護すれば如何やうにも解し得べし）さるる後に松王が解して「菅相巫には我性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌」といへり（作者は松のゝの字にてかくきかせる積ならんも駄目なり）さればらんは意なるべべきのし、此人にしてらんとべきとの區別を知らざるは、抱腹の至り、譽むべき妙所ば譽むべし、駁すべき欠點は何處までも駁すべし、なほ飛梅の段の總解及本文を見よ、

「女房よろこべ云々」

語急卒にしてよく利きたり「前後不覺に取亂す」さもあるべし、

「夢か現か夫婦かと」

餘りの事にあきれて夫婦たるを疑ふ、語頗る妙々、

「威儀を正し」

はかたちをあらたむること、頗る嚴然、

「一禮は先あとの事」

先づ胸中の疑團を述べ、

秀才の亡骸を御供申す。いづれもは門火くんと。門火を頼み頼まるゝ。御臺若君諸共に。しやくり上たる御涙。冥途の旅へ寺入の。師匠は彌陀佛。釋迦牟尼佛。六道能化の弟子になり。賽の川原で砂手本。いろは書子をあへなくも。ちりぬる命是非もなや。あすの夜たれか添乳せん。らむ憂目見る親心。劔と死出の山けこえ。あさき夢見し心地して。跡は門火にゑひもせず。京は故郷と立別れ。鳥邊野さして連歸る。」

「御不審尤も」 一言うけ得て妙、松王身自らよくこれを知る、これより諄々として彼れの眞心を説く、忠誠紙面に溢れて、鬼神を哭せしむ、且意義明亮にして、言辭亂れず、彼れの度量を見る、

「肉縁」 は骨内の縁、

「女房千代といひ合せ」机の敷を改めしも、 句々皆血の涙、

「心のめど」 は心のめあて（めどは目所にて目あての意、著とかくは當字なるべし、著はうらなひに用ふるものゆゑ云々、といへる説は

取らず、著をめどと稱するも、めあての意にてつけたるなり）

「何とて松の云々」 は管相亟は我が性根を見込みて「何とて松王のつれなくあらうぞ、つれなくはない」と詠み給へるを、世の人に「松

王はつれなし」といばるゝがくやしいといふ意なれど「つれなかるらん」にては世上の口の方正しき解なり、

「推量あれや源藏殿」 正におもひやらる、

「持つべきものは子なるぞや」 血と共に無量の恩愛を吐く、

「草葉の陰で小太郎が云々」 何たる名句ぞ、讀むもの涙潜々、

「冥途の旅に寺入と早虫が知らせたか」 頗るよき句なれ共、後に松王が「イヤ何源藏殿、申つけてはおこしかれど」の句に撞着するは惜むべし、

これ白玉の一瑕、思ふに作者が文章と趣向とに力を用ふるの餘り、ゆくりなく過ちしなるべし、不注意には相違なけれど、深く咎むるを好まず、

「包みし祝儀はあの子の香奠云々」 たゞさへ子におくるゝは、哀の又哀悲の又悲と歌へるを、義の爲めに情を斷つて、たゞ一人の奔走子を殺

したる、兩親の胸中、その苦悶いかんぞや、此文纏綿たる母の愛情を披瀝し盡し、悽惋悲愴、佳調流麗讀んで泣かざるものは人にあらず、國

文壇に淨瑠璃の價値を高からしむるは、かくの如き妙句、否此妙句あるを以てなりといはんとす、實に千歳不磨の、玉音といふべし、香奠は香

料といふに同じ、寺人の名にそむかず、祝儀の香奠となりしは、あはれむべし、

「四十九日の蒸物」 蒸物は四十九日の配物、四十九日の事は後にいふべし、

「育も生れもいやしくば」 菰垂は殺しても役に立ず、

「死ぬる子は見目よし」 これ昔よりの諺なり、土佐日記に「玉ならずもありけん」といひばんや、されども死にし子頗よかりきといふや

うもあり

「何の因果で疱瘡まで」 讀むに堪へず、

「お師匠様今から頼みします」 此語終生源藏夫婦の耳底にとゞまるべし、

「親御の身では御道理」 女同士同情を寄す、

「御夫婦の手前もある」 流石は男、

「イヤ何源藏殿」 一轉最もよし「申付てはおこしたれど云々」此問答眼前に見るが如く、妙味いはん方なし、されど申つけてはの句、前の「冥途の旅に寺入とはや虫が知らせたか」に、撞着のきらびあるは惜むべし、

「利口なやつ立派なやつ云々」 今まで義の爲めに押へたる、満腔の情熱を吐く、なまな心にいちらしく、首さしへて死んだと聞ては、親の身として何ともいはず、句々皆血と愛との凝塊、無量の慈心、無限の讃辭、無双の名句、小太郎以て瞑すべし、○利口はさがしきこと

○立派はすぐれて美なるをいふ、もと立破の字音にて、己を立て人を破る義なるが、一轉したるなりと○「健氣な八つや九つ」とかけたり、

けなげは殊勝慈心などの意、孝行者手柄者よく利きたり」と思ふから「の一轉またよし、

「同腹同性」 は同じ腹の三つ子なるゆゑにいふ、

「ノウ其叔父御に小太郎か云々」 頗るかなし、

「某山伏の云々」 時平の家來星坂源吾が召捕りに向ひしを、松王山伏の姿にて入り來り、源吾を殺して奪ひ取れるなり、河内は道明寺菅

相丞の叔母覺壽尼の居る所、刈屋姫もこゝにあり、道明寺の段を見よ、松王の忠義愈顯はる、源藏夫婦感嘆の外なし、

「あじろ」 の乗物は竹をあみて製したる乗物、

「白無垢麻上下」 とは用意周到、見るも涙、

「親の身で子を送る法はなし」 親子逆縁の野邊送りになさざる佛家の風習、よきならはしとも思はれず、

「菅秀才の亡骸を御供申す」 無限の情を含む、

「門火」 は葬を送る時門にたく火、

「御臺若君諸共にしやくり上げたる御涙」 好調優美、涙頗る貴し、

「冥途の旅へ寺入の云々」 人口に膾炙の名文句、寺子屋の書出しに、「一字千金二千金」と筆を下し、「いろは歌」にて書をさめたる、應照の

妙はいふも更なり、文といひ意といひ、賞するに詞なし、感服敬服、嗚呼寺入りの名にそむかざりしはあはれむべし、

「彌陀佛」 は極樂の法主「釋迦牟尼佛」 は印度淨飯大王の子、母は摩耶夫人、幼名は悉多太子、後にいふべし、

「六道能化の弟子となり」 よくいひたり、地藏尊の御弟子となるといふこと、六道は天上、人間、饑鬼、畜生、修羅、地獄、能化はよく

教化すること、地藏尊は六道能化の佛、

「賽の河原で砂手本」

よくうけたり、賽の河原で砂で字を習ふといふこと、

小兒の亡者は賽の河原の地藏尊の傍へ行き、河原に石を積み

て遊ぶといふ、これは昔百姓の葬地たりし、山城國紀伊郡佐比河原より思ひつきて、佛者の作れる事なりと、別記を見よ、

「いろは書く子をあへなくも」

よくつづけたりいろは書く子はなまなき子、あへなくもはまかなくも○「ちりぬる命」散るをかけたたり○

「明日のふたれか」夜誰をかけたたり○

「らむういめ見る」憂目をなかけたたり○「銀と死出のやまけこふ」山け越はなかけたり、銀の山は地

獄にありて、罪人を追のぼすといふ山、十王經に見えたり、悪行によりて、刺撃せらるゝ狀にたとへたるなりと○「あさゆめみし」浅き夢

見しにて、はかなき夢を見しといふ意、いろは歌とは反對なり、別記を見よ○門火は葬の時門にたく火、○「ふもせず」は醉もせずにて、門

火無明の闇を照して迷はぬといふ意か、かく解したる方、正しく思はるれど、或は興に乗じて書きたる句なるやも知れず、なほ考ふべし、「京

は故郷とかけたり、京は故郷なり、鳥部野は鳥野山ともいひ、京都清水觀音の西南にあり、名所圖會に「北は清水坂、南は小松谷を限る、

昔より諸宗の墓所なり、玉葉「分きへる袖の雫か鳥部野のなく／＼かへる道樂の露○此いろは歌は弘法大師の作といへど詳ならず、涅槃經

の四句の偈なる、諸行無常(色はにほへど散りぬるな)是生滅法(我が世誰か常ならん)生滅々已(有爲の奥山今日越えて)寂滅爲樂(淺き夢見

じ酔もせず)を今様に、同じ假名を用ひず詠ぜしものなり○此段文章の妙、趣向の妙、應照の妙、言語に絶す、千金の璧○いろは歌の事は別

記を見よ、

菅原傳授手習鑑

松王屋敷の段

總 解

此段は。出雲等が裏にせるを。後人の書き加へたるにて。譽むべき事にあらず。文は前作に比すべくもあらねど。さりとして捨てたるものにもなく。他に並ぶれば相應の出來なり。淨瑠璃芝居等に。頗る適するやう書きたれば。文學に乏しき者の眼より見たらんに。或は出雲等に勝れりと思ふ事もあらん。現時素人間に。頻りにもてはやさるゝは。此點與りて力あるべし。

松王屋敷の段

八重一重九重遠き」花

に八重一重あるをかされい
ひて、九重とつゞけたり、
謡曲田村に「八重一重、げ
に九重の春の空」九重は
天子の御所をいふ、又都を
もいふ、
「主人につれて云々」松
の縁より書く、三つ子の中
榮ゆるは松王のみなり、
「住居も奥深き心」とか
けたり、
「玄關」はもと禪家にて
客殿の入口の稱なるが、遂
に俗家にも正面の入口
を呼ぶに至る、
「主の威光を肩で着る素襖」
とは、面白く書きたり、肩
で風を切る、素襖は直垂の
少し變じたるもの、下に同
じ地、同じ色の長袴を用ふ、

松王屋敷の段

三重「八重一重九重遠き片邊り。新たに建し一構へ。庭の立樹
もおのづから。主に連て色艶も。今を榮えと松王が。爰に住居
も奥深き。心を誰か悟るらん。早玄關へ高提燈。主の威光を肩
でさる。素袍の色の花田より。鼻高々と入來たる時平の家來春
藤玄蕃。上座へむづと押直る。斯としらせに主の松王。病苦に
悩む額際。押てしづく出向ひ。詞や松王。是はく御上使と
有て。玄蕃殿御苦勞千萬。病中なれば略衣は御免下さるべしと。
一禮述べ。成程くハハハハ。詞病中なれ共。時平公より仰
付らる。其子細といつば。先達てより行衛知さる。菅秀才の
有家。今日訴人の者あつて。武部源藏といふやつ。北山芹生の
里に。筆道指南に世を渡り。我子として匿ふ由。が夫に付。未

又指貫と同じ仕立の、小袴を着する事あり、貞丈雜記に「鎌倉將軍の代までは其名聞ぬと見ゆ」花田より鼻高々」調をととのへたり、
 「額際押して靜々」とかけたり、
 「芹生の里」 寺子屋の段を見よ、
 「指南」 の語は、周の周公が作れる、指南車より出づと、伊賀越岡崎の段を見よ、
 「いつば」 はいふは、臺詞の語、
 「有難い主人の嚴命」 語面白し、
 「立聞く耳に打寄する云々」 浪の縁にてよく書きたり、立聞きに夫の心を知らず、心配するといふ意、
 「風を喰つて」 はうはさ

だ菅秀才の顔見知し者なきゆゑ。其方に見分の役仰付らるゝ。
 がいよゝ菅秀才に相違なくば。首にして持參せよ。コリヤ褒美には其方が。兼て申出せし病氣保養の願ひ。御聞届下さるか。又病氣本復次第。播磨の守になされふと。イヤモ有難い主人の嚴命。サ、ハ、ハ、ハ、早く用意を致されよと。いふを一間に女房が。立聞く耳に打寄する夫の心しら浪の。胸に漂ふ計なり。松王はつと頭を下げ。松ハアハアハ、有難き御意の趣。松王が家の面目。ヨモ此上なし。早速承知仕る。が病中なれば。萬事の手配り心に任せず。シテ其源藏とやらいふやつ。某討手に向ふを漏聞かば。風をくらつて落やらんも計られず。玄ア、イヤゝゝ其義はちつ共氣遣ひなし。高が浪人の瘦住居。取巻もぎやうゝし。松アイヤそふではござらぬ。恐れ多くも時平公の御威勢を以て。御詮義嚴敷菅秀才を。匿ふ程の源藏。ヤ油斷はならぬ。

を聞いて、

「油斷」の語は、南本涅槃十二に、王一臣に油の鉢

を持たしめ、若し一滴をこぼさば、汝の命を斷べしといへる由、見ゆたるより出

づとされど、ゆたにんの字を添たるならんといふ、説あり、

「式臺」は客を送迎する

玄關の板敷、

「何か心に一思案」身代

りの事を思はしめたり、

「麻に交る蓬といへど」暗

に己の正しき事を諷す、女

房には分らざるべし、荷子

に「蓬、麻中に生ず、扶け

ずして直し」と、兄弟直き中

の余、自ら直しといふ意、

玄ム、成程。 逸失なば我々が落度。 松左様でゐる。 貴殿御苦勞

には候へ共。 願くば夜の中に。 村の出口へ組子の御用意。 玄い

か様。 拙者は是より何角の手配り。 松然らば未明に同道せん。

玄萬事は明朝。 ハアハハハ。 松ハ、御苦勞千萬と。 互ひに目禮

式臺を。 悠々として立歸る。 跡打眺め松王は。 何か心に一思案。

明る襖を待兼て。 千代は夫の傍に寄り。 詞コレ申し。 今の上使

の様子では。 若君様の御有家。 慥に夫とされたれば。 討手の行

ぬ其先に。 ちつ共早ふ此内へ。 お迎ひ申す御用意をと。 せり立

女房。 詞ハハハハ、松麻に交る蓬といへど。 此松王が所存の程。

其方はよも知るまい。 コリヤヤイ。 北嵯峨の隠家より。 御臺を

奪ひ歸りしは。 菅秀才の首諸共。 時平公へ御目に掛。 官位の身

となる。 サ家の榮え。 女エ、スリヤ。 御臺様をお匿ひ申したは。

アノ時平様へお渡申す。 お前の心で有たのか松ヲ、サ。 年月望

「逸徹」 は一徹、一轍な
 ど書く、頑固に思ひ込んで
 動かぬをいふ、稻葉一鑑
 り出でたる語と、いかゞ
 「道に背いた天罪は云々」
 見せ物の口上 親の因果が
 子に報ひ「これ佛者の説く
 ところ、
 「涙に誠あらはせり」 思
 ふてかなはぬ女子の誠は、
 涙なるべし、繪本太功記に
 「操の鏡くもりなき、涙に
 誠あらはせり、」
 「せゝら笑ひ」 はあざ笑
 ひ、

みし身みの出世しゆつせ。今いまこそ運うんの開ひらき時とき。ア、ラ嬉うれしやハ、ハ、ハ、ハ。
 悦よろこばしやなア、ハ、ハ、ハ。始はじて聞きたる夫をの詞ことば。餘あまりの事ことに呆あきれ果はて。
 はら／＼涙落なみだおちかゝる。夫をの膝ひざに膝突ひざつきかけ。詞ことばコレ松王殿まつわうどの。エ、
 お前は／＼／＼なア。いつの間まに其様やうな。恐おそろしい氣きにはなら
 しやんしたぞいのふ。親御おやごの勘當かんだう。兄弟きやうだいに縁切えんきらしやつたの
 も。日頃ひごろからの逸徹故いつてつこと諦あきらめて。詫わづする時節ときせつも有あふかと。思おもふ
 女房にようばうの心こころに引ひかへ。マいかに出世しゆつせがしたい迎むか。大恩だいおんある御臺みだいさ
 まや。若君わかぎみを召捕めしとらて渡わたさふとは。お前は鬼おにか蛇じやかいのふ。道みちに
 背そむいた天罰てんばつは。お前計まへけいりか科とがもない。子こに報むくはいで何なんとせふ。
 どふぞ心こころを取直とりなほし。お二方ふたのお供ともして筑紫つくしにござる丞相様じやうせうさまへ。
 お渡しわたし申まうして俱々ともに。おちからに成なてたべ。拜おがむわいのと手てを
 合あせ。夫をを思おもふ眞實しんじつの。涙なみだに誠顯まことあらはせり。松王まつわうはせゝら笑わらひ。
 詞ことばヤアいらざる繰言くりこと。親兄弟おやきやうだいの縁切えんきれば。恩おんもなく又義理またぎりもな

「日影者」

は世に出られ

ぬもの、

「子にかへる寶は云々」 萬

葉に「白金も黄金も玉も何
せんに子にます寶世にあ
めやも」

「よまい言」

は世迷ひ言

の約、

し。日影者に涙をかけ。悴の出世を思はぬ馬鹿者。非義非道も

我子の爲。子にかへる寶はないわい。ノウ情ない事言しやんす。

それ程我子を思ふのは。御臺様も同じ事。人の歎きを悦んで。

出世した連それがまあ。なんの冥加がよからふぞ。身の行末を

思はずかと。いさめ歎けば。詞エ、又してもよまい言。無益の

繰言洩聞え。御臺を逃さは一大事と。かけ行裾をとどめる女房。

エ、邪魔するなと刎退突退一間の内へ入にけり。ハアはつと計

りに女房は。泣にも泣れぬ身のせつなさ。暫し絶入り居たりしが。

やゝ有つて顔を上。ア、扱もく淺ましや。年月連添ふ夫の心。

あれ程迄に悪心の。有ふ様はなけれ共。我子の愛にうばわれて。

恩も義理も打忘れ。鬼でもならぬ胴欲心。かういふ心と露しら

ず。おいたはしや御臺様。我々夫婦をつるよ柱と思ふてござる

を。胴欲にどの顔さげて。御臺様へ此世で顔が合されう。夫と

「一所に連れて死出三途」
 かく思ふなるべし、死出三途は冥途にありといふ山と川、十王經に見ゆたり「又一つには小太郎が云々」此場合さもあるべし、
 「果てし涙に九つの鐘は云々」我子の年の數に鳴る、一ツ／＼はこれ命をちぎむる無常の鐘、よく書きたり味ふべし、

一ツでない證據。申し譯に自害して。あの世でおわびを申します。御赦されてと身をふるはし。前後もわかず泣居たり。やう／＼に泣目を拭ひ。詞ヲ、それよ。迎も夫の悪心。直さぬ心としりながら。何にもしらぬ小太郎迄。俱に悪事を見習はせ。非業な最期をさせふより。一所に連れて死出三途。せめては夫をたのしみに。又一ツには小太郎が。此世になくば松王殿。心も折れて本心に。立歸つて下さらば。死でも嬉しう思ひますと。今死る身の覺悟にも。夫を思ふ心根の。果し涙に九ツの。鐘は我子の年の數。ちぎむ計りの憂思ひ。虫がしらすか奥の間より子供「コレかゝ様。奥にござるお客様が。呼んでこいとおつしやる。早ふ／＼と餘念なき。顔見るよりも悲しさの。涙吞込み／＼て女「コレ小太郎爰へおじや。サア／＼こゝへと引よせて。コレ今此母がいふ事を。マよふ聞きや。あの奥にござるお方は。

と、様やか、様のためには。大事のくお主様もおなじこと。

其お方をと、様が。殺さふと言恐ろしい心。モウそふ成つては此

母が。どふも生ては居られぬ。母もお供をするわいのふ。ガそ

なたは又と、様が。可愛がつて下さつたら。おとなしうして居

やるかやと。稚心を引て見る。無量の思ひ賢き子が。詞イヤく。

そんな剛いと、様と。ある事いや。か、様が死しやるなら。わ

しも一所に死たいわいのふ。チ、うれしいことを。よふ言てた

もつた。くくく。のふ。いやと言つても夫の爲。殺さにや

ならぬを聞分けて。死ふといふ心根が。エ、いちらしいわいの

去ながら。此子が死んだと聞てなら。悪人ながら松王殿。嘸ほ

いなかろ悲しかろ。斯いふ事の有らふはしか。櫻丸殿の菩提に

と。拵へ置た此幡が。我子の爲にならうとは。神ならぬ身のし

ら幡に。しるす六字の名號は。せめて此子の道しるべ。迷はぬ爲

「此子が死んだと云々」女
の連想、よろしくかくある
へし、心根いちらし、
「神ならぬ身の白旗に」と
かけたなり、

「ヤレ早まるな云々」 女

房の心を引見る爲め、心にもなき非道の言を吐き、其子を殺して共に死なんとする性根を見て、これを止め始めて本心を明して、身代りと切出す趣向、頗る上出来、

「倭人」 はわるもの、

「やはか」 はどうして、

と目を閉て。用意の懷劔拔はなし。既に斯よと見えたる後に。詞「ヤレ早まるな暫らく待てと。一間より御臺の御手を。しづくと上座へ直し。手をつかへ。詞ハ、恐れながら御臺様始め女房にも。某が心底嘸不審。今こそ明す本心を。物語らんと威儀を正し。詞扱も御家の没落より。時平公を主人と仰ぐも忌は敷。暇を乞請菅秀才の。御行衛を尋ね奉り。再び御家を興さんと。心を千々に碎けど。ナエ、情なや。皆倭人に一味のやつばら。御二方を隅々迄も。嚴敷詮議。つくく思ひ廻すれば。此松王斯て有るならは。お二かたにもしもの時。お助け申さん便りには。ヤ是究竟と夫よりは。猶更惡事に一味と見せ。勿体なや親人に。勘當請けて兄弟に不和と成しは。邪智深き主人に心を赦させん爲。詞然るに先刻主人の嚴命。菅秀才を見分の。役目を請し身の當惑。忠義一圖の源藏なれば。やはかむさく若君を。討て

「小太郎が面ざしの云々」
寺子屋の段に源藏「面ざし
似たる小太郎が首」とある
より書く、

「御臺は手を合せ」
いく
ら謝しても足らざるべし
「ほんそ子」
はいとし子
といふに同じ、父母の奔走
し世話するよりの稱、
「恩愛の心は一つ二道に」三
千世界に子をもつた親の心
は皆一つ、なるがゆゑに、

渡す所存はなけれど。多勢に無勢。もし若君に過ち有ては詮も
なく。兎やせん角やと思ふ中。先程御臺のお詞に。小太郎が面
ざしの。我子に似たとおなげき。シヤ是究竟の御身がはりと。
サ、思へどもしや女房が。愛に引れて妨げなば。いかゞはせん
と思ふより。心に思はぬ惡念も。我子の愛に引されて。出世を
望むと見せたるは。そちが心を引見ん爲。とはしらずして一心
に。我子を切て忠義を立て。夫の心を直さんとは。詞ヲ、適れ出
かした女房と。打てがはりし夫の義心。聞く女房がうれし泣。中
に御臺は手を合せ。忠義の爲に惡となり。たつた一人のほんそ
子を我子の爲に身代りとは。あんまり冥加恐ろしい。たとへ叶
はぬ際までも。討手を遁れ小太郎が。命はどふぞ助けてたも。
頼むわいのと恩愛の。心は一ツ二道に。からむ情ぞせつなけれ。
松王はつとひれ伏して。詞ハ、コハ有がたき御仰せ。がたとへ

己を推して二道の、人に及ばざるを得ず、よき句なり、

「假初ならぬ若君の云々」

寺子屋の段に松王「イヤ何源藏殿いひ聞かしてはおこしたれど」といへるより書く、

「心の張の弦切れて」

名

其場は落すとも。出口くは組子の大勢。遁れがたき御一命。コ
リヤ女房。覺悟の上は御身代りの。お役に立るに違背は有るま
い。ヤイ小太郎。ぐわんぜなく共よく聞分よ。假初ならぬ若君
の御身替り。大切の役目なれば。必共に未練な死を致すな。に
げ隠れなぞ致したら。とゝが子でないぞよ。若君の御爲親の爲
潔よく命を捨て。言教ふるも爺親の。肉も蕩くる不便さも。
忠義の爲と喰しはる。見るに目もくれ女房も。御臺も俱に聲を
上。わつと斗りに泣しづむ。心ぞ思ひやられたり。詞ヤ、をさ
なけれども健氣の覺悟。よしなき歎きに隙入つて。時刻うつれ
ば詮もなし。ヤ最早夜明にあいだもなし。某が出仕迄に。寺入
の用意せよ。サア早くく。アイエ、何をうじく。サ早くく。
アイ。あいとはいへど今さらに。心の張の弦切れて。力なくく
立上れば。詞コレかゝ様。そんならもふ行のかや。かゝ様譽て

「雛面」はしかみ顔、

「取出す小袖もかゝる身に云々」段中の名文一唱三

嘆、かゝる身になるとも知

らず、千年の齡を祝ひて染

上げし群、鶴の小袖を冥途

の晴着として旅立なしめ、

跡に子と思ふ夜の鶴の、は

かなき血の涙吞込む思ひい

かんぞや小袖に子をかけた

るか「なると白地」とかけ

たり、夜の鶴は白氏文集に

「夜鶴懷子籠中鳴」なほ後

にいふべし。

「六筋の涙明六つ」と調

をととのへたり、明六つは午前六時、

「鶏は憎くしと詠み給ふ」道明寺の段に菅相座「鳴けばこそ別れを急げ鶏の音のきこぬ里の曉もがな」とあるより書く、同段参照

「夫は出船の御名残、是は云々」尋常の筆にあらず、菅相座は筑紫へ流罪、小太郎は身代りの門出「愛別の、子の死顔に逢に行く」何たる

名句ぞ、あはれ身に浸みて覺ゆ、弘誓の船は佛の一切衆生を助けんとの誓をたとへいふ、愛別は愛別離苦とて四苦の一、

「空定なき云々」老少不定、下の松の縁より書く、

「一葉は枯れて云々」小太郎身代りとなりて、菅秀才の助かるをいふなるべし、

「影向の松」北野天満宮の入口右側にあり、神秘の由來ありといへど、未だ取調へず追て記すべし、

下されやと。稚心の立派さを。思ひやつたる爺親の。顔を背け

て皺面も。忠義の爲と諦らめて。取出す小袖もかゝる身に。成

としら地を染上し。齡ひを祝ふ群鶴も。今ははかなき夜の鶴。

泣音立じと女房も。御臺も俱に目にあまる。六筋の涙明六つの。

鶏は憎しと詠み給ふ。夫は出船の御名残。是は弘誓の船さして。

あの世へ急ぐ愛別の。子の死顔に逢に行。空定めなき一雫。枝

に洩さぬ涙の雨や。一葉は枯て又一葉。縁を残す影向の。松に

哀をとむむらん。

近頃河原の達引 堀川の段

總 解

お俊傳兵衛の墓は。京都東山清水坂の南。鳥部野日蓮宗なる一寺院にあり。此所鳥部山ともいひ。昔は諸宗の葬地なり。俊成が歌に。分けきへる袖の雫か鳥部野のなくくかへる道柴の露寺門を入り。右に折れて半町程。堀際に立ち。高さ二尺ばかりの白き自然石にして。面に

元文二己年十一月

妙 法 宗 秋 居 士
妙 宗 信 女

と刻す。結びし紙の多くさがれるは。縁結びの神とて。うら若き男女の。思ひを籠めたる願事なりとぞ。爲めに詣づるもの多く。香華

今に絶ゆる事なし。

住僧の話に「當寺はかゝる事に心ある住職のなかりしゆゑにや。記録も傳説も更になし。古き過去帳は土藏におさめあれど。必用もなければ見たる事なけれど。それより書拔けりといふ第二の過去帳に。兩人の年月と法名とを載せたり。今もお俊の遠族なりとて。年に一二回づゝ詣でゝ。香華を手向くる人あれど。住所は知らず。堀川邊にお俊長屋といふもの残りといへど。行きて見たる事なし。近頃縁起など勸むる人あれど。前述の如くなれば。筆の執やうなし」と事實の外に種々なる説話を傳ふべき寺にして。斯の如くなれば。何事も審に知りがたし。

第二の過去帳を見たるに。冒頭に載せありて。碑面に同じ。思ふに。これは古き過去帳より拔けるにあらずして。碑より寫せるなり。しかして。碑面の年號は情死の歲月にあらずして。碑を建てし時。

なるべし。しか知らるゝは。元祖都一中が。土佐座にて語れる興行。外題の中に。お俊傳兵衛河原の心中といへるあり。一中の死は享保八年にして。碑面の元文二年より十五年の前なれば。死後の心中を生前に語るべき筈なし。一書に正徳元年六月廿二日とあるは。一中の死より十三年前なるゆる年代の疑もなければ。これを正しとすべし。

此淨瑠璃は。天明二年江戸市村座にて演じ。大當りを得たるものを。全五年爲川宗輔筒井半二、奈河七五三助等が。淨瑠璃に作れるなりと。されど天明二年に。竹本八重太夫江戸に下りて。段尾の猿廻しを語り。大喝采を得たる由。俗耳鼓吹に載せたれば。其以前に出來上り居たるを。芝居に演じ。後爲川等が。少しく加筆せし位なるべし。作者といふに。足らず。さても淨瑠璃界名什の一にして。文章趣向共に卓絶したる。此篇の原作者を知り得ざるは遺憾と云べし。

堀川の段

「同じ都も世につれて云々」
 世につれて都に住むより、
 田舎が増しの細き簀しといふ意、
 「堀川」 は京を南北に貫く流れにして、これに沿へるを堀川といふ。今なほお俊長屋残りといへど、いづれか知らず、
 「操も立つ月日」 とかけたり、
 「琴三味線」 の由來は兜軍記琴責の段に委しくいへり、
 「指南屋」 は師匠の事、
 周の周公が作りし指南車に出づと、伊賀越岡崎の段に解せり、
 「間の手もつれ氣もつれ」と調を合したり、間の手は聲の絶の間に弾く手、

堀川の段

同じ都も世に連て。田舎が増の薄煙。堀川邊に住居して。後家の操も立月日。琴三味線の指南屋も。合の手縫れ。氣もつれを。保養がてらの薬風呂。煽ぐも我を濫團扇。目さへふ自由な暮し也。詞お鶴様嘸待遠に有らふな。そして何やらのさらへで有つた。ナ、それ鳥邊山。アリヤじたい心中事。會にでも彈のなら。お前は女の方。おしげさんは男の方。かけ合に諷がよいぞへ。ドレ、御繁様の代に。わたしとかけ合にうたひませうと。老手彈手もしほらしく。女肌には白無垢や。上に紫藤の紋。中着緋紗綾に黒縹子の帶。年は十七初花の。雨に霑るゝ立姿。男も肌は白小袖にて。黒き綸子に色淺黄うら。廿一期の色盛をば。戀といふ字に身を捨小船。どこへ取付島迎もなし。とりへの山は

「藥風呂」 風呂は焜爐こんろの類、

「焜爐も我を遠團扇」 さ

ても離れの貧乏神の遠團扇
「目さへ不自由な暮し」とは

よくいひたり、

「鳥部山」の唄は地唄と、

かにありて、今も唄へりと
鳥部山の墓に浮名をとどむ

る心中物に、鳥部山の唄を
うたはしむる趣向、頗る面

白し、

「老手彈手」 老て其老熟

なるを知る、

「女肌には白無垢」 とか

けたり、白き絹衣をいふ、

「上に紫」 といひて「藤

の紋」とつづけたり、妙

「さや」 ばさあや（紗綾

の約、綾に似て種々の紋を

浮織にす、

「黒縞子」 は多く帶地に

用ふ、縞子に入絲織と稱し

そなたぞと。死しに行く身みの後髪うしろがみ。引ひく三味線さんみせんは祇園町ぎおんまち。茶屋ちややの

やま衆しゅが色酒しきしゅに。亂みだれて遊あそぶさはぎ合あひ。あの面白おもしろさを見る時とき

は。イエ／＼夫こではとんと。聲こゑにしをれがないわいな。歌うたあの

面白おもしろさを見る時は。あの面白おもしろさを見る時は。詞ことばヨシ／＼。染そま

ぬそなたと某それがしが。去年こぞの初はつ去あき秋なな七夕はたの。座敷踊ざしきおどりをかこ付けて。

忍しのび逢あふた事思ことおもひ出いで。ヲ、今日けふはマアそこ迄まで。精せいが出でる程ほど

有あつて。きつふ手ても廻まり出でした。モウ／＼何所どこで彈ひきなさつても。

恥はづかしい事はないぞへと。聞きいて笑顔えがほの片男浪かたなみの。又明日あす日ひといふ

汐しほに。お鶴つるは立たつて歸かへりける。母ははを大事だいじと油斷ゆだんなき。身過みすぎも輕かろき

小風呂敷こふうしき。肩かたに乗のせたる猿廻さるまはし。戻もどりはいつも日暮前ひぐれまへ。與次郎よじろうは

息いきせき。門口かどぐちから。詞母者人は、じやひと今戻いまもどつたぞや。ヲ、兄あに戻もどりやつた

か。嘸さぞひもじかる。茶ちやもわいて有ある。膳ぜんもそこにして置おいた。ヲ

、徳とくよ。今戻いまもどつたか。今朝けさから小猿こざるめが。親おやを尋たづねてやかまし。

緯を經にかくして織る。
 「初花の雨にしほるゝ立姿」
 頗るの名句、うら若き女の
 物思ひに憫める狀、これ美
 中の美艶中の艶、情趣最も
 深き姿にして、男子の憫殺
 さるゝ處、長恨歌に「玉容
 寂寞淚欄干、梨花一枝春帶
 雨」又拾遺集に讀人しらす
 「櫻花露にぬれたる顔見れ
 ば泣きて別れし人を戀し
 き」
 「男も肌は白小袖」 とか
 けたり、いづれも白玉の如
 くなるべし、白小袖の事は
 別記を見よ、
 「りんす」 は綾子の唐音
 にて、綸子と書くは當字な
 りといふ、紗綾に似て厚く
 光あり、
 「廿一期の色盛り」 とか
 けたり、句よし、
 「身を捨小舟」 とかけ「取

ソレちやつと傍へやつてやりや。アイ／＼そうでござんしよ共。
 それちやつと乳を吞してやれ。イヤソワ與次郎。そなたが孝行
 にしてたもるに付け。わしが此永々の病も。いつ本復する事で
 有らふと思へば。勞の上には猶勞れる。纔な弟子衆の餘情や。
 わがみの働きで。此養生がマア成物かと。思へば藥も毒と成る。
 母ではなふて子供の爲には。呵責の鬼と思はるゝ。鬼は冥途に
 有る物を。つれなの老の命やと。身を悔みたるむせび泣。哀れ
 にも又いぢらしゝ。詞ア、コレ母者人。ソリヤマア何と云んす
 ぞいの。其様に密やかな身代じやと思はしやるか。此間弟子入
 した米屋の息子殿から。なが／＼お袋の煩ひで。嘸かし勝手も
 悪からふと云ふて。雪か花かと申す様な。上白米の仕送り。店々
 の旦那衆からは。何なと用が有るなら云ふておこせ。もし出養
 生さしますなら。幸な隱居所も有る程にと。云ふてくれるお方も

つく島」とつづけたり、縁の語よく書きたり、

「取つく」の調をうけて

「鳥部山」と書けり、名所圖會に「鳥部野、北は清水坂、南は小松谷を限る」昔諸宗の葬地なり、

「後髪引く三味線」とかけたり、後髪は心のあとに残るをいふ、

「祇園町」は祇園新地ともいふ、四條大橋の東、幾條の市坊を包括する稱にして、酒樓妓家軒をならべ、管弦の音晝夜絶えず、所謂京美人の巢窟なり、なほ別記を見よ、

「やま衆」はおやま衆、遊女をおやまといふ事は、若き女の人形をよくつかひし。小山次郎三郎より出でたりと、

「あの面白さを見る時は」

有り。羊羹饅頭生肴。近所隣へ早々すそ分もしられねば。鯛赤

貝の類は。横町の鮎屋へおろし賣。モコレ案じる事は微塵もな

いぞや。夫にまだくく氣の毒なは。此家主が此家を。居な

りに買てくれぬかと頼まれる。ヤレいやゝのく。ア、アお世

話な。家持よりは金持が。はるか増でも有ふかと。母に案じを

かけさせぬ。贅八百さへ一貫に。たらぬ節季の事譯を。いふ下稽

古や是なるべし。嘘とはしれど老の身は。子に隨ふがならひぞ

と。機嫌よげに打點き。詞ヲ、それ聞いて落付きました。落

付かぬは。娘が事。此間も親方が。おしゆんを預に來ていはし

やるには。コレ傳兵衛殿といふ客の事で。ちと内に置れぬ事が

有る。たとへ傳兵衛が尋てござる共。おしゆんが歸つて居る事

は。包隠さねば成ぬぞやと。くれぐれも云しやつたぞや。サア

わしも其入譯を聞いた故。おしゆんが心根を思ひやり。思はず

心中の道行に昔をおもひ出で、輪廻に迷はしむる趣向、よく出来たり、此鳥部山の唄は、誰れの作れるにや上乘の出来なり、

「七夕」は七月七日、此夜牽牛織女の二星、相會ふといへり、此時鳥鵲翼をひろげて、天の川の橋となり、以て織女を渡す由、淮南子に見えたり、かくの如く男女相逢ふにふざはしき夜なれば、淨瑠璃などに、戀の糸口の解けそめを、此夜に歸するか多し、委しくは後篇妹背山にいふべし、
「笑顔な片男波」は、笑顔に片まゝくばのおくないふなるべし、波の縁にて「明日と夕沙」とかけ「お鶴はたちて」とつゞけたる所、萬葉に見えたる赤人の歌「和歌の浦に沙みちくれば

しらず涙が。ドレマア燈を灯そと棚のすみ。こそく取出す行燈の。灯かけも洩る暖簾ごし。おしゆん。コレおしゆん。アイと返事もしほくと。思ひ惱じ顔形。マアく爰へと小聲に成り。詞門の戸はかけて有る。見る人も聞く人もない。方々で噂を聞くに。此間の川原の喧嘩。殺し人はサ。殺し人はわがみの客の傳兵衛殿なれど。大恩請た久八といふ者が。代りに捕られて往たげなが。其場に落て有つた小柄が。彼傳兵衛殿がお座敷から。拜領した小柄じやゆるゑ。てんめい遁がれず御詮義最中。なれ共。其夜から傳兵衛の行衛も知れず。其相方の女郎はおしゆんと云事は。お上にもよふ御存じで。親かたの方へも色々。御詮義が有れど。是も行衛がしれぬといひ切つて。今揉て有る最中じやと。取々の噂評判。おりやもふ聞く度毎にびく／＼すると。聞く程せまるおしゆんがむね。詞其夜の起りも皆わし故。

かたをなみ声べをさして田
 龜なきわたる」より書ける
 ものゝ如し、感服々々、かた
 ななみは「渴を無み」にて、
 波の名にはあらず、さるな
 後には、片男浪など書きて
 其形を盡き出すに至れり、
 別記を見よ。
 「身すきも輕き小風呂敷」面
 白し。
 「德」は親猿の名、徳兵
 衛の役をたとむるゆゑなる
 べし。
 「こんしよ」 はござんせ
 う、
 「餘情」はお陰の意、
 「子供の爲めには呵責の鬼
 云々」此の心にて非業
 の死を遂ぐる親、世間に往
 々あるは、あはれむべし、
 呵責はせめさいなむこと、
 「みそやか」は貧しき意

どこにとふしてござるやら。心元なき逢たさも。云にいはいれぬ
 此場の品。いかゞと胸もふさがりし。母は一途に娘の可愛さ。
 詞コレくおしゆん。何にも案じる事はないわいの。併突詰た
 男氣で。ひよつとこちの内へきて。双物ざんまいでも仕やせま
 いかと。四五日は夜の目もろくに。ねられぬ儘の物案じ。世間
 にたんと有格な。心中や忤してくれたら。此母は目かひは見え
 ず。兄はアレあの様な臆病者。もしもの事が有つたらば。跡で
 母はどうせうぞ。袖乞物貰ひに歩行ても。そりやモウ一ツもい
 とやせぬけれど。そなたの體に凶事でも。有つたらおりやもふ。
 直に死んで仕舞ぞや。若い氣に跡先思はず。義理じや。イヤ人
 の落目を見捨てはと。詰らは義理を立拔て。年寄の此母に。マ
 つらいめ見せてたもんなやと。可愛さ餘る親心。ア、南無あみ
 だ佛も泪聲。兄も俱々ヤコレお俊。詞今母の云るゝ通り。なん

「此間弟子入りした云々」

與次郎が天性の孝心、よくあらはれたり、かゝる嘘は釋迦も孔子もゆるし給ふべし、

「すそわけ」 は餘りを分配すること、小町踊に「四方山の裾分けするや不二の雪」

「家持よりは金持」 詩を作るより田をつくれ何某よりも金貸がよしの句、思ひ合されてをかし、

「贅八百も一貫に云々」の句最も妙、嘘も世の實とはこれらなふなるべし、

「老の身は子に従ふか」 老ては子に従ふ、これ婦人三従の、

「返事もしほくと」 とかけたり、

「小柄」 は脇差の鞘にさし添へて置く小刀、

の義理もへちまもいらぬ。どいて仕廻ばあかの他人じや。又おれも氣にかゝつて。好の物さへ咽へ通らぬはいのふ。母者人の氣休め。おれが腹助じやと思ふてどいてたもや。コレ頼むくと正直一遍。母の心と兄の詞。勿躰ないとは思へ共。切るに切られぬ胸の内。所詮死なねばならぬ身の。此場を抜て其上でと心一ツに思案を極め。詞母様兄様お二人のお詞。よふ合點致しました。殊に又傳兵衛様。つい一通りで逢ふた客。深い譯でもないわいなア。しかし勤の習ひにて。人の落目を見捨てるを。里の耻辱とするわいな。逆も末の詰らぬ事。わしや得心しておりまする。詞ちよつと逢ふて其上で。憎し悪しもない様に。得心をさせまして。品よふ譯の立様に。詞イヤ。其様に譯立てるといやつても。あつちに得心せぬ時は。それく行がけの駄賃馬で踏殺し。ア、イヤ。無理殺しにせうもしれぬわい

「天命遁れず」は自然のむくひ、いかんともしがたきないふ。
 「品」は場合といふ意、「双物三昧」は双物騒ぎ（三昧はもと佛語、心を其事に専らにするをいふ）
 「袖乞ひ」物もらひになるも厭はぬが、そなたの體に凶事があつたらと、底ひも知れぬ母の慈愛、諸共にと死を極めたるお俊は、身もよもあられず、
 「母は子の爲めに」つまらぬ義理といふ、これお俊には最も重き義理、
 「義理もへちまも」糸瓜の皮といふより出づ、糸瓜の皮は不用のものゆゑに、うち捨つる意にていふかとおもひしに、物類稱呼に「ヘチクワンが馬の革の一駄袋」といふより出づ、とい

の。コリヤめつたにはかみ合されぬはいの。サ、兄のいやる通りじゃ。そなたに怪我でも有つては。傳兵衛殿とやらも難儀。思ひ切るのがあつちの爲。サ、あつちの爲。わがみに心引かされて。つい捕へられるはしれた事。退状をやつたら。そなたの事も思ひ切つて。サ、切る共く。遠い國へでも影を隠したら。身を遁れまい物でもないわいの。コレく。むづかしかる共ツイ一筆。兄硯箱取つてやりや。サ、早ふくと母と兄。詞に否も泣顔を。隠す硯の海山と。重なる思ひのべ紙に。筆の立どの跡やさき。涙に墨のにじみがちなる胸の内。書残すとは露しらぬ。與次郎は傍から。詞コレノコレ。其様に長たらしう書ず共。ツイどきますと書いても。濟そうな事じゃ。イヤノウ。書いた物は跡々迄も残る物。男の去状と同じ事。とつくりと譯の分かる様に。書いてやるのがよいぞや。アイ此狀にとつくりと。御合

へり、されど何の事とも分らず、

「あかの他人」はさつぱり

と縁なきをいふ、但言集

覽に「赤は乾淨の義にて、

親屬ならざる人をいふ」と

見ゆ、

「腹助けじや」咽へも通

らぬの語に應ず、

「人の落目を見捨つるを」

耻とするは昔の事、今は後

足で砂なるべし、昔は客種

のよかりしゆゑにや、名妓

には歌俳偕などの嗜みもありて、世にもばやさるゝ

名吟も多く、茶花などのみ

やびたる心得もありて、何

人の相手にもはづかしから

ず、且女郎花のやさしき中

に、達引といふ、折がたき

操ありてゆかしかりき、今

は容貌のみにて、心のやさ

しさを買ふ客もなく、情け

點の行様に。兄さん此文。お前からお渡しなされて。ナツトよ

しく。此さへ有れば千人力じや。マアく。母者人も落付し

やれ。とやかくいふ内九ツまへ。お前も奥。サ、もふ寐や

んせ。ナ、ソレく。今夜こそゆつくりと。心よふ寐るで有ら

ふ。兄もそなたもそこに寐やと。奥庭もなき隔をば。押明けて

こそ入にける。詞サアおしゆん。こちらもこゝで往生いたそ。

アイとおしゆんがともくくに。暫し此世をかり蒲團。薄き親子の

契やと。枕につたふ露なみだ。夢の浮夜と諦て。更行く鐘も哀れ

添ふ。頃しも師走十五夜の。月はさゆれど胸の闇。過し別の云

かはし。死ねば一所と傳兵衛が。忍ぶ姿のしよんぼりと。イむ

軒は目覚えの。慥に爰と門の戸へ。さはる相圖の咳ばらひ。聞

くにお俊が飛立つ思ひ。上げる枕も打はず。與次郎は傍に高

軒。心も俱に行燈の。灯ふき消指足に。心せく程明け兼る。戸

を賣るのみにて、さる嗜みある女郎もなし、文明と共に、情慾も薄情も進むにや「行かけの駄賃馬」は其事を主とするにあらで、駄賃的になし行くをいふ諺、下の「かみ合はされぬ」の語、これに應ず、
「怪我」は傷つくこと又過失などの意、和訓栞に、けがれ(機)の略なりといへり、俚言集覽に「往年下總國銚子浦へ、漂着の清人あり、其邊の醫師を頼みて、筆談せしむるに、船中無怪我耶と書きて出したれば、答に奚怪我と書きたり云々」さもあるべし、
「否も泣顔」とかけたり「硯の海山」「思ひ延紙」「立どの跡や先『墨の』にじみかちなる胸の中」など皆かけ詞と縁の語にて書き

口の饌表にも。おしゆんじやないか傳兵衛様。よふ逢に來て下さんしたと。云聲寐耳に與次郎が。恠り起ると明くる門の口。妹が姿もくら紛れ。捕へる袖の振合せ。お俊と心得傳兵衛を。無理に引込取違へ。戸口を内からびつしやり引立。詞ソリヤこそ突に來おつたぞ。お俊必外へ出まいぞや。戸口はおれが押へて居る。ヤア、門に居るは傳兵衛じや。儕を入れてよい物かと。いふもがたぐ胸ふるひ。詞コレイヤア兄様。わしや表に居るはいな。何じや表に居るはいな。ヤア其聲色置てくれ。そんな事喰おれじやないわい。母者人く。傳兵衛がおしゆんを殺しに來た故。今表は立出した。おれ一人では手が廻らぬ。こなたも加勢して下され。加勢くくとうろくく。狼狽騒ぎ母親は。何じやく。傳兵衛の加勢。ム、また外に同類でも有るのかと。探り寄つたる傳兵衛が傍。詞コレコレおしゆん。震ふ

下せる名文、味ふべし。
「ツイどきます」 退きま
すの訛、此句與次郎が、質
朴にして單純なる考へ、寫
し得て妙。
「これさへあれば千人力」
これ與次郎が金城鐵壁、
「往生いたす」 は寢るこ
と、面白し。
「しばし此世をかり蒲團」
とかけ「薄き親子の契り」と
つづけたり、はかなき身に
しみて覺ゆ「枕に傳ふ露涙、
夢の浮世と云々」あはれさ
いはんかななし、一誦、三
嘆の妙句、
「師走」 は陰曆十二月の
異名、歳果つの略とも仕果
つの訛ともいふ、
「月はさゆれど胸の闇」よ
き句なれば、よく用ひらる
「ともに安堵」 を行燈と
かけたり、

事はない。兄や母が付いて居る。マア氣を鎮みやと撫さする。
背の手さはり合點行ず。詞「コレ」與次郎。どふやらこりや娘
ではない様なはいの。ヤアくらがり紛れに材木が。紛れ込みや
せぬかや。こなたつかまへて居て下されやと。探る手先に火燧
箱。がちくふるう附木の光り。詞「コリヤ妹じやない傳兵衛じ
や。お袋エ兄御。エ、面目も無此姿と。猶も小隅にかゝみ居る。
詞「コリヤヤイコリヤ。其様にしほくとして見せて。おいらを
欺して。おしゆんを突ふとするのか。其手は喰ぬと懷より。一
通取出し。こはくながら傍に寄。詞「コリヤ」傳兵衛。おし
ゆんと我と手が切れぬと。科人のわれじやによつて。妹迄難義
する。それでさつきに妹に得心さして。とき狀が書してあれば。
コレ是を見い。是じやによつて。モウくくおしゆんが方に。
殘心氣は離れて有るわい。ム、スリヤおしゆんが。其退狀を。

「捕へる袖の振合せ」 味ふべし、
 「ソリヤこそ突きに云々」
 與次郎が臆病の狀、見るが如し、
 「材木が紛れ込みやせぬか」
 これ人違ひをいふ、語頗る面白し、
 「母をお袋」 といふ事、
 袋にたとへたるなりと、又ふところの轉略なりと委しくは己にいへり、
 「殘心氣は離れてある」とは、與次郎がむつかしき熟語、いひ得て妙、
 「祐筆」 とは與次郎が無筆、貞丈雜記に右筆と書くが正しき由いへり、別記を見よ、

サアどき狀じや。エ、其心とはしらず。云かはした詞を誠と思ふて。迷ふて來たが無念なはい口惜いと。齒を喰しはる男泣。恨を聞くも隔る戸口。心はそふじやないじやくり。詞ヲ、嚙腹が立ふ。道理じやく。マアくくつくりと氣を靜めて。退狀を見て下さんせいなア。ヲ、それでよい。長ふ物云やんな。くずが出るぞ。コリヤく傳兵衛。おれが讀できかしたふても。かいもくをれは。ナニヲ、祐筆。祐筆じやわい。サアく早ふと封じめ切。突付けられて目に溜る。泪を拂ひ。詞ナニ書置の事。ヤア何じや書置じや。ヤレく兄正直な。悔りする事はな。いわいの。そなたは無筆わしは盲目。書置じやと讀違へ。狼狽さして門へ出。娘を存分にせうとの工。ハハハハ。そんな嘘はくひませぬ。サアくほんまに讀しやれ。くくく。與次郎。表の娘に氣を付けて。門の戸を明きやんなや。ヲ、吞込

「聞く事は無筆でない」と
は、どこまでも面白し、

「海山にもたとへむたく」

童子經に、父の恩は山より
も高く、母の恩は海よりも
深し、

「二世」は夫婦の意「親
子は一世、夫婦は二世」

「風が變つて來た」驚く
も尤も「ちやつと讀んで下
され」語調改まれり、萬事
一變、

んで居る。爰にはおれがへ、へばり付いて居るわい。サアく
く。早ふ讀やい。物こそよふ書ね。聞く事は祐筆。ナニ無筆
じやないわい。サア讀だくく。エ誠は是迄の御養育。海山
にもたとへがたき親の御恩。殊更ふ自由なる御身の上。何とぞ
首尾よふ動を遁れ。世を樂に過させまし候はゞ。せめて少しの
御恩ほうじ。孝行の片はしにもなり候はんと。夫のみ朝夕祈
りくところ。二世と迄云かはしり傳兵衛様。思はぬ此度の御
身の難も。根を尋れば皆我故に候へば。今更見捨候ては。女の
道立申さず。不孝とは思ひながら。俱に覺悟を極り。ナ、
母者人。どふやら風が替て來た様な。サイノウ。わしも胸が
どきくと。さア其跡を。ちやつと讀んで下されく。エ、俱
に覺悟を極り。先程傳兵衛様へ退狀と申して認めしは。此事
申上げ度儘。退狀と偽り書殘し參せ候。何事もく。前世より

「無理に四人」詞も傳兵衛とかけたり

「そりや聞いませぬ傳兵衛さん云々」一口淨瑠璃に大關の位置をしむる有名な文句、これ平易の語を以て深くこまかき人情をいひつくし、調極めてなだらかにして、諷詠の間よく人を感じせしむるが故なるべし、すべて淨曲の長所はこゝにあり、朝に吳客を送りて別れ

の定り事と。御諦下され候。申上げ度數々は。筆にも盡しがたう候へども。心せく儘申入り。ナ、ナ、ナ。扱はそうした心かと。驚く傳兵衛親子はうろく。詞エ、氣遣ひな。コレ兄や。娘を内へ早ふくと。母があせれば與次郎も。戸口を明けければ走寄妹を無理に四人が。顔見合して溜息の。泪は更に分ちなく。何と詞も傳兵衛。泣く目を拭ひ。一旦云かはした詞を立。俱に死ふと覺悟して。義理を立拔そなたの貞節。忘れはせぬ嬉しいぞや。思ひ廻せば廻す程。我こそ死なで叶はぬ身。そなたは科のない身の上。俱に死んではお二人の歎き。命存生なき後の。とひ吊ひを頼むぞと。詞にわつと泣出し。そりや聞えませぬ傳兵衛様。お詞無理とは思はねど。そも逢かゝる始めより。末の末迄云かはし。互に胸を明し合ひ。何の遠慮も内證の。せはしられても恩にきぬ。ほんの女夫と思ふ物。大事のく夫の難義。命の際

を惜み、夕に越客を迎へて
嬋を呈す一雙の玉腕は千人
の枕に供し、一片の朱唇は
萬客の嘗むるに任す、起き
伏し定まらぬ川竹の状態か
くの如くなれば、情を専ら
にせんと欲するも、施すに
處なし、遂に習ひ性となり
て、容姿、秋波、巧笑、阿
諛、虚言、空涙、等あらゆる
魔器を弄して世の輕薄男
兒を墮落せしめ、以て己か
技倆を誇るに至る、故に俳
句には「手に取るな」と詠
ぜられ、情歌には「女郎の
誠」と謡はれ、たま／＼眞
心を吐くとも、人得て信ず
るものなし、此社會にあり
て、お俊の如く情を盡し義
を立つるものは、泥中の蓮
荊棘の芝蘭、昔はなほ得べ
し、今に至つては見る可か
らず「大事の／＼夫の難義

に振捨て。女の道が立物か。不孝共惡人共。思ひ諦コレ申し。
一所に死なして下さんせと。隠せし剃刀取直す。詞マ、マ、マ
ア待て。待をれやい／＼。コリヤ／＼イ。是で死ぬると命が
ないぞよ。コリヤマア何のことじや。とんと分からぬ様に成つ
てきたわい。殺しに來たと思ふた傳兵衛殿より。今ではわれが
方が手強ふなつたぞよ。コリヤマアどうしたらよからうぞと。
云もおろ／＼母親も。詞ナ、そうじや／＼。我子や可愛い／＼と。
子故の闇に脇ひら見ず。是迄おしゆんがお世話に成つた。恩も
義理も辨へず。一圖に中を引分けふと。思ふた母は義理しらず。
賤しい勤する身でも。女の道を立通す。娘の手前面目ない。そ
なたの心に恥入つて。何事も云ませぬ。傳兵衛様と一所にの。
コレ死出の道連れ仕やいのふ。したが是申し傳兵衛様。定めて
親御様達もござりませふが。親の心といふ物は。人間は愚。譬

云々」烈婦節女もこれに外ならず、

「これで死ぬると命がないぞよ」尤も千萬「とんと

分らぬやうになつて仕まつた」五里霧中たらざるを得ず、

「脇ひら見す」はあたり

かまはずの意、俚言集覽に

「側邊等不見」の義、らに助詞なり「そばひら見すの猪武者」と、長門本平家物語

に見ゆ、とあり、

「死出の道連」は冥途の

道連の意、死出は冥途の入口にありといふ山、十王經

に見ゆなり、後にいふべし「親の心といふものは云々」

以下恩愛の情を寫し得て餘す所なく、覺ゆす落涙した

り、
「お俊傳兵衛と云々」心中して名をうたはるゝをいふ

鳥類畜類でも。子の可愛いにはかはりは無い物。おしゆん傳兵衛
 といはず氣か。若やお前が死なしやつたと。親御様達が聞かし
 やつたら。悲しうてく。此世に残つて居る氣は有るまい。何
 國いかなる國の果。山の奥にも身を忍び。どふぞ遁れて下さり
 ませ。娘が心に恥入つて天にも地にもかけ替ない。可愛我子を
 心中に。合點仕てやる親心。爰の道理を聞分けて。コレ拜みま
 す頼ますと。手を合したる母親の。子故に迷ふ闇のやみ。二人は
 何と詞さへ。涙に涙結ぼるゝ。血筋の別れ與次郎も。涙の雨の
 古布子。袖喰しぼりしやくり泣。ア、傳兵衛様の泣かしやるも
 道理じや。又おしゆんの泣やるも道理じや。詞母者人。こなたの
 泣かしやるのも猶道理じやく。道理じやくくと。云て居て
 はねつからはつから。いつまでも分らぬ道理じや。詞ガコレ傳
 兵衛様。母者人が今の詞。御合點が参りましたか。エコリヤ。

「闇の闇」涙と涙」 相應
 「結ばるゝ血筋の別れ」よ
 くいひたり、
 「涙の雨のふる布子」 頗
 る面白くかけたり
 「道理づくし」 最も妙、
 「お初徳兵衛」 の心中は
 元禄十六年四月二日にして
 同年五月七日、曾根崎心中
 として竹本座の興行に上れ
 り、これ近松巢林子（門左
 衛門）が世話浄瑠璃の始め
 なりといふ、後若竹等の曾
 根崎模機、半二の往古曾根
 崎村噂等出でたり、
 「あろかいな、さんな、又あ
 るかいな」 猿廻しの調子
 なるべし、
 「顔眞赤にして」 さるへ
 「そびらす」 はすれずに、

われも得心してくれたか。合點が往たか。サ、合點したら
 ば。どうぞ此場を立退く分別。併其形では人目に立。京の町を
 放れる迄。此編笠で顔を隠し。幸の猿廻し。健で二人が末長う。
 目出たふ女夫に成とげる。門出の祝ひに此與次郎が。お初徳兵
 衛が祝言の壽。こなた衆も生別れの盃。イヤ、祝言の盃と。
 祝ひ諷ふも聲ひくに。お猿は目出たやな。智入り姿ものつしりと
 く。詞コレ去とはく。ノウ有ろかいな。さんな又あろかい
 な。詞ヲ、徳兵衛様ござんせ。餘りこな様が來やうが遅によつ
 て。お初様は顔眞赤にして。腹立て居やんすわいの。コレお初
 様。智様が盃を仕たいといのふ。機嫌直して盃を戴かんせ。コ
 レくくく。いたぐくノウ盃を。さんな又有ろかいな。詞ヤ
 コレく智様。足で盃をさすは。餘りつれない。夫では嫁御様が。
 戴かんせぬわいのふ。ひぞらずと。ほんまにさしてやらんせ。

「猿の日和見」
る藝

はよくす

「此猿廻しの所」 天明二
年竹本八重太夫江戸へ下り

そふじや／＼／＼。そこでお初がいたゞいた物じも。コレ
戴くいたすのふ盃さかずきを。さんな又有ろかいな。コレ嫁御よめごの晝寝ひるねも轉ころりと
せい／＼。ナコレ有ろかいな。さんな又有ろかいな。詞コレ
／＼聲こゑさま。餘あまりつれなふさんすによつて。おしゆんや。あの
嫁御よめご様が起さんせぬわいの。そこらでちよつと起おきしたり／＼。
エコリヤ、コリヤヤイ、コリヤ。去とは／＼。ノウ有ろかいな。
さんな又有ろかいな。起おきたら互たがひに抱付だくきやれ。ナ、それで機嫌きげん
が直なほつたぞ。エ、有ろかいな。さんな又有ろかいな。くる
りと返かへつて立たりな。立つてくれ。コレ／＼／＼立たしやませ。つ
いでに日和ひよりを見てたもれ。ア、よい女房にようばうじやに／＼。ノウ有ろ
かいな。さんな又有ろかいな。日和を見たらば落おちてたも／＼。
ナ、そふじや／＼／＼。お猿さるは目出たや。目出たやな。詞サ、
／＼きり／＼此家を猿廻さるまわはし。まさる目出たふいつ迄も。命全いのちまうたふ

て語り、大評判を得たりと俗耳鼓吹に其文句を載せたれど、今の五行本とはいさゝか異なれり、猿廻を付けて「まさる」といひ猿をふくめり

仕てたもと。目は見えね共。見送る母。詞も此世で聞納め。心の内の暇乞。あすの噂と形振も。やつす姿の女夫連。名を繪草紙に聖護院。森をあてどにたどり行く。

「噂となり振り」名を繪草紙に聖護院とかけたり、繪草紙は繪入りの人情本、

「聖護院の森」は上京區岡崎の西南隅にあり、聖護院の鎮守熊野神社の森にして、昔は古木の茂れるを以て名高かりしも、今は境内もせばまり、其名残ともいふべき大樹、あたりに數根あるのみなほ別記を見よ。

傾城戀飛脚 新口村の段

總 解

梅川忠兵衛 大阪の最中なる。船場淡路町の出來事なれば。何か面白き傳説もあらんかと。其道に名ある二三の士に問合せたるも。當時同町に飛脚屋ありし位の事外。得る處なし。案ずるに忠兵衛が大和新口村の生れにして。飛脚屋龜屋へ養子にもらはれ。京都生れの梅川なる女郎に上せて。官金を消費し欠落せしが。遂に捕はれて刑に處せられし事は。信なるものゝ如し。或はいふ梅川は無情の女にして。忠兵衛はだまされしなり。彼れが刑に處せらるゝを見て。平然たりしゆゑ。人これを憎めりと。何事も今知るに由なし。くさくさの巷説は。多く淨瑠璃より孕み出せるものなれば。取調ぶる價值もなく。又或る所に忠兵衛の遠族ありと聞及べ

ど。當にはならず。要するに世話物の如きは。其事實の著名なるにあらずして。其著作の著名なるがゆゑに。後世に傳はるものなれば。事實は失せて知れざるもの多し。古來數ある心中の中に。たまた有名なる戯作者の筆に上りて。其名のみにても百世にとゞむる事を得たるは。彼等の仕合といふべきのみ。

「奈良の旅籠屋三輪の茶屋云々」これ近松巢林子〔門左衛門〕の句にして。誰知らぬものなし。忠兵衛の遊び茶屋といへる。三輪の武田屋は。これより孕み出だせるものなるが。奈良に旅籠屋の湧出さるもをかし。武田屋は。先年大和地方漫遊の途次一泊したれば。其見聞せし處を掲げて。一笑に供せん。

武田屋 大和國磯城郡三輪町。三輪明神一の鳥居前にあり。旅宿兼料理を業とし。新口村は其西方一里斗り。それに通ずる街道を新口街道と稱す。武田屋の裏座敷に二階三間あり。其一間は即ち忠

兵衛が梅川をつれて大阪を駈落し。奈良よりこゝに潜みて。遣ひ果せし座敷なり。床柱は南天にて。周圍まはり一抱ひとかたへにあまり。穴ありて人くゞり得べし。忠兵衛此穴に隠くれて。捕手を脱れたりといふ。これをくゞれば中氣に罹らずとて。近村の翁嫗尋ね來りて。座敷を見せてもらひ。穴をくゞるものあり。著者これを見たり。これ忠兵衛の忠の字より。思ひつきたる事なるべし。有名なる金閣寺夕佳亭の南天床柱は。此木の小枝にも及ばず。さても大なるものかな。天下無双と謂ふべし。隣室の床柱は。凹みたる節だらけの木にて。これは三輪より南方に當り。笠神といへる里あり。こゝに小野小町がのたれ死せし處ありて。其邊より生ずる木なりと。故に其節皆陰部の形をなすとは可笑し。湯殿の傍そばに蘇鐵そてつあり。實生みぶの蘇鐵と稱す。これは忠兵衛酒癖の惡き男ゆる。梅川之を案じ。蘇鐵の實を酒に入れて。飲すれば酔はずとて。常に袂たもとにせしを落せしが

生ぜしなりといふ。さて主人の話に。同家の隱居は此事蹟につき委しく心得居たれど。前年身まかれり。我れは只其一二を聞きたるのみなれば。詳細は知らず。忠兵衛梅川は。此座敷に潜み居て捕手をさけ。或る雪の夜半暇乞の爲め。親に逢はんと忍び出で。途中の家にて面會せる狀は。芝居にてなすが如しと。こゝに至りて聞くの用なし。同家に二の口村より來れる下婢あり。之を呼びて尋ねたるに。兩人の碑とて。圓形にして高さ二尺ばかりの石塔二基あり。毎年八月廿四日に祭禮ありて。氏子より酒食を靈前に供へ。參詣の者に之を振舞ひ。なか／＼賑かき祭なり。忠兵衛／＼と騒ぎ立つるゆゑ。如何なる豪き人かと思へば。大阪の飛脚屋との事なりといへり。かくの如き答なれば。碑文傳説等の事は。到底知るまじくと思ひ問はざりき。此旅行は三輪より多武の峯に上り。吉野に出でしゆゑ。二の口村は後日の事として見舞ざりしが。其後

多忙にして遊ぶを得ず。なほ面白き事の手に入らば。後篇に載すべし。

川柳に「上方の駄落^{かひお}ちだけに二分残し」江戸っ子の惡口なるべし

此淨瑠璃は菅專助。若竹笛躬の作といへど。畢竟近松門左衛門が。正徳元年三月五日。竹本座の興行に上せし「冥途の飛脚」を聊か改刪否其まゝともいふべきものにて。趣向は勿論。名文句は皆彼の作なれば。其名譽も彼れに負ふするを至當とす。專助は京都の人。醫師の子にして淨瑠璃を好み。豐竹光太夫と稱す。即ち太夫にして作者をかねたり。笛躬は大阪の人。通稱は藤九郎。人形遣ひにして作者をかねたり。いづれも豐竹座につとむ。

新口村の段

「節季候だいく云々」節季候の句調、節季候は節季にて候の意、徳川時代歳の暮れに、笠を被り面を包み歌ひ踊る一種の乞食、
 「水飲百姓」は小作する貧苦なる百姓、穀物を食し得ず、水を飲み居るといふ意なるべし、
 「つこど」は俗にいふけんど(饑食)の意、
 「いどい」はひどいの詛「てい古手買」のていは呼聲の發語、
 「勝手」は便宜の意より轉じて案内、
 「あほう」は間抜けといふに同じ、昔秦の始皇帝大なる御殿を阿房といふ處に建てしに、人民がこれを阿房宮と呼べるに起るとい

新口村の段

詞節季候だいく。だいくは節季候。おめでたいは節季候。通らしやれく。親方衆と違ふて。こちとらは水呑百姓。こなた衆にやる米はないわいのと。つこどに云れ。詞こりやいどい。いかさま貰ふ節季候より。内の様子はせく候と。逝ぬれば女房は糸ぐるま。正月迄は休まうと。納戸へ取込みおうへの塵。掃出す表へ。詞てい古手買紙屑。お内儀様紙屑はないかな。チ、いやな人じやわいの。京や大坂と違ふて。在所に紙屑はない物じや。勝手しらぬ人じやそうな。町へ出て買つしやれ。あほうな人と笑らはれて。つぶやきながら見過しく。歸る程なく同行二人。ふだらくや岸打波は三熊野の。那智のおやまの詮義とは。人目にそれと白木綿。禪衣かけて順禮姿。お鼻様。火を

へり、されど詳ならず、
「ふだらくや云々」これ

那智を詠ぜし順禮歌、其意
は後篇の阿波の鳴戸に説く
べし、

「三熊野」は熊野三山、

即ち本宮、新宮、那智の稱

(もとみ)はめて添ふる語
なるを、三と書けるより、

かく稱するに至れるなるべ

し三吉野も然り、

「那智の御山」を「おや

ま」とかけたり、那智は紀州

東牟婁郡にあり、西國三十

三觀音第一の札所。おやま

は女郎のこと、前に解せり

此詮義の爲め、皆姿をかへ

て入込めるなり、

「人目にそれと白木綿」と

かけ「禪衣(あひづる)かけて」とつ

けたり、おひづるは巡禮の

衣、白木綿にて作る、笈擧

の義なるべし、奈留別志に

一つ借つしやりませ。爰は何といふ所かな。爰は大和の新口村。

煙草の火は出しませぬ。手の内も法度でござんす。ア、けんどん

な在所だなど。家内をきよろ／＼ねめ廻し。次の村へと出て行

く。詞ほんにけふ程。うさんらしい者のたんとくる日はない。

納戸這入も成るまい。ドリヤ夕飯のこしらへと。竈の前に差か

ゝる。落人の。爲かや今は冬がれて。すゝき尾花はなけれ共。

世を忍ぶ身の跡や先。人目を包む頬かぶり。隠せど色香梅川が。

馴ぬ旅路を忠兵衛が。いたはる身さへ雪風に。凝る手先懷に。

あたゝめられつ温めつ。石原道を足曳の。大和は爰ぞ古郷の。

新口村に着けるが。詞コレ爰は。わしが生の在所。四五丁行け

ば實の親。孫右衛門殿の所なれど。不通といひ繼母なり。殊に

今の身の上を。お目にかけるは大きな不孝。此わらぶきは忠三

郎といふて。親達の家來も同然。マア／＼爰へと門の口。詞忠

「秘の字を讀違へたるなるべし」といへどいかゞ。順禮の始めは大和長谷寺の開山徳道上人（聖武天皇頃の人にして、花山法皇中興し給へる由、冥應集に見ゆ、委しくは阿波の鳴戸にいふべし）。

「新口村」 は大和國磯城郡、三輪町の西一里強にあれ。「火は出しませぬ」は煙草の火より早鐘をつく用心なるべし。

「手の内」 は志しの意（施しにいふ）。

「法度」 はおきての意より轉じて禁制、

「うさん」 は胡散など書く、あやしきなをいふ、胡論の轉かなどいへど、詳ならず、

「落人の爲めかや云々」 は落武者薄の穂に帰つといへ

三殿内にか。ア、久しう逢ませぬと。つゝと這入れば女房は。詞「アノこちのは今庄屋殿へ。どこからござんして何の用。わしや敷際の次郎兵衛後家の媒妁で。近い比爰へ來た故。前方の近附は知りませぬが。もし大坂の衆じやないか。こちの親方孫右衛門様の息子殿。大坂へ養子に行て。傾城とやらいふ物をたんと買て。人の金を盗み。其傾せんを手にさげて。走つたとやらすべつたとやらで。代官所からきつい詮義。孫右衛門様は久離切つて。お上の構ひはなけれども血を分けた親子なれば。いとしや年寄てきつい案じ。こちの人も馴染故。もし此あたりうろたへて。見付けられはさしやれぬかと。いかい氣苦勞。庄屋殿から呼にはくる。ヤ寄合じや印判じやと。節季師走に爰らあたりは。傾せん事でにえかへる。ア、うたての傾せんやと。しらねば遠慮もなかりけり。一人はハツと胸に釘。打點頭て成程く。

る諺より書けり、意は落人の爲めであるか、今は冬枯で落つべき尾花はなけれども、世を忍ぶ身は前後の面目を包みて、頬がむりをするといふこと、至極の文なり味ふべし、頬がむりをうけて「隠せど色香梅川」といへり、川竹に育ちし身如何にも隠しがたかるべし古今集に「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見れぬ香やは隠くる」の歌思ひ合されて面白し、よくも書きたり、
「温められつあたゝめつ」互にいたはる道行きの心中は、これ情の極、
「石原道を足引き」といひて大和の枕辭とせり、惱める状見るが如し、
「家來」の意は明なり、もと家禮より出づと、別記

詞大坂でも其評判。わしらば女夫づれで。年籠の參宮、なつかしきに寄りましたが。立ながらあふて逝たい。大坂者と云ずに。ちよつと呼んで来て下されぬか。ヲ、夫は安い事。一かへり行てきませふが。京のお寺が鎌田村の道場へお下り。先から直に參られたも知れまい。夫ではよつほどわしが戻りも遅い。コレ女中様。飯がしかけて有る程に。出来損なはぬ様に。差くべて下さんせやと。襷はづして出て行く。後は門口はたとしめ。饌かけてうつとりと。暫し詞もなかりしが。詞コレ忠兵衛様。ほんに爰は劔の中。斯して居ても大事ないかへ。ア、いやく。男氣な忠三郎。頼んで今夜は爰に泊り。死ぬる共古郷の土。生の母の墓所。いつしよにうづまれそなたにも。嫁姑と引合せ。未來の對面さしたいと。おろく涙梅川も。それは嬉しうござんせふ。去ながら。私がとゞ様かゝ様は。京の六條珠數屋町。

を見よ、庄屋は古への庄司
(筆責の段を見よ)の遺名なりといふ、名主、里正、などいひて村の長、領主の命をうけ、郡代、又代官の下にありて、其地の事をつかさどる、土着の民を用ひ、世襲の職なり、數村又數十ヶ村を支配するを、大庄屋といふ、
「けいせん」 は傾城、村より外へ足踏せぬ在所女、傾城の何物たるを知らぬ口ぶり、頗る面白し、傾城の事は別記を見よ、
「代官所」 は代官の居る所、代官は徳川時代の地方官にして、勘定奉行に屬し郡代の次に列す、其地の農民を支配し、人別、年貢、公事等の事をつかさどる、「久離切る」 は親子の縁など切ること「舊里切る」

定めて此間詮義に合ふて居さんせふ。かゝ様は眩暈持。若もの事は有るまいかと。我身のうへより案じられ。今一度京の二親に。一目あふて死たふござんす。詞ヲ、道理じやく。わしもそなたの親達に。聳じやといふて逢もしたし。恩の有る養子親妙閑様や云號の。おすはへも不埒の詫。そなたの兄忠兵衛殿の志も無にした斷り。今一度しみぐあひたいと。人目なければないじやくる。わたしもたんと恩の有る。兄さんが猶戀しいと。互ひに手を取り抱合ひ。涙のあらはらくと。袖にあまつて窓を打つ。詞ハア雪か降そふなと。奥の間は西受の。反古障子を細目に明け。見ゆる野風の畠道。うしろしぶきの雪吹には。かたげて急ぐ阿彌陀傘。道場参りぞつゞきける。詞ヤレありや皆在所のしつた衆。先なは樋の口の水右衛門。ひどい吞人じゃぞい。其次は荷持瘤の傳が婆。こりや又村一番の茶飲じゃ。そ

と書く方、正しかるべし、
 「案じ」 は考へる意より
 轉じて心配、
 「師走」 は陰曆十二月の
 異名（歳果つの畧とも、仕
 果つの轉とも）
 「にえかへる」 は上を下
 へと騒ぐこと、
 「うたて」 は心なし又つ
 まらぬの意、
 「胸に釘打うなづき」 と
 かけたり、頗る味ひあり
 「評判」 は評し判する事
 より、轉じてうはさの意、
 「年籠り」 は年の暮れに
 神社に籠り、元朝に拜する
 をいふ、参宮といへば伊勢
 に限る、
 「鎌田村」 は新口村の隣
 村なるべし、
 「道場」 は寺の事、釋氏
 要覽に「閑宴修道之處、謂
 之道場、隨煬帝、勅遍改僧

こへ入來る置頭巾は。大貧乏で有つたが。年貢に詰つて娘を京
 の島原へ賣つて。よい客に請出され。金持の奥様に成つて。聶
 の影で田も五丁。藏も二ヶ所の俄分限。同じ女郎受出しても。
 わしはそなたの親達に。憂目をかけるが口惜いわいの。エ、愚
 知な。モシそんな事云て下さんすなく。アノ親仁は弦かけの
 藤治兵衛。八十八で一舛の。飯を残さぬ達者もの。今年はてう
 と錢百じや。其跡に子細らしい坊主は。鍼立の道庵。あいつが
 鍼で母者人を立殺した。思へば親の敵。ア、もふよいわい
 な。今腹たてゝの。何の役に立たぬ事。ア、アレ。あそこ
 へ見えるが親父様。此世のわかれ御暇乞。せめて餘所ながら顔
 なりと。拜まふとはるゝと。爰迄來た念願が叶ふたか。ア、
 有がたい。あの緞子の肩衣が。孫右衛門様か
 いな。ほんに親子は争そはれぬ。目元から鼻筋から。お前によ

居「名道場」と見ゆ、
「飯の中」 至極のあぶな
きをいふ、
「死ねる共古郷の土云々」
此場合、誰しも此觀念ある
べし、忠兵衛が梅川を思ふ
所、よく見ゆたり、
「去ながら私しが」と、様か
く様は云々」 誰知らぬも
のなき有名な文句、父母を
懸念する心中、よく寫せり
「六條珠數屋町」は下京區
にあり、佛具を作る家多し
梅川の事は、問合せたるも
詳ならず、
「不埒」は無法の意、馬
の埒なきが如くなるゆゑと
ぞ、
「涙のあらればらくと」
下の雪にふり、
「うしろしぶき」は後より
降りつくるをいふ、
「かたじけなく阿彌陀傘道

ふ似た事わいな。詞サア夫程よふ似た親と子が。詞さへも得か
はさぬは。何とした身の因果。詞ア、お年も寄足もとも弱つて。
是が今生のおいとま乞でござりますと。手を合すれば梅川は。
今がお顔の見初の見納め。詞私は嫁でござんする。夫婦は今を
もしれぬ命。百年の御壽命すぎて後。未來で孝行いたしましよ
と。口の内にて獨語。夫婦諸共手を合せ。兎かふ涙にむせび居
る。孫右衛門は老足の。休みく門を過ぎ。野口の溝の薄氷。
すべるを留る高足駄。継緒は切れて横様に。どふと轉べばなむ
三と。忠兵衛もがけと出られぬ身。梅川あはて走り出。抱起しつ
裾しぼり。詞申しくく。どこもいたみは致しませぬかへ。
お年寄のあぶない事。お足も洗ひはな緒も上げて上ませふ。マ
アくこちへと手を引いて。内へ伴ひ揚り口。腰膝撫ていたは
れば。孫右衛門は氣の毒さ。詞ア、戴きますく。どなたか知

「場参り」とは何たる妙句ぞ。一誦三嘆、田舎の繩手道を、善男善女が、一列に、我方へ顔を向け、進み来ス状見るが如し、これ皆なつかしき古里のしるべの人々戀しさに身を忘れ、障子ごしのすき見に、昔を思ひ出で、の批評、其妙言語に絶す、

「樋の口の水右衛門」なるほど吞人なるべし、

「村一番の茶飲」吞人に應ず「婆アの好きなきは濃い茶に念佛嫁そしり」

「置頭巾」は老婆のかむりし角の出でたる淺き頭巾「島原」は六條南朱雀の東にあり、昔は洛陽第一の遊廓にして、華奢風流天下に冠絶せし、嘉永年中各所に娼家を置くを許されてより、大に衰退せり、なほ

らぬが忝ない。お蔭だけが致しませなんだ。ア、若い女中のおやさしい。年寄と思し召て。嫁子もならぬ御介抱。もふく手を洗はしやつてくださりませ。幸ひ庭に藁は澤山。鼻緒はわしがすげますと。懷搜して取出す塵紙。ア申し。爰によい紙がござんす。小搓捻つて上ましょと。延べ紙引さく其手元。ふしぎそうに打守り。詞爰あたりに見馴ぬ女中。マアこな様は。こゝらで見知らぬお人じやが。どなたなれば此やうに。念比にして下さりますと。顔つくくとながむれば。梅川いとど胸つぼらしく。詞ハイわたしは旅の者。私が舅の親父様。丁とお前の年榮で。恰好も生寫し。外の人にする奉公とは。さらくもつて存じませぬ。お年寄に舅御の。臥悩みのだきかへ。孝行は嫁の役。御用に立つて嬉しい物。詞嚙連合は飛立つ様にござりましよ。其紙と此紙とかへて。私が申し請。連合の肌につけ

別記を見よ、

「分限」は金持の意、娘

の爲めに俄分限となりし者

を見、身に引くらへて歎き

の趣向、頗るよし（昔は金

の相場高かりしゆゑ、千兩

分限などいへり、分限は分

際の意なれば、富める分際

といふ事なるべし）

「八十八」は米の親ひ、

一升残さぬも面白し、

此場合鍼醫を見て「親の敵」

とは頗る滑稽、

「振子」は麻糸を振りて

あらく織れる布、

「肩衣」は上下の上の事

にて、素袍の袖を去りたる

ものといへど疑はし、委し

くは貞丈雜記、秋草等に見

えたり、徳川時代の禮服に

用う、

「それほどよう似た親と子

が」身にしてみても、

させて。爺御に似た親父様の。筐にさせとうござんすと。塵紙

袖におし包む。涙にそれとはしられけり。詞の端に孫右衛門。

扱はそふかと恩愛の。盡ぬ涙を押隠し。詞「フウこなたの舅に。

此親父が似たといふての孝行か。エ嬉しうござるが腹が立ちま

す。わしも年たけた忤めを。様子有つて久離切り。大坂へ養子に

やつたが。傾城といふ魔がさして。人の金を盗んだとやら。あ

げくに所を走つた噂。此大和は生國なれば。十七軒の飛脚屋仲

間。お上からも隠し目附。或は順禮古手買。節季候に迄身をや

つし。此在所は詮議最中。誰ゆるなれば其傾城の嫁御故。近比

愚知な事なれど。世のたとへにもいふ通り。盗する子は憎ふな

ふて。繩かける人が恨しいとは此事。詞「久離切た親子なれば。

よからふが悪からうが。構はぬ事とは思へ共。大坂へ養子に行

て。利發で器用で身をもつて。身代もよふ仕上げた。あの様な

「南無三」は南無三寶の

署にて、失敗などの時發する語、三寶の加護を頼む意より出でしなるべし。三寶は佛法僧をいふ、

「嫁子もならぬ御介抱」いかに梅川の胸にこたへしならん、

「塵紙」は楮の粗皮にて

漉きしもの、延紙は杉原紙の小形のもの、いつれも鼻紙に用う、所用の紙の精粗にて其人物をあらはすところ、頗る妙、

「胸つばらしく」は胸につまるをいふ、

「私が舅の親父様云々」それと謎によく情を盡せり、「嬉しうござるや云々」それと覺りて尤の答

「飛脚屋」の事は、先年の夏頃大阪毎日新聞に、又歳末頃時事新報に詳しく連

子を勸當した。親は大きな白痴と。指さしせられ笑れたら。其嬉しさはどふ有ふ。詞今にもつい搜し出され。繩かゝつて引る時。孫右衛門は目水晶。よふ勸當した出かしたと。譽られけるが悲しうござる。それを思へば一日も。早ふ往生おすくひと。拜願ふは今まいる如來様。御開山。コレマ佛に嘘がつかれふかと。どふとひれ伏しもだへ泣。梅川も聲を上げ。忠兵衛は障子より。手先を出し伏拜み。身をもみ歎くぞ道理なる。猶も涙を押拭ひ。詞様子聞いたか聞かぬかしらぬが。子を釣出さふとお上の斗らひ。養ひ親の妙閑殿。一昨日牢へ入れたげな。エ、と夫婦は氣もうろく。それでつくく思ふには。實の親を便にして。もしも忍んで來はせまいか。來たらば何ぼう不便でも。養子親への義理有れば。かくまふ事は扱置いて。親が繩かけ出さねばならぬ。ア、どふぞ來てくれねばよいが。爰らあたりをまご

載しありたり、當時十七軒の仲間もありしなるべし、
 「隠し目付」 は内密の探偵にて、前の節季候古手買など、皆これなり、
 「盗みする子は憎うなうて云々」 昔よりの諺、親子の情、實にこゝにあり、
 「利發」 は伶俐發明の略、さとくさむしきこと、
 「器用」 は物事に巧者なるないふ、もとは才の世の用ひになること、論語孔安國の註に「是器用之人也」
 「勘當」 は法に勘へ罪にあつるといふ意、君臣、父子、師弟などの縁を切り、追放するにいふ、
 「たはけ」 は白痴、白者など書く、馬鹿の意、日本紀には淫又戯の字を訓む、
 「目水晶」 は明眼といふに同じ、

つきはせまいかと。四年以來逢もせず。なつかしい子の顔を。見ぬやうにくと。雜行ながら神たゝきも不便さから。ア、とはいふ物の。若死にするも人の一生。義理有る親を牢へ入れ。おめくと逃隠れは。末世末代不孝の惡名。所詮逃れぬ命なら。一日なりと妙閑殿を。早ふ牢から出すのが孝行。覺悟極めて名乗つて出い。シタがそれもとふぞ。親の目にかゝらぬ所で。繩かゝつてくれ。エ、現在血を分けた子に。早ふ死ねと教へるも浮世の義理か是非もなや。なぜ前方に内證で。斯々した傾城に。斯した譯で金が入ると。便宜でもしをつたら。久離切ても親子じや物。隱居の田地を賣立ても。首繩はかけまいに。皆あいつが心から。其身もせまい苦をしをつて。いとしほなげに嫁御に迄。思ひも寄らぬ憂目を見せ。知音近附親に迄。隠れる様に身を持ちなし。ろくな死もせぬやうに。此親はうみ付けぬ。エ、

「出いかした」 はよくやり
しとはむる詞、よく出いかし
たの畧なり、

「御開山」 は本願寺の宗
祖、親鸞上人、上人は幼名
松若丸、九歳の時慈鎮和尚
の弟子となりて台教を學び
後法然上人に従ひて修行す
肉食妻帯して一向宗を開き
しかば、他の僧侶に惡まれ
訴へられて越後に流され、
居る事五年、許されてより
諸國に教を布き、大に行は
る、弘長二年十一月廿八日
寂す、年九十、見真大師と
謚す、開山は釋氏の徒、多
く人跡なき空山を開きて、
閑靜處を建つ、即ち開山創
寺なり、故に移りて、一寺
門を起し一法派を垂るゝ人
を、稱して開山といふとぞ
「妙閑の入牢」 夫婦の驚
き如何、

憎にくいやつじやと思へども。かはゆふござると泣しづみ。わけた
る血筋ちすぢぞ哀あはれなる。涙なみだの隙ひまに巾着きんちやくより。金一包取出し。詞「是は京
の御本寺様へ。上げふと思ふた金なれど。嫁よめと思ふてやるで
はない。只ただ今のお禮らいの爲。是を路銀ろぎんにちつとなど。遠い所へ往
て下されと。渡せば梅川押おしいたゞき。詞「お心付の此お金。逆様
ながら戴いたきます。大坂を立退のても。私が姿目すがたに立てば。借竹與
に日を送り。奈良の旅籠はたごや三輪みかの茶ちやや。五日三日夜を明し。廿
日餘かあまりに四十兩。つかい果はたして二分殘のこる。金故大事の忠兵衛様。
科人かじんにしたも私から。嚙憎さきにくからふお腹も立ふが。因果いんぐわづくあきらめと諦
て。お赦ゆるしなされて下さりませ。親子は一世の縁えんとやら。此世
のわかれにたつた一目。逢あふて進しんぜて下さんせと。奥おくの障子しょうじを明
けるを引留ひきどめ。詞「ア、コレ益やく躰たいもないく。たつた今もいふ通
り。譬詞たとへはかはさいでも。顔見合したりや繩しなかけるか。おれが

「不愜」 はかあいさう、

不便なる者とあはれむより

轉ぜしなり、

「養子親への義理もあれば云々」血を分けた子に早ふ死れと云々」世間悲の悲哀

の哀は、義理と恩愛との衝突にあり、恩愛よりいへば

親子ゆゑ、身に替て助けたけれど、以て世の義理に勝

たしむる能はず、煩惱苦悶、

「雜行」 は一向宗は彌陀

專念の宗旨ゆゑ、他の神佛

に歸依するを雜行といふ、

蓮如上人の御文が改悔文か

に「もろくの雜行雜志、自

力の心をふりすてゝ、一心

一向に阿彌陀如來、今度の

我等が一大事の後生云々」

「神なき」 は神頼みを

いふ、

「所詮」

はつまり、

「内證」

は内々、もと佛

口から訴人せにや。養ひ親への義理が立ぬ。何ぼ義理が立たい

迎。親の手づからどふ繩が。かけられふぞいの。御尤でござりま

すく。そんなら顔を見ぬ様にと。傍に有合ふ手拭取り。泣く

後に立廻り。慮外ながらとめんない千鳥。御不自由には有ふが。

斯さへすれば。そばにござつても構ひは有るまい。チ、ヲ忝ふ

ござるく。物云ずと顔見ずと。手先へなと障つたら。そちが

本望逢た心。親子一世の暇乞。必こなたの連合に。物いはして

下さるなど。悦ぶ中に忠兵衛は。嬉しさ餘りかけ出て。互に手

と手を取かはせど。互に親共我子共。云ずいはれぬ世の義理

は。涙涌出る水上と。身を浮斗りに泣かこつ。折から聞ゆる多

くの人音。二人を奥へとつきやりく。詞コンく女中。あの

物音は慥に捕人。此裏道の小河を渡り。藪をぬければ御所街道

早ふくと氣をもむ所へ。順禮すがたの八右衛門。利平もとも

語にて、諸佛心中の極證妙理をいふとぞ、

「いとほなげ」

はかあ

いさうに、

「知音」 ばしるべの意、

もと列子に見ゆる。伯牙

善鼓琴、鍾子期善聽」の故

事より出でたりと、

「ろくな死」 は人間普通

の死をいふ、ろくはまろく

(圓)の略にて、物のよゝの

ひてかけざるをいふ、故

にかけてとゝのはざるを、

ろくでなしといふとぞ、

「惜いやつじやおもへど

もかはゆふござる」これ親

の至誠至情「盗みする子は

憎ふなうて」と世の誓から

切り出して、勸當を譽めら

るゝより笑はれるが嬉しいと、親馬鹿の實意をあらはし「一日も早ふ往生」といふ口の下から「雜行ながら神たゝきも」と、子ゆゑの闇に宗義

にまで背く真心を吐き「親が繩かけて云々」「なつかしき子の顔見ぬやう」親の目にかゝる所で」と浮世の義理に、斷ち難き恩愛の絆を斷ち「所詮迷れぬ命なら」と、死れと教ふる孫右衛門が胸中、熱鐵を呑むよりつらし、此文親の至愛至情を寫し盡して餘す處なく、句々悉く

血の涙にして讀む者嗚咽に堪はず、

に蚤取眼。のみにとるまなこ

役人大勢打つれ立。

詞「此内がきぶさいなと。どかく

くと込入る所へ。組子一人かけ來り。詞所は長谷の山つゞき

に。梅川忠兵衛と名乗る者。休みおつたを追つ取まき。からめ

とらんといたせ共。中く手に合ひ申さずと。聞より小頭扱こ

そく。來たれつゞけと引かへせば。二人も俱に飛んで行く。

孫右衛門は飛び立つ嬉しさ。天の助けかたじけないと。裏道見

やつて延あがり。詞ヲ、そうじやく其道じや。ソレ其敷をく

ぐるなら。切株で足つくなど。届かぬ聲も子を思ふ。平沙の善

知鳥血のなみだ。長き親子のわかれには。安かたならでやすき

氣も。涙くの浮世なり。

「大限を立ち退いて云々」

口を開けば必ず諺ひ、扇を執れば必ず舞ふ金玉の文句、誰れか知らざるものあらんや、遣ひ果して二分残せし茶屋は、三輪に出来たり、奈良に旅籠屋の出来ざるはいぶかし、總解を見よ、

「親子は一世」は佛者のいひ出たるならんも、佛典の語にはあらず、

「やくたいもない」はちもないといふに同じ、京坂地方の俗語、諸禮筆記に「平人とても、常に新らしき鼻紙一折、新らしき手拭一つたしなむべし、用に立つ事多し云々、かやうのたしなみなき者を無藥帶」といひならせり」と見わたれど、何の事とも分らず、藥袋、益鉢など書けど、皆當字なるべし、

「慮外」は思ひの外の意より轉じて失禮、

「めんない千鳥」は目かくしの遊戲「面無雜兒捕り」の略なりと、

「手先へなとさばつたら」目隠して手を觸るゝは、餘りをさなき仕方なれども、顔も見られず、聲も聞かれぬ浮世の義理、これが此世の別れとおもへば斷つにたゞれぬ肉身の情、手をふるゝが、せめてものこゝろやりなるべし、土佐日記に「女の兒の爲めには、親をさなくなりぬべし」と、思ひ合されてあはれなり、

「御所街道」は大和南葛城郡、御所に通する道、五所とも書きゴセとよむ、

「きぶさい」はあやしい、

「長谷」は三輪町の東南凡一里にあり、西國順禮第八番の札所、長谷觀音と、其廻廊の牡丹とを以て名高し、後に委しく記すべし、

「切株で足をつくな」屈かぬ聲の御慈悲心、ありがたしとも勿体なしとも、

「子を思ふ平砂の善知鳥血の涙云々」善知鳥は奥州外が濱にありといふ鳥の名、此鳥砂の中に子を隠し置き、餌を與へんとする時空よりうとふと呼べば、やすかたと答へて出で来る、獵師其子を捕へんとすれば、親鳥血の涙を雨の如く降らす由、拾葉抄新撰歌枕等に見えたり、諸曲善知鳥はこれ等の説より、作れるなるべし、別記に馬琴が煮雜記を引きたれば見るべし、なほ安達が原の宗任物語の段は、善知鳥の事より作り出せるものなれば、其總解にいふべし「やすかたならで安き氣」と調をととのへ「なみだの浮世なり」とかけつゞけたり、これも前の解にて明かなり、名文々々、

淨瑠璃通解第貳編別記

挾箱 貞丈雜記に「挾箱といふもの昔はなきものなり古へは衣服を袋に入れて持たせしなりこれを上さし袋といふ慶長年中の頃よりか何時の頃よりか袋を用ふること絶えて挾竹とて竹を割かけて其間へ衣服を挾みて持ちけるなり然るに雨露などにもぬれ塵ほこりにもかゝりてよろしからざるによりて挾竹のかはりに箱に入れて持たす事となりたるゆゑ挾箱とは名づけたるなりされば挾箱といふ物古くはなきものなるゆゑ挾箱の緒の結び様古法なきなりと見ゆなほ秋草にも載せたり。

熨斗 秋草に「今世三方に伸鮑のしほをすゑて客人に供するを臺熨斗のしほといふなり古代客に饗應の最初に熨斗あはびを供するはなし手掛てといふ物を供しけるなり手掛は檜木にて折敷の如く平く六角にして少しふちをつくるこれ上の臺なり云々其臺の上に五色の削物けりものを高盛にするなり其中の黄は熨斗鮑なり云々此手掛を略して其代りに熨斗鮑を臺に載て一番に客に供するなり又貞丈雜記に「のし鮑ともうち鮑とも長鮑とも舊記にあるは細くへぎてはしたるをいふと見ゆ伸鮑と書くべし熨斗は衣をのす火のしの事なりと。

島臺 昔の洲濱をうつしたるなり。貞丈雜記に「今世島臺といふ物、昔もこれあり。島形といふ蓬萊も島形の中なり。洲濱形(圖を省く)如此に臺の板を作る。海中の島のすその海へさし出でたる形ゆゑ、洲濱といふなり。其上に肴を盛るなり。かざりには岩木花鳥などを置くなり云々」又「今時蓬萊の島臺とて、洲濱の臺に三つの山を作り、松竹梅鶴龜などを作り、其下に肴を置く事、昔よりありし事なり。これは風流の事にて、規式の事にあらず云々」と記し、瑠璃天狗に「昔貴人へ物をさゝぐる時、洲濱形を木にて作り、それを臺にして、金銀のつくりものを載せ、あるは草花などをうゑて、さゝげし事、古き物語に見えたり。此臺は海の洲崎濱などの形に、なぞらへてつくるゆゑ、洲濱といふなり。菅家の御歌にも「秋風の吹上かみかみに立てる白菊は花かあらぬか浪のよするか」と詠じ給ひて、吹上の濱の菊を洲濱にうゑて、君にさゝげ給ひし事。古今集に見えたり。もと此洲濱といふものは、蓬萊方丈瀛洲えいしゅうといふ仙人の住む三つの島をうつしたるものゝよし。中右記に見えたらば、後にそれを島臺と名づけて、めでたき事に用うる道具とせしなり」と見ゆ。

伏籠 貞丈雜記に「ふせごといふはふせかごの略語にて、竹にて籠を作り、紙にて張り、所々に穴をあけたるものなり。火鉢の上へ右の籠をかけて、衣服のしめりをとるものな

り云々。定家卿の歌に「うちにはふ伏籠の下の埋火に春の心やまづかよふらん春の心
 やとは伏籠の香をたき其匂のかうばしきを梅の花の匂にたとへてよめるなり」和訓
 栞に「ふせご薫籠をいふふすべかごの義なりすべの反なり」と見ゆ。案するに語はふせ
 かごの畧にて用はふすべかごなるべし。支那にも衣薫籠あり。

安居天神 菅公左遷の途次つかれてこゝにやすまれしゆゑ其靈を祭りて安井天神と
 稱すなどいへるは安居の字より作り出でたる妄説なるべし。安井天神とかけるもあ
 り。恐くば天つ神を祀れる社にして古よりありて天神と稱せしを菅公に奪はれしな
 るべし。名所圖會にも安井天神相坂の上にあり。祭神小彦名命。毎歲八月廿日神祭あり。
 これを芝原祭といふ云々。天津神を天満宮とまぎらし稱する事所々にありと見ゆ。

一番村 河内名所圖會に「佐太守口の北にあり一名一番村といふ此近村に一番より十
 一番までの村の名あり。一番は佐太なり。二番村三番村四番村五番村六番村七番村八
 番村九番村は北十番村の屬邑なり。南十番村まで已上十一村を大庭莊といふ。下島村
 を十一番村とも呼ぶ。或は曰はく此村の名は大阪金城要害の軍勢隊伍を立つる名な
 りとぞ」と見ゆ。

物識れる人の話に。一番村二番村の稱は有事の時大坂城固めの爲め淀川を切る順序

にて豊太閤の名づけしなり。明治十八年の頃、佐太の邊りにて堤潰えたるに、城の北東の田野一面白海となりて、寢屋川堤の上など、船にて通行せしかば、心ある人々太閤の明識に服せりと、此説最も信すべし。

御師 玉櫛に、多加常政主の文入抄といふものに、伊勢の或人の秘説を聞きたる由にて記されしは、往古は諸國に大御神の御厨、神田、神戸などありて、其處々より貢物いと多く收まれる故に、其餘計をもて大宮に仕奉る、宮司、神人等も豊饒に暮らせしを、彼保元平治の亂より後は、諸國より奉る神貢物も漸々に絶えしかば、神官たち自然に困窮に及びけるを、例の佛者ども、常に兩宮に佛法を混雜せしめんと伺ひ居れば、神官等の困窮せる其虚を見すまし、兩太神宮に佛法の法樂といふことを始めて、太神宮の法樂舎といふ坊舎を、山田に三坊、宇治に七坊建立し、金光明經、仁王般若經、般若心經など轉讀したる卷數を、代僧にて亂中ながら、縁を求めて諸國に配りしかば、其僧ども其得意をさして檀家と云ふに、其檀家よりは其僧を御師と稱せり、かくて後にまた某太夫などいふ俗人をもて配ることゝなれり、然るにこれをも御師と稱せり、これ謂ゆる御師の始なり云々と見ゆ、御祓と稱する麻を收めたる宮を諸國へ配るは、御師の手代にて代官と稱し、曆を配るは戰國の頃、遠隔の地にては求め難きゆゑ、京に近き手代に誂へけ

るより終に伊勢より出すことゝなれりといふ。

根來庵 紀州名所圖會に「中古根來寺(大傳法院とて有名なる眞言宗の大道場あり)の繁昌せし時山内の院々又谷々或は西坂本等にて朱塗の椀折敷を製す今播州の書寫塗と並び賞する根來の膳椀これなり居尻等に天文天正年間の銘殊に多しいづれの頃より製せしや詳ならず又根來彫は硯箱或は根附に多し古拙にして愛玩すべし其製今絶えたり」と見ゆ。

氏神 貞丈雜記に「氏神と産土神と一つ事に心得たる人ありあやまりなり産土神は人々生れたる在所の鎮守の神なり氏神は氏の元祖神なり藤原氏は天兒屋根命なり平氏は桓武天皇を氏神とするなり橘氏は敏達天皇を氏神とす源氏は清和源氏は清和天皇嵯峨源氏は嵯峨天皇村上源氏は村上天皇を氏神とするなり又八幡を源氏の氏神といふ人ありあやまりなり八幡は軍神なり八幡をわがめ貴む事源氏のみに限るべからず」と見ゆ義家石清水の社壇にて元服し八幡太郎と稱せしより源氏の氏神の如くなりしのみ。

竹の園生 親王をいふ昔支那の漢の文帝の御子梁の孝王三百餘里に竹園を構へて住まはれしかば人之を孝王の竹園と呼びしより出でたり事史記世家に見ゆ。

一字千金 呂氏春秋に「布威陽市門懸千金其上延諸侯游士賓客有增損一字者予千金」これより出でたる語にして字のたふときをいふ。

嫁にも喰はさぬ此孫を「秋茄子は嫁に喰すな」といへる諺より書けり。此諺は夫木集「秋茄子をわさゝのかすにつけませて嫁にくはれし棚に置くとも」の歌より出づ。歌の意は秋茄子を新酒の粕に漬ませて棚にわけ置くとも嫁に喰すまじといふことにて秋茄子は種なきもの。又茄子を食すれば子宮を傷ふなど醫書に見えたればもしそれにあやかりて子の出来ぬやうの事ありてはと姑女の案じ過したる親切なる心を詠めるなるを後に姑女は嫁をいぢるものと相場定りて秋茄子はうまさものゆゑ惜みて嫁に食はさぬ意となし遂にかゝる諺も出来しなり養生編に「茄子性寒利多食必腹痛下痢女人多傷子宮」

賽の河原 閑田耕筆に「紀伊郡山城佐比の里あり三代實錄貞觀十三年百姓葬送の地を撰定せらる其一處紀伊郡十一條下佐比の里とあり世に佐比の河原を冥途にて小兒の集る所とし且地藏尊之を化益し給ふといふは其葬地に小石塔多くありしよりいふならん」

いろは歌 弘法大師の作といへど詳ならず涅槃經なる四句の偈諸行無常是生滅法生

滅々已寂滅爲樂を同じ假名を用ゐず。今様歌に詠めるものにて、僧徒の手になれる事は疑ふ可からず。意は

色は匂へど散りぬるを(諸行無常) 我が世たれが常ならん(是生滅法) 有爲の奥山
今日越えて(生滅々已) 淺き夢見じ酔もせず(寂滅爲樂)

なりと、手かく事の初めには、いつ頃よりかしけん。貫之の頃は、難波津安積山等の詠を用ひし事。古今集の序に見えたり。寺子屋時代に盛になれるるべし。

白小袖 貞丈雜記に「婚禮に白き小袖を用ふる事。葬禮の學びなりと。今世上にいふ人あり。甚あやまりなり。葬禮に白色を用ふるは、悲しみの時なれば、美麗彩色をもとめず。物をかざらざるを本意とする故なり。婚禮に白色を用ふるは、婚禮は人倫の大本、白色は五色の大本なり。故に白色を用ふるなり。用ふる所の白色は同じけれども、本意は同じからざるなり。又産の時、白色を用ふる本意も、婚禮に同じと見ゆ。小袖の事は前篇に解す。祇園 四條橋以東、娼家妓館ある數條の市坊を包括するの稱。寶永正徳の頃より、此地に茶屋小屋起り、漸く繁華に赴き、享保の初めより、今の如く町定まれり。天保の末年、娼女を禁せられしが、其後再び公許ありて、維新前後より益繁昌を加へ、遂に島原を壓し、京都第一の遊廓となる。名媛美姬妍麗を競ふ、京女郎の名こゝにといめをさせり。俗説に

一力亭に大石良雄が遊べるなどいへるは頗る信じがたし。扁額軌範に「延寶の古圖には祇園町には茅屋も見ゆるが今は繁華の地と爲り、家屋は所せばく建並び、高樓飛觀軒をつらね、戸々には絃歌の聲絶ゆる事なく、美人の小裙をとりて南北へ行きかふ事晝夜分ちなし。其昔は四條橋東北すべて祇園社領の地にして、寛文の頃までは農耕の所とす」と見ゆ

かたを波「潟を無みて潟が無きゆゑ」といふ意なるを、片男波などの字を當てゝ、遂には波のことゝなせり。萬葉集に載せたる山部赤人の秀歌「和歌の浦に汐満ちくればかたをなみ蘆べをさして田鶴鳴き渡るも、和歌の浦に汐が満ち來れば潟が無きゆゑに、下りて居た鶴も、蘆邊をさして鳴き渡るといふ意なり。決して波の名にあらず。

祐筆 貞丈雜記に「右筆の事雲州消息一名明衡往來に曰く、右只今從大内有召、可參勤、仍右筆非暇、追可注申侍云々。又今川了俊の書かれし難太平記に、今年中となりて、以の外中風氣ある間、時々右筆不叶、思の外の方に筆曲る間、本よりの鳥の跡、彌比興なり云々。右兩書に右筆とあるは、自ら物書く事をいふなり。人に申付けて書かしむるにあらず。右筆とは右の手に筆を持つ事なり。右筆と讀むなり。近世は書役の事を祐筆といふ。祐筆と書くは非なり。右筆と書くを正しとすべし云々と記し、東鑑を引きてこれを證せ

り。

聖護院 京都神樂岡の西南、岡崎の西北にあたる。寛治四年園城寺長吏増譽僧正の創建にして、天台宗三井寺門派、門主の居なり。熊野三山別當檢校職を兼帶し、天台宗修驗道をも管し、本山派と稱し、歷代法親王入院ありて、聖護院門跡と號す。明治の初め親王の入院を停め、又修驗道を廢せられしより、大に衰へたり。熊野新宮は聖護院の鎮守にして、其森を聖護院の森と稱し、古木蓊鬱なるを以て名高かりき。

家來 秋草に「家僕を今世は家來といふ。家來と書くは惡ろし。家禮と書くべき事なり。されども世間通用には改むるに及ばず。其本は如此と知置くべし。家禮と家僕とは少し差別ある事なり云々。家來の二字は史記高祖本紀に「如家人父子禮」といふ文字より出でたり。他人なれども子に准じて、禮をいたすをば家禮といふ由。花鳥餘情にいへる如く。公家衆の攝家へ參りて、朝廷の公事故實を習はん爲めに、常に伺候して子の父を敬ふ如く、親しく仕へらるゝ人々を、攝家にて家禮と稱せらるゝなり。召使はるゝ事は、家僕に同じ如くなれども、攝家の家僕にはあらず。武家にても家禮といふは右に同じ云々。右の如くなれば、家僕と家禮とは差別ある事なれども、今世は家僕の事も家來といふ。家來は家禮の書違ひなり、家禮も家僕の如く召使ふものなる故、混雜して差別なく

なれるなり」と見ゆ。徂徠は家來は家。隸なるべじといへり。

傾城 此語は漢書に「李夫人本以倡進。兄延年知音善歌舞。延年侍上。起舞曰。北方有佳人。絕世獨立。一顧傾人城。再顧傾人國。寧不知傾城國。佳人再不可得。云々」とあるがもとなるべし。貞丈雜記に「傾城といふは遊女なり。今世の如く一所にあつまり居らず。所々にあり。大名の家などへも召し寄せて。酒宴の興を催し。歌ひ舞ひ酌などにも立ちしなり。傾城白拍子に銚子の渡し様。折紙など遣り様。馬など引き遣す様などの事。舊記に見えたり。唐にて傾城といふは。遊女の事のみに限らず。總て美女の事をいふ。美しき女は。人に城をも傾けさせ。國をも傾けさせるものなりとて。傾城とも傾國ともいふなり」と見ゆ。今専ら女郎をいふ。

島原 名所圖會に「島原傾城町は朱雀野にあり。此所上古は鴻臚館の地なり。中頃には觀喜壽院の封境にして。西口の島の字を堂の口といふ。又傾城郭は万里小路。今の柳馬場なり。二條の南方三町にて。其先は東山殿義政公遊宴の地なり。天正十七年。原三郎左衛門林又一郎といふ浪人。上訴によつて傾城町を免許せられ。一の郭を開きしなり。地名を新屋敷と號し。又柳の雙樹あれば。柳町とも稱す。今の出口の柳は此遺風なり。其より十三年を経て。慶長七年に六條にうつされ。今の室町新町西洞院。五條橋通の南にて。方貳

町の郭なり。中に小路三通ありしにより、三筋町と號す。六條通。今の魚棚西洞院川にか
くる石橋は、傾城町の入口にして、此時かけ初めしなり。今にあり。又室町二條の南西側
酒屋の居宅異風なり。此時の忘八にして、今に存せり。又寛永十八年に、今の朱雀野へ移
さる。島原と號することは、其頃肥前の島原に天草四郎といふもの一揆を起し、動亂に
及ぶ時、此里もこゝに移され、騒しかりければ、世の人島原と異名をつけしより、遂に此
所の名となれり。

善知鳥うとふやすかた 馬琴か烹雜の記にうとふは奥州の方言にて、海濱の出崎をいふ。外が
濱なる水鳥の眼下肉づきの處、高く出たるよりおほしたる名なるべしと記し、さてう
とふを善知鳥と書くよしは、此鳥甚しく人をおそれ、又よく其友を愛す。もし其一隻を
獵師に捕はるゝことあれば、もろ鳥其ほとりを翔めぐりて、鳴くこと甚しく、涙を落す
。事雨の如しとなん。故に善智の二字をあてたるか。又鳩とも書けり。その義詳ならず。予
曩に善知鳥の寫眞一張を獲たり。其の後善知鳥の腸はつたを脱きて乾したるを見しに、前に
獲たりし圖と大かた違はず。鳥の大さ小鴨に類して、羽はうす黒色なり。羽の色すべて
雉子きじ鴿ばとといふものに似たり。髭は太くして前尖り。横に  此の如く陥りたる處あり
て筋の如し。髭よりつゞきて眼下肉づきの所、高くさし出たるが、其色本は薄紅く、末は

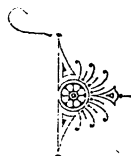
黄に黑色を帯びたり。鶯にすこし似たるやうなれども、大に同じからず。眼下に白毛垂れて髯の如く。足水搔ありて腹はすこし白し。水鳥の足は大かた後によりてつくものなれど。此鳥はわきて其足髯にありて。尾はいと短し。今つばらにこゝに圖す。圖を省く。舊説に善知鳥は、親をうたふといひ子をやすかた。といふといへり。一書に此鳥砂中にかくして子を産むなり。獵師親の眞似をしてうとふくといへば。やすかたとこたへて出づるといへり。これによりて陸奥の外が濱なる呼子鳥なくなる聲はうとふやすかたといふ歌はいできにたれど。いとおぼつかなき事なり。此鳥は荒磯の中にて。安かるべき干潟をたづねて。子を産むゆゑに。親を出崎に比へうとふといひ。子を干潟に喩へてやすかたといは。おだやかに聞ゆべし。しかれども邊境近塞のことば傳聞の誤多かり。今推量をもて説べからず。秘藏抄に

ますらをのえむひな鳥をうらぶれて涙をあかく落すよな鳥

これによりて善知鳥の異名をよな鳥といふ。その子をえむひな鳥といふよし註に見えたり。これ又誤なるべし。一書にこれをことわりていふ。えんひな鳥とは其名にはあらじ。將獲雛の義か。しからずばますら男とつゝいふ事いかい。よな鳥のなは助字にて。涙を落すよな鳥と詠めるか。只うとふの事を詠るのみにて。異名にはあらざるべしといへ

り。又一説によな鳥は善知鳥の異名なり。此鳥子を捕られ友を捕らるゝ時は必ずよゝとなく。故によな鳥といふといへり。人の悲しき時によゝとも泣かぬ。鳥の悲しむ時よゝと鳴くといふは、いよゝうけがたき事なり。昔より外が濱にてはうとふとも呼びつらめ。都人は其名だにしかと知らざる鳥にやありけん。なほ考ふべしと見ゆ。

安齊隨筆に「藻鹽草にうとふ安かたとありて、勢州へ勅使ありて、三角柏に備へ祭るよしをのせ、并に右の用度に此鳥を取る趣を書きたり」子を思ふ涙の雨の笠の上にかゝるもわびしやすかたの鳥。右の歌を載られ侍り、俗謠に善知鳥あり云々と記し「藻鹽草の註は何にて書き候や。又歌は何集に出でたる歌にや。右御教示謹で奉請畢」と見ゆ。なほ安達が原の宗任物語の段は、此善知鳥の事を本として作れるなれば、其段の總解にいふ所あるべし。



編 壹 第

俊免寛物語の段
 政清本城の段
 片岡忠義の段
 三浦別館の段
 泉貫屋の段
 船長屋の段
 盛綱陣屋の段
 四斗兵衛内の段
 猪名川内の段
 十種香の段
 勘助住家の段
 桔梗ヶ原の段
 百度参の段
 小坂部館の段
 松波琵琶の段
 綿操馬の段
 野崎村の段
 實屋の段
 圓覺寺の段
 伏見崎の段
 岡崎の段
 新關所の段
 沼津の段
 婚姻の段
 琴責の段

刊 既

▲報知新聞評
山本九馬亭と云ふ人の著
多年的の精勵によりて今度通に解十二篇を編まんとし既に其三篇の稿を了はり一篇づゝ世に問ふに至りたるなりと、先づ總解を爲し本文に付きて一々字解を爲し語解を爲し故事、里諺、地理、歴史と關聯する人物の小傳等、徴に入り細を探りて漏らす所なし、目に見る淨瑠璃の妙趣は斯かる該博の註釋あるありて初めて完きを得べし云々

稅郵要外○錢拾八圓參冊二十●圓貳冊六●

明治三十六年十月十日印刷
明治三十六年十月十三日發行

淨瑠璃通解第貳編

定價金參拾五錢

著者 山本信吉

發行者 大橋新太郎

東京市日本區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博進社工場

東京市小石川區久堅町百〇八番地
合資會社



發兌元 東京日本橋本町博文館

訂校
○鳥帽子折
○さんし髯

狂言全集

幸田露伴君校訂

上、中卷既刊 下卷近刊

增補
三
四

全一冊脊皮上綴正價壹圓八拾錢
大判一七入六頁小包送六頁

全一冊脊皮上綴正價壹圓八拾錢
大判一七入六頁小包送六頁

第第第第第第第

第八○蟻通○大佛供養○女即花○定家○鍾道○繪馬外廿九番
第九○鴉羽○惡源太○朝顔○佐々木○鍾引○紅葉○鶴岡外十三番



全一冊紙皮上綴正價參拾五錢
小判五三〇頁郵稅六錢

全一冊紙皮上綴正價參拾五錢
小判五三〇頁郵稅六錢

掲げられたる、謡曲の國別、謡曲の古名、謡曲作者類別等を一覽せは更に便益を得給ふこと多からん

全一冊洋並綴正價貳拾五錢
大判二七六頁郵稅六錢

全一冊洋並綴正價貳拾五錢
大判二七六頁郵稅六錢

上 卷 中 卷 下 卷

[illegible]

幸田露伴君校訂
訂校
狂

言全集

全三冊和上綴正價一冊五拾錢
中判凡千三百頁郵稅一冊八錢

大和國建樹君著

每卷密插挿入（三の巻迄出來四の巻以下綴刊）
 のしをり 全六冊洋並綴 正價一冊四拾
 一冊 二〇〇頁 郵稅六

長井金升君校訂

全一册
脊皮上綴
正稅價
拾六拾
錢錢

形義 離子と仕舞福立延 幕面型束作物 小道具 簀の

三田村

兼平 江口
 羽衣 百萬
 安宅 聖々
 安達ヶ原 蟻通

小、郎
九郎

鈐木
 卷絹
 俊寬
 海人

○○○
橋

○春榮
○道成寺
○富士太鼓
○蜘蛛

葛城

○小袖會我
○櫻川
○攝待
○野守

少嵐山

盛敦
二人靜
雲雀山
殺產
善和鳥

國龍

善界
鵲園
阿漕
大石
朝長
市

力

以仙養珠女 藏月 大江口

文
藝

大和田建樹君著
日本

歌謠類聚 全三冊 脊皮上綴 正價二冊拾錢
中判二〇四六頁 郵稅一冊拾錢

我國開闢以來
以て古今を
其沿革を詳
を費されし

分ち、種類に依て雅俗を別にし。一読人をして照々にせしむ。大和田先生が之を輯むるに幾星霜の勞苦かは、請ふ一本を綴て實驗あらんことを

博文館編輯局編
聲

彩色木版寫眞版插入
全一冊洋並綴正價貳拾五錢
大判二四八頁郵稅六錢

博文館編輯局編
琴曲

獨稽古
全一冊洋並綴正價貳拾五錢
大判二四八頁郵稅六錢

都々

逸
一
千
題
全一冊紙皮上綴正價參拾五錢
小判五六〇頁郵稅六錢

同 風雅
文庫 都

逸の葉

全一冊	紙皮上綴	正價貳拾
小判	二九〇頁	郵稅四拾

同

風雅
文庫

狂

俳句の葉
全一冊紙皮上綴正價貳拾
小判二五二頁郵税四錢

風雅
文庫
雜

俳
の
葉
全一冊紙皮上綴正價貳拾
小判二七四頁郵稅四錢錢

同

風雅
文庫

文庫
正

歌	竹
の	の
菓	琴
全一冊紙皮上綴	小判三四頁郵稅四
正價貳拾	

淨瑠璃集

水谷不倒君校訂

義太夫百番

全一冊 洋布上綴 正價壹
小判 六七八頁 郵稅拾貳 錢圓

次 目

●近松時代淨瑠璃
●大船陣八島國性爺
●賀古教七墓冠大武五爺
●浦島年代記松平家女
●大原問答青葉笛持統天皇歌草法麴迎如來誕生會

全一冊 脊皮上綴 正價六
中判 一〇四頁 郵稅拾六 錢錢

次 目

●近松世話淨瑠璃
●會根崎心中 中 山崎與壽の門松 薩摩 草歌
●生玉心中 中 箱の機三重帷子 心中 萬年草
●傳女郎波 統 清十郎 五十年忌歌念佛
●紙屋治兵衛天の網島 心山 又水の朝日 おふさ重井筒
●紀伊國屋小春の網島 心山 又水の朝日 おふさ重井筒
●淀川波の鼓 忠兵衛 浪舟の飛脚 夕霧 阿波鳴波
●堀川波の鼓 忠兵衛 浪舟の飛脚 夕霧 阿波鳴波
●日本振袖始 町子 豊城 出 入 島
●最明寺百人上 姥 雙生 隅田川 傾城 反 魂 香

水谷不倒君校訂

續近松淨瑠璃集

全一冊 脊皮上綴 正價六
中判 一〇九頁 郵稅拾六 錢錢

水谷不倒君校訂

近松二牛淨瑠璃集

全一冊 脊皮上綴 正價六
中判 一〇九頁 郵稅拾六 錢錢

次 目

●役行者大峯櫻
●山城國畜生塚
●蘭奢待新田系圖
●三大名 龜城 敵討
●道代織室町錦織

水谷不倒君校訂

紀海音淨瑠璃集

全一冊 脊皮上綴 正價六
中判 一〇二頁 郵稅拾六 錢錢

次 目

●會心用輝長源百
●明二天皇職人 景紙鑑切折我
●茂兵衛戀 八卦柱 曆
●お心 八の調 色
●二郎兵衛今宮心中
●百合若大臣野守鑑

次 目

●並木宗淨瑠璃集
●道成寺 現在蛇鱗
●七條連原釜淵兒級巴
●北條時記 額兒級巴
●安倍宗任 州松浦
●後法三宗 見西軍浦
●軍法三宗 見西軍浦

水谷不倒君校訂

紀海音淨瑠璃集

全一冊 脊皮上綴 正價六
中判 一〇二頁 郵稅拾六 錢錢

全一冊 脊皮上綴 正價六
中判 一〇九頁 郵稅拾六 錢錢

全一冊 脊皮上綴 正價六
中判 一〇四頁 郵稅拾六 錢錢

全一冊 脊皮上綴 正價六
中判 一〇四頁 郵稅拾六 錢錢

全一冊 脊皮上綴 正價六
中判 一〇二頁 郵稅拾六 錢錢

大阪 義太夫本 上等半紙 木版摺

○正價壹枚參厘五毛の割

第一號 忠臣 鶴	第二號 全 桃	第三號 全 けんくわ	第四號 全 鹽	第五號 全 鐵	第六號 全 勘	第七號 全 茶	第八號 全 山	第九號 全 天	第十號 全 夜	第十一號 忠臣 喜	第十二號 忠臣 宅
ケ岡	井館	場	館	場	腹切	屋場	科雪	河屋	討	内住家	兵衛上使
大九判 正價六錢六厘	大三判 正價八錢	大六判 正價拾六錢壹厘	大四判 正價拾壹錢九厘	大九判 正價拾錢壹厘	大九判 正價拾七錢壹厘	大七判 正價拾六錢四厘	大六判 正價拾九錢六厘	大四判 正價拾四錢	大五判 正價八錢七厘	大判 正價拾壹錢九厘	大紙判 正價拾壹錢五厘
錢六厘	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

第十三號 二度目寺 岡切腹	第十四號 太功 本	第十五號 局	第十六號 全 尼	第十七號 朝顔 濱	第十八號 全 宿	第十九號 菅 道	第二十號 全 車	第二十號 全 佐	第二十號 全 松	第二十號 全 王	第二十號 全 萩	第二十號 全 祭	第二十號 全 文	第二十號 全 家	第二十號 全 次	第二十號 全 磨	第二十號 全 組	第二十號 全 打
寺	本	局	尼	濱	宿	道	車	佐	松	王	萩	祭	文	家	次	磨	組	打
大三判 正價拾壹錢五厘	大九判 正價拾錢壹厘	大七判 正價拾貳錢九厘	大九判 正價拾錢六厘	大九判 正價拾錢壹厘	大九判 正價拾錢七厘	大九判 正價拾錢壹厘	大九判 正價拾錢參厘	大九判 正價拾錢五厘	大六判 正價拾貳錢六厘	大七判 正價拾九錢九厘	大七判 正價拾四錢七厘	大四判 正價拾四錢七厘	大七判 正價拾貳錢九厘	大七判 正價拾貳錢九厘	大四判 正價拾四錢九厘	大四判 正價拾四錢九厘	大四判 正價拾四錢九厘	大四判 正價拾四錢九厘
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

[illegible]

第八十號	新板歌野	崎村	大判 正價拾八錢五厘 郵稅貳
第八十號	桂川連帶	屋	大判 正價貳拾錢六厘 郵稅四
第九十號	夕霧揚	屋	大判 正價八錢 郵稅貳
第九十號	戀緋八百屋の段	屋	大判 正價拾錢壹厘 郵稅貳
第九十號	鹿子八百屋のおちよ半兵衛	屋	大判 正價拾七錢八厘 郵稅貳
第九十號	昔八白木	屋	大判 正價拾七錢八厘 郵稅貳
第九十號	鈴ヶ森	屋	大判 正價五錢九厘 郵稅貳
第九十號	播州皿鐵山館の段	屋	大判 正價拾貳錢貳厘 郵稅貳
第九十號	ひばり山中將姫雪責	屋	大判 正價拾壹錢五厘 郵稅貳
第九十號	雙級釜	屋	大判 正價八錢 郵稅貳
第九十號	巴壙	屋	大判 正價拾壹錢九厘 郵稅貳
第九十號	累物壙	屋	大判 正價拾壹錢貳厘 郵稅貳
第九十號	土	屋	大判 正價拾壹錢貳厘 郵稅貳
第九十號	木下竹	屋	大判 正價拾壹錢貳厘 郵稅貳
第九十號	陸竹	屋	大判 正價拾壹錢貳厘 郵稅貳
第九十號	全王	屋	大判 正價拾五錢七厘 郵稅貳
第九十號	梅の聚	屋	大判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳
第九十號	由兵衛	屋	大判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳
第九十號	あし狐	山	大判 正價九錢四厘 郵稅貳
第九十號	荳荳高野	山	大判 正價八錢 郵稅貳
第九十號	お妻八うなぎ	山	大判 正價拾六錢四厘 郵稅貳
第九十號	布引綿	山	大判 正價九錢八厘 郵稅貳
第九十號	國性獅	山	大判 正價拾貳錢六厘 郵稅貳
第九十號	龜山在所の段	山	大判 正價拾錢八厘 郵稅貳
第九十號	二秋津島腹切	山	大判 正價拾七錢壹厘 郵稅貳
第九十號	佐倉子別	山	大判 正價拾八錢五厘 郵稅貳
第九十號	反魂吃	山	大判 正價拾錢壹厘 郵稅貳
第九十號	香吃	山	大判 正價拾錢壹厘 郵稅貳
第九十號	和田市若丸初陣	山	大判 正價拾壹錢五厘 郵稅貳
第九十號	合戦	山	大判 正價拾壹錢五厘 郵稅貳
第九十號	比翼	山	大判 正價拾壹錢五厘 郵稅貳
第九十號	塚長兵衛	山	大判 正價拾壹錢五厘 郵稅貳
第九十號	娘景日向島	山	大判 正價拾五錢 郵稅貳
第九十號	清景	山	大判 正價拾五錢 郵稅貳
第九十號	蘭著	山	大判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳
第九十號	待幸	山	大判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳
第九十號	老婆	山	大判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳
第九十號	餅馬追	山	大判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳
第九十號	赤坂並木	山	大判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳
第九十號	膝栗	山	大判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳
第九十號	毛	山	大判 正價拾貳錢九厘 郵稅貳

